
代弁インコはわめかない。

迷宮管理人黒蟻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代弁インコはわめかない。

【Nコード】

N5512T

【作者名】

迷宮管理人黒蟻

【あらすじ】

声を失った少女、悪辣ないじめをする同級生、少女の親であり彼女を恐れている父親。

三人の主人公を軸に進んでいくお話。

前日譚

前日譚

朝食の時、私はいつも一人だ。

一人で朝五時に起き、郵便受けに入っている新聞紙をとり、一面記事を読み、株価の変動をチェックしノートパソコンに打ち込む、そして、だしの素を使ったなめこのみそ汁を作り、並行してベーコンエッグを作る。グリルでつば鯛を焼く、そして、皿に盛り、咀嚼して食べる。

それが私の日常。

けれども、私は一人分だけを作らない。

二人分作る。

勿体つけて話したが、何の事はない。

娘がいるのだ。

妻にだけ似て、私に似たところのない娘が。

その男が私は嫌いだった。

その男は私の大学時代の友人であった。私は人づきあいが良い方ではなかったが、それでも当初その男とまあまあ仲良く付き合っていた。

きつと、その男も私の事を嫌いだっただろう。

その理由は明白で、私たちが愛した女性は共通であったのだ。

もちろんその愛が共有される事はない。互いがそれを許さないだろうし、彼女も二人の男から受ける愛を二つとも受け入れることは出来なかっただろう。

だが、その男が彼女、高砂夕子を知ると私たちの関係はぎくしゃくした。

有体に言って険悪になった。夕子は私の恋人であったし、その男

と夕子は顔見知りと言っただけであって、恋愛に発展する事も経緯もドラマも、何もなかったのだから。

けれども、その男の面の皮は厚かった。私のいない間に夕子と密会することは当たり前だったし、語彙のない私からすれば齒が浮くような言葉や、聞いていてこちらが恥ずかしくなる赤面必死なセリフも数々あった。

夕子はその事を怖気が走ると悪辣な言葉を使って、私には話したが　私は心配だった。

こつ言っっては勘違いされそうだが、その男のしつこさはある種魅力でもあるのだ。

私はそれが魅力であるとは認めたくはないのだが、草食系男子と言言葉が生まれて久しい現代ではある。古今を問わず積極的な男は女性にとってやはり魅力的なのだろう。

実際、彼女がその男の事を話す時はいやそうな顔ではあるが、どこか熱があるように見えたのだ。

それが単なる親しみか　恋情であるかは私には判断がつかなかった。

私の不安は同時に自身の魅力のなさでもあった。話すことと言えば空手の強い弱いの武勇譚。歴史小説の武将たちの死生観。

その男のように愛を謳う詩集を読むことはなかった。

大学を卒業して、東京の輸入関係の大手企業アルファに就職した。彼女も別の中小企業に就職した。その男は知らん。

私たちはまだ恋人同士であった。恋人たちが夢見る結婚と言う一大イベントの話が出ないわけではなかったが、私も彼女も社会で自分の力がどこまで通用するのかと言う事を試してみたい気持ちの方が強かった。

けれども、不思議と私たちはくっついていて。

彼女はよく言えば奔放、はっきりと言えば毒舌家、悪く言えばサディスト（弁明しておけば私はマゾヒストではない）。

私は空手はやるが粗暴と言うことはなく、口数の少ない陰気な人間であった。陰気である事を卑下することはないが、やはり明るい人間と言う事がプラスとする社会の体質から考えればマイナスなのだろう。

こんなちぐはぐな二人がくつついているのはそれなりに理由がありそう、その実なかつたのかもしれない。

社会人となって恋人としての関係が冷えていくことは、あった。ただ、学生時代に比べてというだけで、それほど疎になったということはない。

けれども、そんな余裕のある時代は長くは続かない。私が就職して二年、バブル崩壊による平成の不況が始まった。

今では信じられないかもしれないが、昔は一ドル百三十円台だった事もあるのだ。だが、周知の通り国はやせ細り貧しさが蔓延るようになった。

その災禍は私を巻き込んだ。
リストラだ。

終身雇用制度がまだあった時代だったから、まさか辞めさせられるようになるとは思ってもよらなかった。

その後私は職を転々とした。就職先はなくなかったが、大手企業であるアルファに勤めていたという色眼鏡で私の能力以上の能力を企業側は期待した。そして、スキルがないと解ると慌てて手のひらを返して私の肩をたたいた。

夕子はそんな私を見て同棲しよう、と言ってくれた。

彼女の狙いは解った。単純に生活費を共有のものとすれば当面は凌げるというのだろう。

私としては複雑だった。今でこそその判断は正しかったと言えるが、プライドがそれを拒否していた。

けれども、私は受けてしまった。しかも快く。

「私と暮らすのが……いやか？」

ああ、これが若者の言う『萌え』なのだ、私はその事が今でも

覚えている。

天然の栗毛の髪はウェーブがかっていて、長くしたらいいのにと私は思うのだが、で短くしている。女性にしては背が高いが、それでも私よりは低いからどうしたって上目遣いになる。

夕子の懇願は、いつも毅然としてかつこいい彼女にしてはすごく可愛らしかった。

そうして私たちは同棲するようになった。食事は基本的に交代制だが、アルバイトをしている私が作るのが専らだった。彼女が作る料理も美味しいのだが、彼女が言うには「人が作ってくれた料理を食べる方が美味しい」とのこと。

一緒に住むようになって、よくある幻滅と言うことはなかった。代わりに気がついたことは、彼女が他人にも自分にも公平に厳しく、優しいということだった。

幻滅が起こるのは地が出てしまうからなのだろう。ものすごく可愛いくよく気がつく子が家ではすぐくずばらで横柄であつたら、その可愛さは風雨にさらされて剥がされたメッキと同じであるだろう。彼女にはそれがなかった。いづどこにいても自然体。それが彼女の美点であるだろう。

そして、私は彼女と一緒に居られてますます好きになった。

そんな生活を続けた二年後、私は地元のS県F市の印刷業を手広く営む企業に就職することになった。母の紹介であつた。

私はその申し出を受けた。親父が死に、母が一人となって肉体的にも衰えを見せた母が心配であつたという事もある。

その事を夕子に告げるタイミングは逸していた。そのころ勤めている会社で大きな仕事を任されたと喜んでいる夕子を見て、私は一緒に来てくれと言うことにためらいを覚えた。思えばお互い、長年付き合っているのに結婚に踏み切らなかつたのは自分の力を試したいという克己心が強かつたからだ。

だが、私は切り出した。

「夕子」

「なんだ、吟哲」

いつもの仏頂面ではなかった。それもそのはず、今日の食卓に並んでいるのはすべて夕子の好物であるものばかりだったからだ。機嫌はいい。けれども私はなかなか踏み出せない。

だから、夕子が主導権を握った。

「就職の事についてか？ S県だったけ？」

私は驚いた。

どうして、呟く私に夕子は怖い笑みを浮かべる。

「電話があつたんだよ、吟哲のお母さんからね」

それを言つと、私は懺悔をするかのように夕子に洗いざらい告白した。

そして、最後に気の利かない一言。

「俺に……、俺についてきてくれないか？」

そして夕子は

破顔。そして、どこか芝居がかったセリフを呟いた。

「だが、断る」

一瞬何を言つたか解らなかった。間をおいてそれが拒否である事が実感する。

私は、そうかと言って視線を落とした。

少しは自信があつた。彼女に愛されているという自信、その愛が彼女に伝わっているという自信。

そう思うと私は内心で自分の非を責めた。

そんないじけた私を見かねてか夕子はいつもの仏頂面で声を荒げた。

「おい吟哲、どうしてなんでとか、お前は黙つてついてこいとか言えないんだよ！？ あん？」

私はそれに応えられなかった。喧嘩腰の彼女の言葉であつたが、彼女なりの優しさで包まれていると気が付けなかったからだ。

彼女は続ける。

「私が断つたのはな、お前を嫌いになつたとか別に好きな男が出来

たとかじゃ、断じてない」

本当か？ 言葉にしたかったが、甘えているようで嫌だったから黙って聞いていた。

「単にこの不況だ。お前が向こうで就職しても、クビに合わないとは限らんだろう？ それなのに私がこの会社辞めてついていったとしたら、まさしく最悪だ。英語で言うならワースト」

だから、呟く彼女は私の眼を見ないで言った。

「二年やる。それまでに頑張ってこい。そうしたら私が、お前のお嫁さんになってやるよ」

よく見ると、頬が上気していた。鏡を見ていないから想像になるが、彼女に告白していた私もきつとこんな顔をしていたのだろう。

「……こんなこと、女の私に言わせんな……バカ」

そうして、私は六年ぶりに故郷の土を踏んだ。

私は二年間努力した。そのころには二十八になっていた。若い若いと思っていたが、だんだんと無理がきかなくなるということを実感しつつあった。彼女から届く手紙も一杯増えた、彼女のもとに届く手紙もそれと同じくらいだろう。

そして、夏休み夕子とともに彼女の父親に会いに行った。

一目見て彼女は母親似ではなく父親に似たのだろうという事に気が付いた。

気難しそうな仏頂面。意志の強い瞳。まっすぐに引き結ばれた口元。どれをとつても彼女の鮮烈なイメージに似ている。彼女の母親はニコニコとされていて、彼女の遺伝子を継いだのは栗毛の髪くらいなのかなと思った。

仲良くできるかな、と思ったが私が空手をやっているという事を知ったら途端に親密になった。

思えば夕子も空手が好きだった。意外に思うかもしれないが、大学の頃空手の大会で彼女が私のおっかけをしていたのが私たちが付き合うことになったきっかけでもあるのだ。

(似たもの親子だな)

言葉には出さないものの、そう思った。

結婚式は、つつましいものだった。友人と会社の同僚、そして義父母と私の母親のみが列席し、私たちは結婚した。

私は幸せかと尋ねられれば、幸せだった。

あの日まで。

娘が生まれた時、私は病院の廊下で夕焼けを見ていた。陣痛が始まったと聞いて、私は上司に理由を説明して退社した。電車を使い、タクシーに乗って病院にたどり着き、私は子供の誕生を待った。

そして、黄昏時。冬の晴れた日。夕焼けの紅が最も鮮烈になった時 産声が上がった。

「おめでとうございます、女の子ですよ」

白い布にくるまれて目を閉じたまま泣いている私の娘を見て、私は知らず涙を流していた。

看護婦から夕子に渡され彼女は今まで見た事のないくらい安らかな表情をしていた。

私は彼女の側に行き、娘を渡された。抱き方がぎこちなかった私は、娘を落としそうになった。出産後なのにまだ余力のありそうな妻にこっぴどく怒られた。

「この子の重みが何か分かる？」

私は黙って妻の言葉を聞いた。

「命と幸せの重みよ、吟、いや……あなた」

……重い。

私は娘の重さをかみしめながら、これからこの子の幸せを想いたいと思った。

娘の名前を夕紅と名付けたのは冬なのに曇ることなく快晴であり、あの日の夕焼けのように鮮烈で強くあれと望んだからなのだろう。

そのころ、私は一軒家を三十年のローンを組んで買った。三人で住むには広いから母も呼んだのだが、父との思い出がある実家を手

放すのは惜しいとして呼びかけには応えてくれなかった。

私は仕事が忙しいときでも、なるべく早く帰った。夕紅は夜啼きが酷く、次の日クマを作って入社するという事も稀ではなかった。

そんな幸せが続いた日、娘も大きくなって六歳。小学校に上がる時期だ。

私と因縁のある、あの男があらわれた。

誰であるかはすぐにわかった。人間、好きであることよりも嫌いであるという感情の方が強いのだろう。

夕子を思っていた、私のかつての友、その男の名は

「久しぶりだな、水元」

「金子、勝親」

その風体から言って今どんな仕事をしているかはわからなかったが、堅気ではないような印象を受けた。

いやらしい笑みを浮かべている。いやな奴ではあったが、ここまですで腐った顔を出来るような男ではなかったはずだ。

「変わったな」

私は告げる。

「お前は変わんねーな。まあ、どうでもいいや。なあ、夕紅は元気か？」

私はその言葉に、言いしれぬ危機感を感じる。

そして、金子は続ける。

「おいおい、シカトすんなよ？ 俺の娘は元気かって聞いたんだよ」

「それにしても、夕紅、ね。まったく人の娘に何て名前つけてんだよ。お前は相変わらずセンスがないな」

「金子、どういう意味だ！ ゆ、夕紅は、あの子は、俺の」
「声を荒げた俺を金子は嘲笑した。そして弄ぶようにその蛇のような眼で恫喝し、悪魔のような舌を動かす。」

「俺と夕子が寝たってことだよ、水元吟哲くん？」

私はその言葉に、ふらついた。目を回して平衡感覚が麻痺したよ

うに倒れそうになった。

金子は笑いながら大丈夫かよ、と声をかけた。私は　私は逃げた。

その日、帰ると夕子は幸せそうに眠っている夕紅を見ていた。

私はいつものようにただいまと言う言葉を告げる事が出来なかった。仕事もどこか呆然としていて身が入らなかった。

「お、いつの間に帰ってたんだ？　ちゃんとただいまと言えよな」

「あ、ああ、悪い」

歯切れの悪い私に彼女は何か感じ取ったのだろう。

「どうかしたか？　あ、私の弁当が不味かったとかか？　許さん！」

「あ、いや、弁当はいつも通り美味しかったよ」

「嘘だな」

私はびくつとした。私の取り繕いが夕子にばれたのではないと思つて気が気でなかったからだ。

だが、違ったようだ。

「卵焼きあっただろ、あれインスタントで、しかも賞味期限切れてた。腹でも壊したんだろう？　悪かったな」

私はほつとしたが、結局何も解決していない事に気づく。けれども図体ばかり大きくて胆の小さな私は、いつものように夕子に問いただすことは出来なかった。

その日から、私は残業を入れるようになった。表向きは仕事が忙しくなったからということだったが、娘と向き合つのが恐かったというのが実際のところだ。

何度も、本当の事を問質せばよかった思ったがその勇気が出せない。

そして、私は後悔した。

夕子が、死んだのだ。

葬式の時、私は義父に殴られた。老いて力をなくし、技量に乏し

いスピードで、それでも私の心に大きな一撃を与えた。

夕子は交通事故で死んだ。あんなに生命力にあふれ、快活で、そして誰よりも魅力的だった夕子がそんな事で死ぬのなんて思いもよらなかった。車に乗っていた男は飲酒運転をしていた、私よりも若い男だった。

怒りや憎悪は浮かばなかった。私自身色々な事があって疲れたというのが本音で、これ以上エネルギーを使うのは精神的に辛かった。葬式を終え、遺品を整理しているときに妻の部屋に入った。寝室は一緒だったが、家を設計するときに広く作ってしまったから部屋が余ってしまったのだ。同じ家であるのだが、妻の部屋に入るのこれが初めての事だった。

結構ガッツな所がある妻の部屋にしては綺麗に片付いた部屋だった。思えば夕子は綺麗好きだ。死んだから、そんなよく覚えている事でさえ忘れてしまったのだろうか。

そして、書斎机を調べていると一冊の皮の本を見つけた。

「日記か？」

ばらばらと捲ってみる。読みやすい文字だった。誕生日プレゼントに送った万年筆を大事に使っていてくれたようだ。

そして、読み返すうちに七年前の日記はあるか、と調べた。

そう　夕紅が生まれた前年の事だ。

私の疑念がもういない夕子の尊厳を汚し、彼女からの信頼と私の彼女に対する信頼を壊すのは忍びなかったが、私は確かめなかった。そして

記述があった。

一月某日　金子に会う。久しぶりに会ったから、誰だかわからなかった。変わったな。だが、変わらないのはうつつとさ。

妻の文体は熱がこもっているようだった。本当に金子が嫌いであるという熱が。

そして、ぱらぱらとめくって行って、水で濡らしたかして読めなくなっているページがあった。そしてかろうじて読めるところに「金子」の文字があった。

私は不安に思った。それ以降はあの男の影があるようには見えなかった。

そして、つい最近の日記を見て不安が再燃する。

四月某日　　吟哲と、別れたい。

その言葉だけ、書かれた日記があった。

私は二人分の朝食を作る。私と……私の娘ではないかもしれない少女のために。

ブラコン、はブラジャーコンプレックスだと思っていた。小学生なのにおっぱいがでかい子なんかに起きるもの、私、朝野千里はそう思っていた。

けれども一般的な常識は、兄弟に対する強い執着であるということうらしい。その事を知ったのは小学三年くらいになってからだったと思う。

「千里ってブラコンだよな」

それを実の兄から言われた私は、多分筋金入りなのだろう。

昔からの遊び相手は姉たちではなく、兄だった。兄が大学生になつてから遊ぶ時間はなくなったけれども一番遊んだのは兄だった。

私たちの遊びはボードゲームだった。人生ゲームやドンジャラといった一般的なものではなく、インカの黄金やガイスターといった本格的なものだった。

子供のころから同年代の女の子たちがやるような遊びにはときめ

かなかった。幼稚園の頃砂遊びしようと言った女の子たちを無視した事もあった。その後、そいつらグループにいじめられた事もあったが、たいした問題ではなかった。

小学生に上がる頃同じく高校生に上がった兄が友達とボードゲームで遊んでいるのを見て混じりたいと行ったのが私のボードゲーム歴の始まりだった。

最初はカタンだった。サイコロを振る運の要素が強いゲームだなと言うのが私の最初の見方だったけど、何回かやっていくうち位置どりや戦いなど戦略性の強いゲームであると見なおした事ではまっぴりだった。

それ以来、兄たちと遊ぶ事が多くなった。

遊びはボードゲームに限らず雑学的な論理クイズもやった。

「カメラを持った男が女性に『私が正しい事を言ったら写真を撮らせて下さい、間違っていれば写真を撮りません』と言った。この女性の写真ばかりかキスマまでしなければならなくなった。さて、どうしてだと思おう？ 千里？」

私はその問題を聞いた時、何を言われているのか解らなかった。十分ほど考えて、男の言う『正しい事』と言う部分がネックになっているのだらうと思っただが、それ以上は解らなかった。

兄の答えを聞いても、それがどうしてなのか解らなかった。兄は今度会う時までの宿題だ、と残し大学のある東京へと帰っていった。それから兄が家に帰ってきたのは私が小学五年に上がり、大学を卒業しF市にある会社に勤める事になった時だ。

と言っても兄が家に住むことはなかった。お母さんは不満がっていたが、お父さんはもう餓鬼じゃないんだから好きにさせたらいいと、ニヒルな顔で内心兄の成長を喜んでいる節があった。

けれども、私は少し兄の様子が変わった事に気付いた。なんとなくか元気というか、覇気が感じられなかったのだ。元からそんなに活動的な人ではないのは解るが、私に久しぶりに会って宿題としていたクイズについて聞く事をしなかったのは、兄の性格を考えてみ

れば不自然だった。

その事を尋ねてみると、兄は私にだけ打ち明けてくれた。

「俺が就職したかった会社じゃなかったんだよ」

この就職氷河期に贅沢なことだが、と自嘲しながらも納得していない響きを含んだ声で兄は語った。

兄はゲームを作る会社に就職したかったようだ。もちろんコンピュータを使ったゲームではなく、ボードゲームやカードゲームのゲームデザイナーとなりたかったと兄は口惜しげに唇を噛んでいた。その気持ちはわかる。兄が傾倒しているボードゲームの所持数は三十を超える。その事からでも兄の熱情の一端を知る事が出来るだろう。

そして、私が中学に上がった頃兄はリストラにあった。

それを聞いてお父さんは酷く怒った。お母さんは責めることはせず優しく家に戻ってくるんだと行った。姉さんたちは自身の高校受験や大学受験で忙しく何も言うことはなかったが、なんとなく兄を軽視するような冷めた感情を持つようになった。

私は、難しい事は解らなかったけれども兄をリストラした人を恨むようになった。

兄は頑張っていたのだ。メールで送られる言葉からもその心情が読み取れる。たとえ、一番やりたかった仕事ではなくても好きになろうと努力して慣れない仕事を頑張って会社に尽くしたのだ。

それなのに……、私は歯噛みした。

兄は家には戻らなかった。お父さんの怒りの手前もあるということだった。

一度だけ、私は兄が住むアパートに行った事がある。綺麗になっていた事に驚いた。失礼と思っていたけれども、押し入れの中を調べた。中は空っぽでここにあるはずのボードゲームは何も入っていないかった。

「売ったよ」

兄は痛々しい笑みを浮かべて私に告げた。

私の恨みはますます増えた。けれども、ただか中学生が会社の人間に何かできるわけがない。それに私は兄をリストラした相手の顔すら見た事がないのだ。

あまり仕事の事を思い出させるのも悪いと思ったので、私は中学の同級生の写メを見せた。中学生がケータイを持つのか、と感心すると同時によく親父が許したなと驚いている様子だった。

そして、ある写真を見た時……兄は反応した。

「こいつは？」

その子は栗毛の長い髪をした女の子だった。同性の私から見てもふんわりしていて可愛かった。

「兄さん、中学生に手を出したらハンザイだよ？」

私は茶化しながら言ったが、兄の反応は全く別のものだった。

「こいつ、水元夕紅って言うんじゃないか？」

その通り、と聞いてから気づく。

「どうして知ってるの？」

私は問い質した。私は心配になった。嫉妬というものではなくて、ホントに兄が中学生に手を出すんじゃないかと思ってた。

けれども、答えは私の危惧していたものと別なものだった。

兄は、荒げた呼吸を整えてから告げた。

「こいつの親父に、俺はリストラを告げられたんだ」

私の心臓は、高鳴った。

夕紅とは別に友達というわけではない。別の小学校だったし、よく話すというわけでもない。

挨拶をするぐらいの知り合い、それが私と夕紅の関係だった。

そして、兄が暗い笑みを浮かべ呟く。

「こいつを …… いじめてやってくれないか？」

私、水元夕紅は朝の六時に起きる。

もっと早くに起きたいんだけど、なかなか起きられない。十一時に眠るからなのかな。けれども、それ以前に寝ようとしてベッドにもぐった事もあるけれど、眠くならないので私は結局十一位時に寝るしかない。

顔を洗って歯磨き。自慢ではないけど私はニキビも虫歯もなかった事がない。この習慣が効いているのだろうな。継続は力なりとは、まさに金言だね。こんでいにゅえーしょんいずばわー。

ニユースをつける。めざましテレビ。アナウンサーの子、可愛いなあ。って、私よりも年上だけだね。

今日の御飯はなめこのみそ汁とベーコンエッグ、あとつぼ鯛。吟哲さんの料理は美味しそうだな。

いただきまーす。
手を合わせて、まずつぼ鯛に箸をつける。骨をよけるのにけつこう時間をとってしまう。

CMに入って地方の天気予報が流れる。けれども、私の住んでる町の天気予報は流れなかった。でも、近くの町の予報は出たからそれから類推して多分雨が降ることはないだろう。じゃ、傘は持って行かなくてもいいか。

ごちそうさま。

美味しかったなあ。でも、惜しむらくは栄養が偏っている事かな。そう言う意味では給食はすごいな。

でも、最近は私給食を美味しいと感じた事が少ないけどね。

吟哲さんが読んだ新聞を見る。私が見るのはもっぱらテレビ欄だけだね。

そして、私が楽しみにしているめざましテレビの占いが始まる。

私は二月十三日の水がめ座。

昨日は結構悪くない順位だったけど今日はどんなものかなあ。こいうのって期待し過ぎちゃいけない。物欲センサーならぬ、幸運

センサーに反応しちゃうからね。

けど、そんなものとは関係なく私の順位は最悪だった。

十一位。

テンション下がるなあ。テンションは張られているものだけ。

十二位じゃないだけまし、と考えるのはめざましテレビの知らない素人だと私は思う。

十二位にはラッキーアイテムという不幸を回避するものが提示される。それが十一位にはないのだ。一応、ラッキーアイテムみたいなものは出るけど、十二位は大々的にやっているから幸運パワースティックに考えて十二位の方が強いように思う。少なくとも私はそう思っている。

御飯を食べたら流しに皿とお碗を持って行って洗う。それは一人分だけ。吟哲さんは自分の分は自分で洗うような習慣がついている。だから我が家では洗い物がたまるということはない。

それが終わると洗濯ものを乾燥機に入れる。お母さんがいけば外に干す仕事をやってくれるのだからうけど、うちにはいないし雨が降ったらやばいので仕方ない。だから、うちの電気代は結構なお値段になる。

火の元に気をつけて私は学校へと出かける。これまた自慢ではないけど、今のところ私は小学校から中学一年まで皆勤賞なのだ。おかげで図書カードをもらえるので嬉しい限りだ。

といっても、吟哲さんから月に十万円ほどもらえるのだからそれは雀の涙と言えはそつだ。

十万、と言ったら中学生がもらう小遣いと考えたら大き過ぎるのは私でも解る。けれども、それはお小遣いだとしたら話だ。

私が貰っているのは生活費だ。月十万で一か月を過ごす。食糧費、石油代（これはもっぱら冬に高い）、電気代（うちはオール電化なので高い、その代わりガス代は使わないで済むので多めにみられるけど）、水道代、服飾代、その他もろもろ。

それらの管理を子供である私がすべてこなしているというのは小

学校のころに友達に聞いたら、おかしいことだと言われたのは覚えている。確かにおかしなことだと思う。子供に任せて別な事に使われてもしたら、大変なことになるだろう。けれども、私は金銭感覚が同年代の子供に比べてしっかりしている。まあ、裏返せば少々齷齪ではあるけどね。

そんな生活が、七年続いたんだな。私の生きてきた半生よりも確実に多い。

二十分ほど歩いて学校にたどり着く。

学校についてまず先に行くのは教室ではなく、スクールカウンセラーの先生が使う部屋だ。私はその部屋の合いカギを持っている。それは特別な処置であると思う。念のため言っておくけどこういう管理体制がずさんな学校ではないのだ。私が鍵を持っていられるのはスクールカウンセラーの先生の判断からだった。

先生はまだやってこない。正規の人間ではない分、時間に関して少しルーズなのかもしれない。

まず、部屋に行きそこに置かせてもらっている学校の教材やノートが減っていないかを確かめる。減っているわけがないのだが、確かめないと私の気が落ち着かないので矯めつ眇めつ眼を凝らす。

そして、終つて、気分を落ち着かせる為にミントティーを飲む。もちろん私が持ち込んだものではなく、部屋の備品だ。カウンセラーの先生には承諾を得ているのでこれは私のほんの小さな贅沢でもある。

紅茶を飲み、私は気を引き締めて 教室に向かった。

二年に上がり教室は三階になっている。そこそこに教室はクラスメイトが入っていた。八時を過ぎているからだろう。

私が教室に踏み入るのをためらっていると、背後から首に衝撃が飛んできて私は倒れ込む形で教室に入った。

「おはよー」

振り向いて見上げるとクラスメイトが立っていた。にやにやと笑うわけでもなく、無表情である。そして言葉は私に向けられたもの

ではなく、ほかのクラスメイトへの挨拶だった。

そして、私を軽く踏みつけて教室に入り談笑へ移る。私に視線を送った人間は少ない。それでもマイノリティが向けた感情は同情というものではなく、嘲笑、侮蔑、嫌悪、それらはすべて自意識過剰ではなく私に向けられたものだった。

よろよろと立ちあがり、私は私の机に向かう。

白いチョークで大きく『なんで生きてるの?』と書かれていた。今日は少なかった。それにほっとする。それが間違った感情の反応だとわかってはいたが、私はほっとするしかなかった。

黒板消しを取りに行きながら、私は笑われた。それに耐えるしかなかった。それでも瞳が潤むのが解った。

私、水元夕紅はいじめられている。

それが始まったのは一年前からだ。クラスが変われば終わると思っただが、終わるどころかますますひどくなった。

何が原因なのか、何が悪かったのか、何が間違ったのか。私の非すら私自身解ることなく、そしてどうすればいいのかも何一つわからなかった。

それでもわかってくれる人が欲しかった。それはスクールカウンセラーの先生であり、部活の先輩でもあった。

けれども彼女たちは私を救ってくれるわけではなかった。それを責めることはしない。だって、それを望んだわけではないのだから期待しているわけじゃない。

私が、私を救ってくれる人は××さんだった。けれども、××さんは私と向き合ってくれない。私を、私を。いや、いやいや、いや、そんなことはない！絶対ない、そんな事がある訳がない！

気がつく、私は眠っていた。瞳が涙でぬれているのが解った。どんな夢を見たかは忘れてしまったが、きつと悲しい夢なのだろう。そんな夢ばかりしか最近は見えていない。

「おはよう」

先輩はせめて私の手助けになるようにといい話を書こうとやっきになっっている。それに対して私が文芸部でやっている事と言えば読書感想文を書き、それをもとにして図書室にPOPを作る事ぐらいだ。「君の性癖について聞きたい」

先輩の顔は真面目だ。けれども、安心してはいけない。先輩は真面目な顔をして私の胸や尻を触ってくるというのよくあることなのだ。ホント、よくあつてはいけない事なんだけどなー。

『なんですか？ 藪から棒に』と漢字で書く。先輩は、よく書けるなど感心していたがすぐに本題に戻した。

「私が思うに、君はマゾヒストなのではないか？」

『違いますよ』

私は何度も使っている否定用のメモを見せる。

けれども、先輩は引き下がらない。

「ならば、どうして君は学校に来る？」

『それは、皆勤賞が欲しいから』

「建前だろう、それは。単刀直入に言おう、なぜいじめを受けているのに逃げない？ 家にこもらない？ 誰も頼らない？」

『それは……』

メモに書きながらも三点リーダーを使うとか。なんとなく演技じみて嫌だったが、癖なのだ。

先輩は私の言葉を待った。

けれども、私の頭の中が空っぽになったかのように何も浮かんでこなかった。

溜息をついた。私ではなく、先輩が。

「重症だな。そんな生き方は辛いだろう。だが、信じて欲しい私はお前の味方である、とな」

『……はい』

「じゃあ、帰るか。戸締りは私がしておく。早く帰りな」

『お願いします。では、先輩。さようなら』

私は、先輩にそのメモを見せるとハアとため息をして、頬を私の

方に向けた。

何をしているのだろうか、と首をかしげると先輩は、

「さよならのキスだ、ほっぺで許してやる」

私はメモにこう書く。

『バカ!』

それを見た先輩は、

「ほほう、ツンデレというやつかね？ 私は嬉しいよ！ 必ずや、

夕紅さんのデレイベントを発生させて見せる！」

とりあえず、頭を小突いた。

家に帰って夕飯の支度をしようと思ったが、冷蔵庫に思ったよりも食材がなかったので二十四時間やっている大手のスーパーへ、買い物袋を持って自転車で行った。

ここは肉の安売りが魅力なのだけれど、私はあまりお肉が好きではない。太るし油っこいし、あまり好きではないのだけれども、六時を過ぎているしあんまり遠くに買い物に出かけるのは気が引けた。そうでなくても最近夜は物騒だ。近くのF市の方ではサラリーマン狩りが出没しているというし、郊外でも一応心配して、心配し過ぎということはないだろう。

野菜のコーナーに行くところとクラスの担任の先生に出会った。男の教師で体育が担当の先生だ。私はあまり好きではなかった。

暑苦しいという事もあるし、熱血を売りにしているのに頼りないというのがこの先生の評判だった。

そして、そんなだから私はこの先生を頼る事が出来なかった。

「お、水元か？ こんばんは」

私は軽く会釈して過ぎ去った。

先生は無愛想な奴だな、と小さくつぶやいたが聞こえた。同時に、先生は私が声を出せなくなった事に気づいていないなと感じた。

買い物済ませ、私はバラエティ番組をつけながら料理に取りかかった。

二人分だ。

私は夕飯を二人分作る。

私と、吟哲さんの分。

三十分ほどで出来上がる。それでも私はまだ箸をつけない。それが私の習慣だった。

いや、習慣じゃない。期待をしているんだ、私は。

一緒に御飯を食べる事がなくなって七年。それでも私はいつか一緒に夕飯を食べる事が出来るのだろう、そんな期待を盲目的に信じているのだ。

それでも九時まで、としている。待つのは。

その間私は小説を読んでいる。

結局、その日も吟哲さんは九時までに帰ってこなかった。

料理を温め直して食べる。美味しい。謙遜しても。

でも、楽しくないなあ。

泣きながら、私は料理を食べた。

その日、吟哲さんはプレゼントを買ってきた。

前日譚（後書き）

お初にお目にかかります。黒蟻と申します。

この小説は当初電撃大賞に送ろうとしていたものなのですが、あまりにもラノベ的ではないということと自らの研鑽のためにこの小説家になるうに投稿しました。

それでは、楽しんでいただければ幸い。つまらなかつたら申し訳ございません。

コメントお待ちしております。

1章（前書き）

タイトル詐欺だよなー。詐欺ってほどでもないけど、意味は本編を
ご覧あれ！

1章

会社を終え、私はいつものように駅前で榎原彦作と仲間たちを待った。

疲れはあったが、なんとかなるだろう。そんなふうに思いながら二か月前の事を思い出していた。

「礼！」

「「ありがとうございます！」「」

道場の練習は午前中で終わり、私は汗を流すため市内の風呂屋に行こうと思っていた。更衣室で着替えようとしてい

ると高校生の榎原彦作に呼び止められた。

「吟哲さん、ちょっとこの後時間いいつすか？」

「いいですか」

私は小うるさく言い直させてから、彦作の話を聞いた。

「サラリーマン狩り？」

一緒に風呂屋に行つて私は彦作の話を聞いた。

「そうつす、じゃなかった、そうです。最近F市でリーマン狩りがやつてるらしいんすよ」

訂正する事も面倒臭くなって、私は彼の話を聞いた。

表だつて警察沙汰になった件に隠れながら、被害者が警察沙汰にシなかつた事件があると彦作は言う。だが、どうし

てそんな事を知っていると尋ねた。一介の高校生がそんな情報を知っているのは不思議だ。

彦作は人懐っこい笑みを浮かべ、

「邪の道は蛇つすよ、吟哲さん」

それ以上聞くな、そう警告されたようだった。顔に包丁傷のある私に物怖じせず言ってくれる。

「それで、私にどうして欲しいんだ？」

そう尋ねると彦作は人懐っこさに隠れた残忍な笑みを浮かべた。別段悪い顔をしているという意識はないのだろう。

地顔であるとしたらさぞかし女子供に恐れられそうな顔だ。実際、道場の子供たちは彦作と手合わせした時泣いている

子供いる。それが痛みではなく、恐怖であると私は初めて知った。

「犯人逮捕に協力してほしいんす」

良いだろう、と私は首をふらなかつた。

「私のメリットは何かあるのか？」

正直、子供の火遊びに付き合っているほどお人よしでもなかつたし、そもそもそれは警察の仕事であって一市民の仕

事ではない。これを好き好んでやろうとする人間は偽善者か小説や漫画の登場人物くらいだろう。

そう言うつと彦作は掌を広げて私の前に出した。

「これでどうです？」

恐らく、金の事を言っているのだろう。だが、はした金だ。

「あまり大人を舐めるな。五千で動く人間がどこにいる？」

そう言うつと彦作は破顔した。

「じゃ吟哲さん、俺からも言わせてもらいますよ？　あまり子供を舐めないでください。月五万でどうですつて言つて

んですよ？」

桁が一個上がった。二個だったら、逆に私は参加しなかつただろう。その金が汚いものや危険なものであると考える

のが妥当だからだ。

私は肯く前に一つ尋ねた。

「お前は どうして、こんな事をしようとしているんだ？」

「吟哲さんは、分給いくらっすか？」

返された問いに私は面食らった。古びた頭で計算しているうちに、彦作は応えた。

「俺って頑張った奴が報われないのって嫌いなっすよ。んで、現代社会で共通認識が一番高い報酬って『お金』じゃ

ないっすか？ 他人のもんでもそれを奪うってのは俺の一風変わった正義感からして許せない事なんっすよ」

ほう、と感心した。まあ、その感心は二秒と持たなかった訳だが。「そのお金を没収しようと思うんすけど、盗られた人も解んない訳っすしねー。まあ、そこは懐のさびしい俺達に恵ん

でくれたという事で、俺達の『報酬』という事にしようと思ってるんすけどねー」

例によって悪い顔をしてから、口がすべったという事に気づきあわてて取り繕うとしていた。

この少年と深く話すのはこれが初めてだが、善人ぶったところのない奇妙な矜持のある悪人であるな。私の評価はそ

んなものだ。かいつまんで言えば魅力のあるガキというものだ。

「懐のさびしい、というのだったら私なんかを雇う必要はないんじゃないか？」

「ま、それは冗談っす。それに俺ら頭こんなじゃないっすか、金パじゃないっすか？」

確かに彦作は見た目を良くしようとしたのか髪を金髪にしている。師範代にバリカンで無理やり切られそうになった

ところを見た事があるが、必死に地毛ですと言っていた一場面もあったなと思ひ出す。

「ここいらで頭を派手に染めてる奴は高校生か大学生くらいです。でも大抵は高校生です。なんつーか、校則とか厳し

いと反発したくなるお年頃ってやつつすよ。あ、吟さん子供さんいるんでしたっけ？」

私はああ、と静かに頷いた。だが、彦作の眼は見れなかった。なんとというか、胸を張って娘の事を言うのは私には自

信が足りなかった。

というか、吟さん？

私は再び訂正させようと思ったが、会話の主導権は彦作がとっていた。

「そんなんで、ポリさんに補導とかされた時に保護者がいないと困るんすよ。めんどくて。五万の報酬はそれ込みです

」
「成程」

私は納得させられた。確かに、それなら私はうってつけだろう。大人であるし、荒事にも一応慣れた部類である。

そして、彦作は問うてきた。

「じゃ、吟さん。ボディガード……受けてくれるかな!？」

「ああ」

「そこはいいともでしょ！ はあ、テンション下がる……」

何か知らないが、突っ込まれた。私は間違ったのか？

それから二カ月後の現在に戻る。

腕時計を見ながら彦作とお気楽な仲間たち三人、そして女の子まで連れてくるのはどうかと思っただが、彦作に強引に

押し切られてしまったため仕方なく納得はした。

「お疲れーっす、吟さん」「ういっす」「ガハハハハハ!」「ここ、

こんばんは、吟ちゃん」「グッドイブニングって言

うんだっけ?」「しらねーよ、ナイトじゃねーの?」「グッドナイ
トってかっけーよな」「戦国武将で言ったら前田慶

次って感じだな」「ええ、ただかつちゃんだろ!」

頭は見事に染まった連中だが、言ってることは歴史マニアという
感じだ。しかし、こいつらこんな事をやってて勉強

は大丈夫なのだろうか?

「私は可児だと思っただがな」

と、つい話に入ってしまった。

失言だったかな、と思っただが喰いついてきた。

「あー! 笹の才蔵!」「アタゴゴンゲンを信奉してたんだっけ?」

「う、うん。そうだよ」「でも、福島って印象薄

くね?」「ばっか! 正則は猛将の皮を被った知将だぞ!」「わ、

私はせいしょこさんの方が好きかな」「だよなー!

忠臣って感じだし」「……」

…… 毎度思うのだが、こいつらが私を雇ったのはつつこみ役がい
ないからブレーキがなくアクセル全開だからなのだ

ろくなあ。

「いいか? 今日もここいらの見回りをする。聞き込みも出来るだ
けするように、時間は一時間。二人一組で動け、一

人には絶対なるな。解ったか?」

「了解だ、吟さん」「ういつす」「がはははは任されおう」「オッ
ケー」「わ、わかったよ……吟ちゃん」

そして、いつもの通りの事ではあるのだが自分のやっている事が遊戯なのでないかなと思ってしまう。

私は、出来るだけ真面目に言った。

「よし、ジャンケンだ」

組を決めるためのものだ。最初、固定の方が連携もとりやすいだろうし不測の事態にも対応しやすいと意見したのだ

が、この若者たちは、

『えー、席替えみたいで楽しいじゃないですか？』 『曹操』 『ガハハハハハ、インディードツ！』 『青春だー！』 『み

、みんながいいって言うんだったら私はそれで……』

と言うことらしい。この温さに最初辟易としていたが、慣れとは恐ろしいもので私自身このジャンケンが楽しくなっ

てきた。良い大人がジャンケンに熱中することになるうとは思ってもよらなかった。

そしてジャンケンの前の彼らは、仲間の女の子松永瑠璃以外は殺気立っている。瑠璃は大人しい子で背も小さい。本

当に高校生かとも思うほどだ。だが、私は詳しく聞くことはない。単純に私が瑠璃と組んだ事がないからだ。

いつもだったら何回か相子が続いてから組が決まるのだが、今日はストレートに決まった。

彦作といつつもがはと笑っている私よりも背の高い錦司。どこか陰があるが別段ミステリアスという感じのしない

素朴な顔をした信俊とナンパな久吾。

そして、私は松永瑠璃と組むことになった。

気のせいかな、私以外の男連中が気を落としているように見えた。

いつも元気な錦司もテンション落ちている気がする

。そして組が決まると私たちは動き出した。

「よろしく、瑠璃ちゃん」

「お、お願いします、吟ちゃん」

年下の、しかもこんな小さな女の子に吟ちゃん呼ばわりされるのは苦手だった。彼女なりの親愛の表現なのかもしれない。

ない、と考える事で許していた。

私たちは駅の路地裏を重点的に調べることにした。と言っても警察の鑑識ではないので、聞き込みが主な活動だ。

それでも二か月も動いたのは伊達ではない。こういう事には素人ではあるが、それでも成果は着実に上がっている。

成果というのは情報だ。それによって私たちが『グループ』と仮称している組織のやり口というものが解った。

まず、女を使う。そして、ホテルに連れて行く前に、『グループ』の人間に囲まれる。古典的な美人局だ。しかも二

人の女が動いている。一人は黒髪ストレートのモデル体型の女で、もう一人は猫耳の女だ。実質よく見られているのは

モデル体型の女らしい。

感心するわけではないが、連中のやり口は理にかなっている。ホテルに行く意思がない相手には手を出さないという

意識があるようだ。これは無駄に派手にやって警察の目が厳しくなるを防ぐためでもあるのだろう。そして、被害者

が名乗り出ないのは恐らく家庭があるからだ。

例えばこれは断片的な想像だが、路地裏で『グループ』の女から胸や尻に触らせる、そして写真を撮る。

こうすれば、たとえ自分から触ったのでないとしても真実はうやむやだ。だが、これは両刃の剣だ。

もし、強情を張って裁判沙汰まで持ち越す人間が出てきたらこの活動は実入りがなくなる、更に同じような被害者が

声をあげれば『グループ』は詰む。

だが、それらは稀だ。大抵の被害者は自分の置かれた状況にパニックになり相手の言う事に従ってしまう。それが普

通。

実質『グループ』はまだまだ活動できる。と言ってもそれほど息は長くはないだろう。小説からの知識になってしま

うが、こういう事をやっているとかくざに目をつけられてしまう。

だから、『グループ』を捕まえられる時間は今月で終わりと見ていいだろう。

今日はあまり情報を得られなかった。私は近くの自販機で私用のミルクコーヒーと瑠璃ちゃん用にココアを買って休

憩に入った。

「これでよかったかな？」

「あ、ありがとう、吟ちゃん」

壁にもたれながらミルクコーヒーを飲む。やはり小岩井のミルクコーヒーは格別だな。

「……見つけられるんでしょうか？」

「ん？」

「私たちが『グループ』と呼んでいる連中です」

瑠璃ちゃんは静かだがすこし怒気を帯びているように見えた。私

も『グループ』のやっていることには怒りを覚える

がどこか対岸の火事だ。

「私のお父さん、『グループ』に引つかかったんです」

滔々と瑠璃ちゃんは語りだした。

「優しい人なんです。でも、『グループ』の事は話しませんでした。話せなかったんです！ お父さんは本当に家族を

、お母さんを愛している人ですから」

その言葉はどこか責められている気がした。私は家族を大事にできているかと言えばそんなことはなかったからだ。

「私は『グループ』を許しません、絶対に」

彦作が瑠璃ちゃんを私たちの仲間に入れたのかが分かった。だが、私は手放しに認めることは出来なかった。

「瑠璃ちゃんは、これが危険な事って解ってるかい？」

「危険は承知です。でも、こうでもしないと『グループ』を裁けないじゃないですか」

解っていない。私はそう思った。

「あまり突っ込んだことは言えないけど、君は間違っている」

どこがですか？、どこか怒りを含んだ瞳で私に問いかけてきた。

「私たちがやっていることは、何かわかるかい。的確な言葉で。正義、じゃないんだ。的射る言葉はね、『自己満足』」

と言うんだ」

「眼をつぶって、生きて行けというんですか？ でも私の眼は開いている。耳も悲鳴が聞こえる。悪徳のくさい匂いも

嗅げる。心は被害者の憤りを感じている」

ずいぶんと情熱的で詩的な表現をする子だな、と私は思った。どこもなく金子に似ている。それでもいい回しただけだ

、彼女に嫌悪を覚えたりはしない。

「でも、それは自分の小さな脳が感じている事だろうか？　そしてお父さんは君にそうしてほしいといったのかい？　願

ったのかい？」

そう言われてこの小さな少女はそこを突かれると弱ったようにうつむいた。

嗜虐心などなく、でも少女にとってはなぶるような言葉だとわかっただけだが、私は告げた。

「お父さんは君が血を流すかもしれない危険な事に首を突っ込むようなことは望んじやない」

「解っています！」

「君が強情を張るのは構わないが、私は聞き分けのない子供は嫌いだよ」

そう言っただけは、なら聞き分けの良い夕紅をなぜ愛してやれないのか？　と自問した。理由は分かっている。こんな

状況からも抜け出したいとも思っている。だが、決別ができない。決別する手段が永久に失われてしまったのだから。

そして、思案にふける視界の端に影がよぎった。

私はその方向を見る。女の子がいた。

黒い長い髪をした真つ黒なセーラー服を着た女子高生くらいの女の子だ。噂に聞く美人局かもしれない。

私は瑠璃ちゃんに声をかけて、女子高生の後姿を追った。

路地裏は入り組んでいたが見つめることは難しくはなかった。

射程圏に入ったがどう呼びとめるかという事に迷いが生じた。この二カ月の間この駅周りでいるんな人間を見てきた

が、こんな恰好をした女の子は見た事がない。そして腰まで届く黒

髪に不気味さを感じた。歩くたびに左右に揺れる髪

はちゃんと手入れされているのは解ったが、綺麗というよりは妖艶で私は年甲斐もなく恐怖を感じていた。

だが、意を決して私は呼びとめた。

「おい、君！」

そう言っただけで女子高生、と思しき、は振り返った。

透かせば血管が浮き出てきそうなほど白く、黒い髪とのコントラストが自然に綺麗であると感じた。そして、何より

も目に付いたのは赤い瞳だった。充血しているのではなく、赤い瞳というものを私は四十数年生きてきた中で初めて見

た。自分の慮外のものをはじく排他的な感情よりも委縮という感情が先に来た。

私は改まって話を聞こうとしたが、うまく言葉が出てこない。あまり言葉達者な方でない事を差し引いても、今の私

は拳動不審に見えただろう。

女子高生は私よりも小さい。瑠璃ちゃんよりは大きいな、そんな事を回らない頭が考えていると　いきなり彼女は

私の襟首をつかんだ。

私は『グループ』の人間かと思った、だが次の絵面を見てそんな可愛いものではないと剣呑な意識を持たせるのに三

秒要した。

女子高生が影に沈んでいったのだ。

私のキャパシティが溢れ出すのは二秒後。大の大人が悲鳴をあげてしまう醜聞ではあったが、その事を恥であるとは

思わなかった。思う暇もなかった。

視線をさらに落とす。影は私をも呑みこんでいたのだ。もう腰まで浸かっている。直感で食われてしまっているのか

、と思ったが痛みはなかったし、両足の感覚はある。じたばたと動かせば足も動いている。

だが、蛇のように丸のみにしようとしているのではないか？ そんな子供じみたファンタジーも普通に思ってしまった

た。

肩まで来て女子高生、混乱した頭では『怪物』という簡単な言葉も考えれなかった、は完全に影に沈んだ。

そして ついに呑みこまれてしまった。

「瑠璃ちゃん、吟さんが消えたって本当か!？」

松永瑠璃は肯いた。自身もその事に戸惑っている様子で状況を説明した。

「ぎ、吟ちゃん、女子高生がいたって、でも、いなくて、誰の事を言ってるんだろうって、走りだして、私も追いかけて

たけど、吟ちゃん足早くて、それで、それで

少年たちはそれを聞いて状況を呑みこんだ。吟哲が消えた。真っ先に思い浮かんだのは『グループ』の犯行だ。もう

そろそろ連中も自分たちを追っている人間がいる事に気づいてもおかしくないころではある。

「錦司、信俊、久吾、お前らは吟さんを探せ! まだ遠くまで行っ

ていないはずだ。俺はまず電話してみる。瑠璃ちゃ

んは俺といてくれ」

普段まとまりのない彼らではあるが、事が急を要する事ではあるのは本能で察知していた。彦作の言う事をすんなり

聞き散開した。

彼らもこの活動には他の目的があったのだが、その事を気にしていることはなかった。

彼らがこんな事をしようと思ったのは、正義感、確かにそれもあるが瑠璃のためでもあった。有体に言って瑠璃にア

ピールがしたかったのだ。けれども、弱みに付け込んで女をものにしてしようとするには彼らは純粹過ぎた。誰も瑠璃と手

をつなぐことすらできなかった。

(俺って、マジウブ過ぎるだろう!) x 四。

そんな彼らであったから、実入りのない吟哲の言う『自己満足』を二カ月も続けられたのだ。

「ダメだ、つながらない。くそ、あのおっさん大丈夫か!？」

「彦くん。私たちも探そう!」

「おう。あ、瑠璃ちゃん俺のケータイ持って連中からメールがないかチェックしてくれ」

そういつて彦作は瑠璃に自分のケータイを渡し、まったく、自然、当たり前前に 手をつないだ。

けれども、打算はない。瑠璃もそれを拒まず手を繋いで走った。

そして、探すこと十分 事態はあっけなく終わる。

彦作の携帯電話に電話がかかったのだ。相手は吟哲。

瑠璃は心配そうに対応したが、それをひったくるように彦作は唾を吐きながら怒声を浴びせた。

「おいバカ！ 絶対に一人になるなとか言っておきなごら！ おい！ おい聞いてんのかつてんだ！ このバカ！」
感情をあらわにする彦作を瑠璃は、彦作くんつてもっとクールだと思つてたけど、と好感度を少し上昇させていた。
そんなフラグを立てているとは気づかず彦作は駅前集合と告げた。

彦作たちが吟哲を除いて最後に到着して、和気あいあいとしていた。吟哲にどんな罰ゲームを与えるかというのがも

つぱらだった。熱血を見せていた彦作も仲間内に合わせるようにしていつもの軽いノリに戻っていた。

「ポルノ公然で朗読とか？」
「あ、あの私いるんですけど……」
「ノブはむつつりだからなあ」
「がはははは、腕立て

千八百回とかはどうだ？」
「コーチ・カーターか。解りづらいボケかますなよ」
「あれ？ 千八百回だっけ？」
「覚え

てねー」

結局、缶ジュースをこの一カ月間一本ずつおごらせるということに決定した。

待っていて、吟哲はようやくやってきた。

「吟さん、どこで道草食つてたんすかー？」
「心配したつすよ？」

「がはははは、腕立て千八百回だ」
「き、錦司くん

好きだね、そのネタ」
「まあ、こいつ馬鹿だからな」
「がはははは……スルーする所だった、おい久吾テーマ表に出る

や！？」
「ここは表だつっの、夜も遅いのに大声出して恥ずかしくないんですかー」

約二名はケンカをおっぱじめたがそれを笑いながら見ていて、彦

作は吟哲の様子がどこかおかしい事に気付いた。

それでもちよっと眼が泳いでいる程度のもので、何か暴力に巻き込まれたという匂いはしなかった。

そして、吟哲はよく見ると後ろ手で何かを持っていた。

「何隠してーんすか？」

彦作はおどけながら吟哲が隠しているものを見た。

鳥かごだった。比較的小さな部類でオウムとかでかい鳥を飼うものではなく、インコや文鳥位のサイズの鳥を飼うも

のだった。中に何が入っているかは、カーテンがかかっている見えなかった。

「これどうしたんすか？」

吟哲はどこか呆けた調子で、今までどこに行って何をしていたかを話した。

そして、小さく声が聞こえた。誰にも聞こえる事のない声だったが、吟哲には聞こえた。

『嘘だ』

「お目覚めかい？」

私が目を覚ますと暗かった、だが次第に明かりに慣れてくると眼に白いものが飛び込んできた。

有体に言ってスカートの中の下着だった。

「どうだ？」

私は少し寝ぼけた頭で声のする方を見た。寝ぼけた頭は急速に冴えていく。

その顔は、先程の女子高生、いや『怪物』だった。

そしてまず五体があるかを確かめた。顔自体は鏡がないから見えないが、頭は動くから大丈夫であることは解ったし

腕も足もなにも欠損することなくちゃんと繋がっている事に私は安心した。

「なんだ、パンツの感想も言えないほどビビっているのか？ こんなに綺麗な私に」

『はいはい、蟲惑魅惑幻惑八面玲瓏容姿端麗眉目秀麗才色兼備（笑）阿笠様は世界を傾けるほどの美女でございます

よー』

私は視線を動かし誰が喋っているのかを見た。それは王冠を被った角ある獣だった。しかも、首が何本もある。七本

。そして、赤い。まさかこんな言葉を使うことになるうとは思わなかったが私はこう思った。この世のものではなかつた。

「獣……今日の御飯食べさせないわよ！」

『それは困った、我に艱難辛苦を与えよと申したのは山中鹿之助。けれども千辛万苦を欲するは修行僧の境地。そして

私はタダの獣。その日暮らしの飯を食らい、虎狼のように獲物を見定めるのが常』

「ああああ、うるさいうるさい。そうやってお前はモンプチを私に隠れて食べるんだろう？ あれけっこっ高いんだぞ

！ バカバカ食うんじゃないよ！」

モンプチって、これ、このバカでかい動物？ って猫なのか？ ああでも七つも首もあるんだったら食費はかさむだ

ろっな。

私はどこから突っ込んでいいやら悩んでいると、この『怪物』と
言うについては生活感がありすぎるし、女子高生と言

うにしてはあまりにも現実感から乖離している。アンビバレントな
存在に対して言葉を向けようとしていると口をへの

字にして一言。

「いつまで人のパンツ覗いてんのよ？」

その言葉にはっとなって、私は女子高生、もうこれでいいや疲れ
たし、からすぐさま離れた。

「あんだウブねえ。いいのよ、通販で買った二万円するショーツだ
し。見せるものもいなきやつまんないからね」

『いやいやそう言うものでもないでしょう、と言いたげだったので
言ってみました。けれどもあなたが与えるのは罰な

のですか。そうですか』

「そうよ、解ってるのなら黙。黙りなさい。ホントに御飯上げない
からね」

「ええと、君は？」

「ああ、言葉が話せるのね？ 知っていたけど。それにしても貴方
強いのか弱いのか解らない男ね、水元吟哲」

どうして私の名前を、聞きそうになったが不思議な事でもないよ
うな気さえした。何しろ相手は七つの頭を持つ獣を

飼いならす主人なのだから。

「私の名前は直木阿笠。まあ、偽名よ」

面と向かって偽名であるといわれる経験は私の人生の中でも希有
なものであった。

「阿笠でいいわ。むしろ阿笠と呼びなさい。って言うか絶対阿笠。
うん、いい響きね」

「阿笠、ちゃん、あの」

そう言って会話の主導権を取ろうとしたがイニシアチブは阿笠のものだった。綺麗な、可愛いではなく綺麗と言った

方が適切だろう、顔を眉間にしわを寄らして阿笠は怒っていた。

「耳はついているでしょう？ 私は私の事を阿笠と呼びなさいと言ったの。ちゃんもさんも、ましてや君やらたん、拳

句の果てはタソとかけたら怒るわ。ええ怒りますとも。ミスモデ
イアもダメよ」

怒りながらも美しさが際立つ彼女は、阿笠は白木で造られたテーブルの上に置いてあるティーカップに口をつけた。

私はそのテーブルがいつの間に現れたのかに気がつけなかった。そして改めてこの空間を観察する。

黒と白の市松模様のタイルが縦横無尽に敷き詰められ、赤さびた銅の燭台が壁についている。長方形上の空間だが、

窓はなく扉が阿笠と赤い獣の後ろにある。それも洋風なドアであると言っていていいだろう。どれもそうだが、私が一生手

を出せそうにないほど高そうなものばかりであった。

空間の広さは広すぎて解らなかった。というかF市にこんな場所があるとは知らなかった。いや、もしかしたらここ

はF市ではないのかも知れない。

なにしろ七つの首を持つ獣、猫なのか、がいるくらいだ。

「早速だけど、吟哲。私はこう呼ぶわね。貴方は宝くじに当たったのよ。おめでとう。コングラッチレイション。ええ

と他はなんかあるかしら」

宝くじ？ 私は首をかしげた。宝くじは庶民の夢というのが結局のところギャンブルであるとして一回も買ったこ

とはない。パチンコも競馬も競輪もこの歳になってもやった事が無い。上司から堅いねえとは言われているが、変える

つもりはない。

「宝くじをもらえるとこんな怪奇現象に出会うのか？」

私は皮肉からではなく心からの疑問として問うた。阿笠はそうね、と笑い話を続けた。

「宝くじは比喻よ。でも、当選した当人からすれば怪奇現象となんら変わらないでしょうね」

『こんな感じで紆余曲折、廻り廻って無駄の羅列。けれども話は進まない、ならば私は狂言回し。一夜の夢なら覚めな

いで、願う貴方は迷い人』

獣の声がしたが口を動かした気配はない。腹話術だろうか？ というか芸達者だなこいつ。

「獣。物事には順序があるのよ？ ホントに御飯抜きにするわよ？」

『そうはいつでも私は黙して語らず。聞こえるのは幻か夢のいずれの旋律。惑い惑うて黄泉路の旅路。三千世界の烏な

ら、かあと啼いてもいいじゃないか』

つかつかと靴を鳴らして阿笠は獣へと近づいた。対比でみると獣が大きい事が良く解る。

そして、阿笠は拳を振り上げ獣の頭の一つを 殴った。

『いつてえー！！ 殴ることないじゃないすか！』

「うるさい。しかも自分でもわかっていない事偉そうに言うんじゃない。このほらけもの。はっ、ナマケモノみたいで

かわいくないか!?　なあ、吟哲!

「帰っていいですか?」

正直、これがテレビのセットで獣はCGで先刻影に呑みこまれた不思議現象は手品なのではないかと思ひ始めてきた

。そしてこれは新手のドッキリ企画。それに私は四十路を過ぎて若くはない。このハイテンションな展開に疲れてきて

、明日の仕事に差し支えるのではないかと思ひ始めている。あ、彦作たちに電話しなきゃな。心配しているだろうし。

そう思つて携帯電話を開くが、圏外となつている。ということはここは地下か。

冷静になつてきたところで、阿笠が無表情を作り私にこう告げた。

「幸福になりたくはないか?　吟哲」

「新手の新興宗教なら間に合つている。一昨日きやがれ」

「ま、待て。話を聞け!」

そつだ、と思ひ私はポケットの中を調べる。やはり、ない。財布がない。

「阿笠、私の財布を返しなさい。怒らないから」

「な、なんのことがしら?　ふーふんふんふん」

……怪しい。

私は視線を白木造りのテーブルに目を向けた。黒革の私の財布が置いてあつた。

「阿笠」

「な、なによ?」

「あれは、何かな?」

「財布よ、見ればわかるじゃない」

「誰の?」

『それは水元吟哲……貴方様のものにございます!』

「獣!　のけ者にするわよ!」

私は帰ることにした。

財布を懐にしまい、阿笠を省みず私は獣を横切り奥に一つだけある扉を開けようとして、後ろから阿笠に抱きとめら

れた。もちろんロマンチックな要素はどこにもない。こいつは詐欺師で、私は被害者。聞く耳は持たない方がいい。

「吟哲、やめなさい！ 危ないから！」

危ない？ その事が引っかかりながらも扉を開けて私は外に出ようとして 落ちた。

どこに落ちたのかはわからない。だが、ドアノブを掴んでいきりぎりどこかに落ちることは免れた。視界は白黒の

市松模様慣れたせいかわからないほどの青に満ちた空間だった。そして下には白い、雲海が流れていた。

悲鳴を出す事はしなかったがこれには腰が抜けた。阿笠が助けようとしたが、そこは女の力。結局、獣に啜えられる

形でまた市松模様の部屋に戻された。

どういうことだ、と私は早鐘を打つ心臓で考えた。もしかして、拉致にあったのか？ だが、否定する。私一人を誘

拐して得られるメリットなどないし、労力もかけ過ぎだ。

改めて携帯を見る。携帯は相変わらず圏外であるが、一つ気付いた事がある。先程見た時に確認した時間とだいぶ時

間がたったはずの今の時計表記が一緒なのである。携帯電話を故障させた事がないので解らないが、こういう状況に陥

るものなのだろうか？ 他の機能は使えるのだから、故障ではないと思う。

もうここまで来るとトリックでは説明がつかない。超常の出来事がこの身に起きているのだと、納得するしかないだ

ろう。というか考えるのに疲れてきている。年取ったな、と感じる時だ。

「話を聞いてくれるかしら？」

と澄まし顔で尋ねてくるが、私にはそれがどや顔に見えた。むしろ綺麗さ余って憎さ百倍という感じた。

「宝くじに当たるとこんな仕打ちを受けなければならぬのか、阿笠」

今度は皮肉で尋ねた。

「それについてはすまないけれど、話を聞かない貴方も悪いわ。郷に入って郷に従えというでしょう？」

「……ご託は疲れた。さつさと言ってくれないか、用件を」

それもそうね、阿笠はどこか焦りながら説明を始めた。

「うすうす気づいているかもしれないけど、私は人間じゃないわ」

「神様か？」

「キリスト教の言う神なら違うし、定義も色々あるけど面倒だから省くわ。私はね、吟哲。『罪人』なのよ」

じゃあここは刑務所なのか、と言おうとして止める。あまりにも馬鹿らしかったからだ。阿笠ではなく、自分がなの

が腹が立つところではあるが。

「大罪を犯して、罪を償うためにこんなところに獣と一緒にいるの」

「どうしたら罪を償える」

簡単だわ、と前置きして阿笠は説明した。

「人々を幸福にすればいいのよ」

それはまた

「荒唐無稽な話だな。神様の定義が色々あるといったが、幸福ほどじゃないだろうが。例えば、Aという砂漠を旅する

男がいたでしょう。その男は水を求めてオアシスを発見し、水を飲んで喉をうるおせた。このときAは確かに幸せだろ

う。だが、その幸せは一過性のものだ。その後Aは砂漠の旅の途中で干からびるかもしれない、サソリに刺されたり毒

蛇にかまれて死ぬかもしれない。どこまでが幸せの定義なのか、教えてくれないか？」

「それは、私の考える事じゃないわ」

なに？ 私は疑問符を浮かべて阿笠の言葉を待った。

「私は下っ端なのよ、腹立たしい事にね。どうやって幸せになるとか、どこまで行ったら幸せだとか、私の上司が考え

る事なの。私への評価もね。貴方だってそうやって会社の中で昇進したりしたでしょ？ それと一緒に」

ここまでくれば解るでしょう、阿笠は言う。

「私は貴方を幸せにしたいのよ」

状況が状況なら愛の告白のように聞こえなくもないが、意味合いが酷薄に過ぎて薄皮一枚も厚みがない。

「ここで貴方に選択権があるわ。私が与えるアイテムを手にするか、否かの二択」

「もらうしかないんだろう？」

阿笠は微笑んだ。今まで散々振り回されたのだが、その笑みには少し参ってしまう。美人の面目躍如といったところ

だろう。

『美人の面目躍如といったところだろう』

不意に、何か声がした。そして言葉を聞くとそれは私の思考とまったく同じだった。

「ほほう、そんな事を考えてたの？」

「いや、違う」

「おかしい、どこに声の主がいる？」

『おかしい、どこに声の主がいる？』

また、同じ事を言っている。私は混乱しながらも声の下方向を見た。燭台の下に、鳥かごがかかっているのが見えた。

。

カーテンがかかっている中で中に何が入っているのかは見えなかった。私は布を除けて見るとそこには

「インコ？」

『インコ？』

インコなのにオウム返しとはこれいかに、そんな事を思い浮かべながら阿笠の方を振り向いた。

「それは代弁インコという鳥よ。それが貴方が幸せになるために必要なもの」

『本当なのか？』

私は言葉を告げなかった。だが、インコが代わりに喋った。

「信用ないわね」

「このインコの能力が本物かはいずれ解る。今はちょっとどうすればいいか解らないが、放っておくが」

私の思いは代弁された。

『このインコをどう使えば、幸せになるんだ？』

胡散臭さはあった。私にとっての幸せというものも解らなかった。すぎるつもりはなかったが、説明くらいは受けた

い。そう言う思いで私は阿笠にたずねた。

「声を失っている女の子がいるわね。貴女の娘さん」

「それはどうやって知ったんだ？」

そう言うと阿笠はセーラー服をだけさせ、白いブラジャーから

四つ折りにされた紙のようなものを取り出した。

「指令所よ。これに大半の事は書いてあるわ」

「なんというか、便利だな」

まあね、そう言っただけでまた指令所とやらをブラジャーの中に戻した。もしかして一発ギャグとしてやったけど、バツが

悪くなってブラジャーにしまわなければと思ったのかな。

運良くその思考は代弁されなかった。そして、阿笠はこう言った。

「やっぱり子供の幸せが、親の幸せ……そう言う事なんじゃないかしら？」

笑顔で言われるが、私はどう応えていいか解らなかった。

私の思いを見透かすインコは代弁することはなかった。

という事があったんだ、とはいえない。私は間違っていないが、事実を言ったら間違いなく頭のおかしい人とされる

だろう。幸いインコは説明中大声でしゃべることはなかった。

とりあえず、私は会社の知り合いから呼び出しを食らいしばらく遠征で世話が出来なくなったからしばらく預かって

いて欲しいと彦作たちに説明した。

女子高生については見間違い、ということにした。

「耄碌するには早いっすよお」「でも四十路つつたらおじんだよな」「ガハハハハハ、ゴメン聞いてなかった！」「笑

ってんじゃねーぞ！ 錦司、このこの！」「……」

彦作たちからは散々な事を言われたが、瑠璃ちゃんだけ黙っているのが気にかかった。うつむいているし、背も小さ

いからどんな顔をしているか解らない。

「大丈夫かい、瑠璃ちゃん？」

しゃがみこんで顔をのぞくと、肩を震わしながら泣いていた。私のリアクションで彦作たちが気がついたようで、盛

大に「なーかした、なーかした」コールが飛んできた。

「とうか古いだろ！ お前らの世代だと！」

「いや古典をたしなむ世代っすよ、俺ら」「っーか、え？ なに？

瑠璃ちゃんマジ泣き？」「ガハハハハハ、吟哲さ

んよおあんたのせいですぜ！」「うるせー！ この糞錦司！ さっさと倒れるよ！」「ううう」

「と、とりあえず今日は解散だ！ お前ら気をつけて帰れよ！」

そう言っただけ私は最終電車に駆け足で乗り込んだ。電車内は空いており、朝の満員電車と同じものかと思うくらい閑散

としていた。

私は、阿笠というもう二度と会う事のないであろう女が言った事を思い出した。

『子の幸せが親の幸せってことなんじゃない？』

本来なら、それは正しい。私もそうありたいと思っている。けれども、私はそれができない事を知っている。いや、

違う。

『勇気を持ってないだけだ』

代弁インコが私の言葉を代弁する。だが、それを他人、インコだが、から言われると自分で思っていた事だとしても

反発を抱いてしまう。

血液検査をすれば一発で解るだろう。私はO型で夕子もO型、そして金子は確かAB型だったはずだ。これほどわかりやすいとミステリーには出せない設定だなと自嘲しながら思う。それでも前に進まなければいけない。それは夕紅の血液型を調べる、という事ではなく大きな外堀を地道に埋めていくというものだ。

私は夕紅にメールを送ろうとした。文面も硬いものだ。短くもある。絵文字も使わない。顔文字も使わない。私はそれでいいだろう、と。思いながら送信しようとした。

『ダメだ、ダメダメ!』

耳慣れない声が聞こえてきた。私は周りを見たが、声の主になりそうな人物はいなかった。酔っ払って眠っている年

配のサラリーマン風の男に、ヘッドフォンを大音量で聞いている大学生風の男の二人しかいない。

『どこを見ている!?!』

声は近くの方からしている。ということは

「代弁インコ?」

『……その通り』

少し間があつてから代弁インコは応えてきた。

「お前、代弁するだけじゃなくて喋れるのか?」

『代弁できるんだから、喋れるにきまつてるじゃない!』

バカにされてしまった。インコ風情に、という気持ちもないではなかったが今日はいろんな事があつたので怒る気力

もうせている。

「何がダメなんだ？」

『そのメールの文面だよ！』

私は再度自分の打ったメールを見た。

件名：

本文：父だ。今日話がある。ちょっと待ってる。

とこれだけだ。インコの奴は何が気に入らないのか？

『バカでしょバカでしょ、又はバカでしょ』

何度もいうが、鳥風情にバカにされてという気持ちはないではなかったが、私は堪えていた。ノーガード戦法だ。戦

わない戦いをしていたが、インコは気遅れなどしなかった。

『これじゃ、夕紅ちゃん怒っちゃうでしょ。寝ちやうでしょ。将を射んと欲すれば馬を狙うべしでしょ。これじゃ夕紅

ちゃんかわいそうでしょ！』

かわいそう、というのが解らないが、確かに簡潔すぎたし、時間も指定していない。もしこれが会社に提出する書類

だとしたら間違いなく上司から怒られるだろう。

そう思い、鳥の言う事とは思っても基本的には真面目な性格な私だったから直した。

だが、今回も鳥を納得させることは出来なかった。

『長いでしょ！ これじゃ夕紅ちゃん寝ちやうでしょ。それに堅苦しいでしょ。親子なんだからもつと親しみを持った

方がいいでしょ！』

と、ダメ出しを食らうこと十回。私は心折れた。

「も、もうダメだ。夕紅には明日話す」

疲れているしそれでいいだろうと思ってしまう。夕紅もこんな時間まで起きてはいないだろう。そう私を諦めさせる

理由は泡のように浮かんできた。

けれども鳥は私を介抱してはくれなかった。

『メールがダメなら電話をすればいいでしょ！』

私の疲れた頭はそんなことも思い浮かばなかった。だが、それは出来ないと毛頭から決めていた事でもあった。

「夕紅は喋れないんだ、どうやって意思の疎通をする」

『受話器越しに一回叩くならイエス、二回叩くならノー、そうやればいいでしょ！ 簡単でしょ！』

鳥の言っていることは何も難しい事ではない。確かに理に適っている。間違っではない。

だが、私は拒んだ。

そして その思考は垂れ流された。

『怖いんだ』

鳥の口から私の思いが囁られると私は恥ずかしくなった。そして少年甲斐もなく泣いてしまった。

代弁インコは私が泣きやむのを待ってから話し始めた。

『夕紅ちゃんだって怖いと思うでしょ』

え？ 私は声をあげて問うた。

『だって、夕紅ちゃんお父さんともう何年も口きいていないでしょ。それがいきなり声をかけるんでしょう？ 恐いに決

まってるでしょ。怒られるんじゃないか、嫌われてるんじゃないか、何を言っただろうか、そんな思いでいっぱいのは

ずでしょ！』

言われながら私は親父の事を思い出していた。

私は親父から虐待を受けていた。長年勤めていた工場長の職を公害が元で辞職させられ、母や私に暴力をふるっていた。

た。それでも私は親父が好きだった。頬に包丁傷がつけられたとしてもだ。

今の夕紅は昔の私だ。暴力は受けていないものの、愛してほしい人から愛情をもらえず、愛されていないんじゃない

かと怯えていた私と一緒にだ。

『さあ、涙を拭いて、電話するでしょ！』

鳥に言われるまでもなく、私は夕紅に電話をかけた。

寝ようと思っても眠れないときがある。私の場合は特に。

カウンセラーの先生は明言はしなかったけれども、トラウマのせいだろうと言っていた。

彼女の好意は解る。誰だってトラウマという響きはいいものとはとらえない。私の場合その事がコンプレックスにな

って余計に深く考えてしまうということも。

その日眠れなくて ちよつと切ってしまうおうと思った。

私は自分でもわかる通り臆病者だ。春名先輩なんかは『臆病ものはいじめのある学校には来ない』と言ってくれたけ

れど、やっぱり私は自分の事を臆病者だと思う。

私は死にたいから切るんじゃない、頑張ろうと思うから切るんだ。血が出るのは怖い、死んでしまうくらい深く切ってしまうんじゃないという事も怖い。

それでも痛みを意識してしまえば、死にたくなくなる。

そんな歪んだ精神観は異常だということとは解っていたけれども、それでも私を癒すのは生きるための痛みしかなかった。

カミソリを机の戸から取り出す。もう錆びて切れ味の悪くなったカミソリは捨てよう。痛いし、衛生面でも危ないし

。そして、そろりと誰もいない事を解っているのに部屋から抜け出し、洗面器に水を溜めて二階の私の部屋へと持って

行く。

するとケータイが鳴っていた。私はびくついて少し水を落としてしまった。

誰からだろう。

携帯を持つようになったのは中学生のころからだけれども、いい思い出はあまりない。失声になってから特に。

一番ひどかったのは一年の時に私と援助交際をしたいという男の人からの電話だった。思えばそれが最初のいじめだ

ったと思う。そのころはまだ喋れて、抵抗も出来たけれど性欲を隠そうともしない男の陰湿な声が今でも夢に見る事が

ある。私はまだ処女だけれども、犯される夢を見たこともある。夢だから痛みはないのだけれど、気持ち悪さに起きて

から吐いてしまった事もあった。

腕に震えが走った。水をこぼさないように床に洗面器を置き、電話を取った。

ディスプレイを開いてみると、それは意外な人だった。

着信：××さん

最初のころは名前もちゃんと登録していたのだけれど、私はこの人の名前はこう書くようになった。理由は解らない

。深い意味があるのかもしれないけど、今の私にとってあまり興味はなかった。

電話を取り「もしもし」と言おうとするが、やっぱり声が出なかった。

代わりに 吟哲さんが喋ってくれた。

『眠ってなかったか？ あ、お父さんだ、いや、です。はい。イエスなら一回受話器を叩いてくれ、ノーなら二回。え

ーつとなんて言えばいいの………』

吟哲さんは可哀想になるほど呂律が回っていないかった。今までお酒を飲んだところを見た事がなかったから、けして

お酒を飲んでいるわけではないのだろう。

『大事な話があるんだ、あ、でも眠かったら眠っていい ……！ ……』

何だろう、ほかに誰かいるのだろうか？ でも、同僚の人ではないだろう。気にはなつたけれども、私は喋れないの

で結局尋ねる事ができない。

『ごめん、やっぱり起きててくれ十二時ころには家に着くと思うから。それまで起きていてくれ。良いかな？』

私はそれを聞いてから無音になったので、あれ？ と思ったがここは叩くところか気がついて、慌てて……一回叩い

た。

『ありがとう。お父さん、あんまり遅くならないようにするから……じゃあ、またな』

ぶっきらぼうに会話を、吟哲さんは終わらせた。けれども私はそれに不満を想うことはなかった。

私ははっとなって洗面器を片づけることにした。吟哲さんの……吟哲さんの一言で私はすごく、救われたのだから。

生きるための痛みは今の私には、必要なかった。

台所へ行き、作った夕食を温め直していた。

時刻は十一時五十分。

私は残り六百秒の到来が待ち遠しくて仕方なかった。

2章

その日、稲見第一中学校二年四組の担任はついていないと思った。いつもジャージで登校するのだが、昨日洗濯しっぱなしで乾燥機に入れるのを忘れていてサイズの小さなジャージしかかった事が第一に挙げられる。仕方なしに久しぶりにスーツに袖を通すことにしたのだが、いつの間にか小さくなっていった。それは彼の感性から言って『ださい』ことに変わりなかった。

まあいい。そろそろ刈り入れ時だしな。

それで新しくスーツでも買えばいい、彼はそう思っていた。

彼はサッカー部の顧問で部活の練習には熱心だった。部員からも慕われていてまずまず悪くない。それに彼らとは共犯関係でもある。朝の練習に顔を出し、気分良く一日を始められると思ったたら急に雨が降り出して来たのだ。ついてない。彼は小さな事だったので、そのついていない事に拘泥することはなかった。

朝連を校舎内でやるよう生徒に呼び掛け、自身も校舎で監督することにした。

そして、今年一番ついていない事が起こる事になる。

「おう、おはよう！」

その生徒に挨拶を彼はしたくなかった。教職員としてのモラルが低い彼はその生徒をあからさまに嫌っていた。挨拶をしても返事もしない、無愛想、可愛げがない。これだけの理由だが、彼がその生徒を嫌う理由になっている。

その生徒の名前を　水元夕紅と言った。

挨拶をしたら去っていくと思っていたが、一向に去らない夕紅を見て自分に何か話があるのだろうかと思つた。その事から初めて彼はついていない事を意識した。

「どうした水元、先生に何か話があるのか？」

夕紅はあからさまにケータイを取り出して、目の前でメールを打

ちディスプレイを彼に見せた。

「ついできて下さい。お話があります、つてこらこら水元。学校でケータイ使っちゃいかんぞ？ 先生だったからよかったものの他の先生だったら没収されるやないかい！」

と陽気に振る舞ってはいたが面倒くさいというのが彼の本心であった。滑っているのはこの際問題ではなかった。陰気なこの生徒が笑うところもみたい事には見たかったが、お互い嫌い合っている仲である。今更その関係が変わる事を彼は期待していなかったし、教師としての情熱も又なかった。

けれども夕紅は黙ってまたケータイを打ち始めた。その文面を見て、彼は顔面が蒼白になる思いだった。

「先生の秘密の事でお話があります。公言されなくなったら、付いてきて下さい」

それを言葉にすることは、いくら陽気なおちやらけキャラで通っている彼でもできなかった。焦りながら自分が正に脅迫されている事に気付き、自分のクラスの生徒がこんな爆弾だったなんて、とついでいないとは思わずにはいられなかった。

彼はサッカー部のマネージャーに生徒に相談されたから少し席を外す旨を告げて、彼は夕紅の後をついていった。

夕紅が向かった先は教室のある方向ではなかった。彼はその事に少しほっとした。いくらかお金を握らせれば黙っていてくれるだろう。もし黙らなかつたときは、ちよつと怖い目を見てもらえばいい、彼は自身が教える側の人間として間違っているのに気付かないでいた。

だが、スクールカウンセラーが使う部屋に来てびくついた。まさか、雄鳥先生と裏でつながっているんじゃないだろうな、彼は驚愕したが部屋の中には誰もいなかった。その事が彼を落ち着かせた。落ち着いて交渉に移れた。

「それで、水元……先生の秘密つてなにかな？」

彼は棒読みで尋ねた。明らかに自分の態度を変えたという事を表

明するためだ。幾ら陰気であると言え、心がないわけではないだろう。

少し脅かしてやれば泣いて謝るだろう、彼はそう高をくくっていた。

だが、夕紅は臆した様子も見せず彼に画面を見せた。

『先生はどうしてあんな事をしたのですか？』

「あんな事って何かな？ 水元、あんな事じゃわからない」

『ばれていなかったか、サッカー部のアホどもにテストの答案を見させている事が……』

ばれていなかったか、サッカー部のアホどもにテストの答案を見させている事が……えっ？

彼は自分の思った言葉が垂れ流しにされている事に気付き、驚いた。そして、声のした方を見る。棚の上で見えにくかったが、インコがそこにいたのだ。

インコは見つかったのを契機に夕紅の肩にとまった。

そして、口をパクパクさせる彼を尻目に夕紅はケータイを打っていた。

『まさかほんとにそんな事をしていないとは思いませんでした、先生。そうですかサッカー部の部員に答案を』

「ち、違う！ その鳥が勝手に言った事だ！ 俺はそんなことはない！」

く、クソこの分だと他の先生の答案も

『く、クソこの分だと他の先生の答案も高値で売っている事もばれているんじゃない』

またしても、彼の思考は垂れ流しにされた。二度目であるが種も仕掛けも解らない彼は狼狽するしかなかった。

『残念です、先生』

ケータイを打鍵する音が聞こえなかったから、これは用意された文章であったのだが彼はそんな事に気づいていられる余裕もなかった。必死になって彼は下手に出た。

「い、いくら欲しいんだ？ ん？ い、言ってみる？ 金ならいくらでも出す、ああ、でも今はダメだぞ？ 悪いが給料日前でお金なくて」

取り繕う彼は言葉を投げかける。甘い言葉だ。だが、夕紅は蜜を選ぶ蝶のようにその甘さを嫌った。はつきりといやなものを見る眼を向けて彼を見た。

お、俺をそんな目で見るんじゃない！

と、思ったが今度は代弁インコは代弁しなかった。しかし、もう彼もルールは解っている様子で、思ってからしまったと思っっているようだった。

またディスプレイを彼に向けた。今度は今までの短文ではなく、長文であらかじめ書いておいた文章のようだった。

『私がお金が欲しいわけではありません。ただ、先生にお願いしたいのです』

脅迫しておいてから何を言うか、もう代弁インコの事も解っていたが彼はそう思わずにはいらなかった。

『先生の秘密を私は守ります。ただし、今まで通りにばらまくことはやめてください。そして もう一つ『お願い』があります』

夕紅はスクロールして、彼への『お願い』を説明した。

『このインコを学校で連れている事を許可してもらいたいです』

彼はそれに何度も首を振って頷いた。

しかし、夕紅の顔は苦いままだった。

私は昨日、時間的には今日の事なのだが夜の事なので、吟哲さんが連れてきた代弁インコについて聞かされた。

にわかには信じ難かった。いくら私が子供とはいえそんな夢のような話を信じる事が出来るほど純粹でもなかったし、単純でもなかった。

けれど必死になって話す吟哲さんと、実際に私の心を見透かしたインコの声を聞いてその話を信じることにした。

『でも、この代弁インコって何に使うの？』

私が思った事を代弁してくれる機能は便利だけれどもこれって悪用も出来るよな、と頭の端で思った。

吟哲さんはためらわず言った。

「学校に持つて行くんだよ」

え？ 代弁インコが私の衝撃を端的に現してくれた。

『ど、どうしてさ？ いや、どうしてなの？ 私大丈夫だよ』

そうだ、こんなものを連れて言ったらまたひどい目にあう。いや、私だけならいい。もし、このインコが殺されでもしたら私は

『大丈夫じゃないから、声が出せなくなっただんでしょ！』

私の思考の間隙をぬって、誰かが声を出した。それを聞いて今の私の思考を聞かれなくてよかったと思うと同時に、その声は聞いた事のある声だった。どこか懐かしい声。けれども誰のものだったか思い出せなかった。

『このインコ、喋れるの？』

ああ、どういうわけだが、吟哲さんはそう言って何故だか辟易とした様子だった。

「ともかく、夕紅。こいつを連れて行け」

『でも、吟哲さん！』

代弁インコが私の声を奏でてから少し、間があった。吟哲さんの顔を見るとどこか悲しげな瞳を一瞬だけした。でもホントに一瞬だけ、私の勘違いだったのではないかと思えるくらい一瞬の出来事だった。

私はその事が気にかかったが、吟哲さんはつづけた。

「お前がどうしてそうなったのか、私には解らない。けれどもお前は明日学校に行くのだろう？ お前の支えとなる味方が一羽と心細いかもしいないが、確かにいる。だから、連れて行け。こいつはそのために今からここにいます」

それだけ言うと吟哲さんは寝るとだけいい、寝室へと向かった。それから今に至る訳だけど、クラスの担任の弱みを握る工作は私が仕組んだ事ではない。

なんと、全部代弁インコが考えた事なのだ。

鳥の脳は確かねずみよりは大きいはずだけど、それでも会話と複雑な計算や、心理の機微を図る計算力、その他いろいろな要素をすべてこなすには鳥の頭では難しいはずなのだ。

お前、ほんとに鳥なのか？

そう思うけれども、代弁インコは私の心を代弁はしてくれなかった。

視線を担任に向ける。担任が頷いているのを私は冷めた目で見ていた。この男に私は期待していなかったけれども、それでも信頼に値しない人間であると認識を改めた。まだ十三歳なのにドライすぎるかもしれないな、私は顔には出さないで笑った。

『出ましよう先生、私の用件はそれだけです』

「あ、ああ……」

可哀想なくらい狼狽していた。気が抜けたのか足取りが悪い意味で軽い。

私は脅すつもりはなかったが、念を押した。

『このインコの事……よろしく願いますね？』

ひっ、と息を吞んで担任は怯えていた。私は猛獣なのか、そんな言葉がよぎった。傷ついたな、私は自分が悪い事をしている事を理解しつつ、棚に上げてそんな事を思った。

スライド式の扉を開けると 私の心臓は早鐘を打った。

三人のクラスメイトが立っていたからだ。クラスメイト達は私を見るいつものように気持ちの悪い無表情を作っていた。けれども、一人だけニコニコと笑っている少女がいた。

長い黒髪を後ろで束ね、ポニーテールにしている活発な印象を受ける。赤縁のメガネをしている。けれども視力が悪いわけではなく、ファッションとして身につけている事を彼女が友達と話しているの

を聞いた事がある。

私は、私をいじめだした主犯である少女、朝野千里の……そんな親しみあるエピソードを何故か思い出したことに奇妙な焦燥を覚えていた。

「おはよう！ 夕紅」

「おはよう」

「おはよう……夕紅」

千里達が親しみ深げ挨拶をして、私の焦燥が消えた。いや、隠れたのだろう。素直にほっとしたのだ。けれどもそれは、今はいじめられないというものだ。心からの安息は私にはまだ訪れないのだ。それでも私は挨拶を返そうとしておはようと声に出そうとする。案の定、出ることはなかった。その様子を千里はにこにここと笑ってみている。その笑みはどこか馬鹿にしたような、嫌悪しているような笑顔だった。

「お、お前らどうしたんだ？ そろそろホームルームが始まる時間だぞ！ さ、早く教室に行かないと遅刻つけるぞ！」

担任は先程までの怯えを隠して教師らしい事を言った。さすがに自分の不安を生徒に気取られるのが嫌だったのだろう。担任はそういう男だ。

「……はい……」

と言つて千里達は教室の方に向かった。それを追う形で私も教室に向かった。代弁インコも急いで私の肩にとまった。なんか漫画のキャラクターみたいだな、私はそんなくだらないことを思う事で不安を消そうとした。

「あいつが夕紅ちゃんをいじめたやつでしょ？」

その声はいきなり出てきたから私はびっくりした。慣れていたつもりでも不意を打つ形で言葉を出されるとびくつとしてしまう。

「声大きいよ」

「でも、あいつなんでしょ？」

私は聞こえていないかと遠くの千里の背中を見ながら、「解らな

いよ』と告げた。

私がいじめられだしたのは去年の夏休みが開けてからのことだった。人付き合いがさほど良くない私だったけれども、隣の席のクラスメイトに挨拶をすることくらいはした。けれども、そのクラスメイトは私を無視した。聞こえなかつたのかな、と思つたけれど二回挨拶するのむつとうしいかなと思つてやめた。

それがきっかけである。あとは堰を切つたように、けれども担任の目を盗んで犯行は行われた。水泳の授業の後に制服が隠されたり、ノートに『死ぬ』と書いてあつたり、足を踏まれた後謝る言葉をかけられることなく笑われたり

一年生の時、味方はカウンセラーの雄鳥魅代先生と春名先輩くらいしかいなかった。それでも彼女たちを本格的に頼るようになったのは、事態が修正しきれないくらい悪化した後だった。

暴力が公然とふるわれるようになったのは、いじめが始まつてから三ヶ月後くらいからだつた。トイレで女の子たちから悪罵とお腹をグーに握つた拳で殴られた。抵抗したけど、数の暴力に勝てるほど私は強くない。彼女たちが去つた後自分の無力さが悲しくて泣いてしまった。

「夕紅の髪つてきれいだよねー」

ある日、千里から唐突にそんな事を言われた。私はえっ、と戸惑いながら優しく接するクラスメイト達に驚きながらもその優しさにいじめが終わつたのではないかと期待してしまつた。

「あ、ありがとう」

そのころ私の栗毛の髪は長かつた。そして、私の自慢の一つでもあつた。もう思い出せないけれど、写真にあるお母さんとお揃いで長くした髪が私の誇りでもあつた。

無事一日を終えられた、そう思つていたころ私はまたトイレでリンチにあつた。でも、様子がおかしかつた。抵抗しなかつたけれどいつもだつたら終わるくらいだつたのだが、いつも以上に暴力は激しかつた。

「ちよーしこいてんじゃねえぞ!」「ぶずぶずぶずぶずぶずぶずぶずぶずぶす」「紅っちつて可愛いよね、ゴキブリの次くらいに」「なんで生きてんの?」「キモいわ、ほんとキモい」

暴力は精神にまで及んだ。声に出してどうしてこんなことするのか、と聞きたかったけれど、私はそんな事をしたらもっと暴力をふるわれると思つてしまい黙り込んでしまった。

そして、彼女たちの言い分がようやくわかった。クラスメイトの私は興味がなくて名前も覚えていなかったけど顔はカッコイイ男子が私の事を『可愛い』と言ったことに腹を立てていたのだ。

抗う気力も体力も奪われた後、水をぶちまけられた。そして、彼女たちはハサミを取りだした。何をするのか、恐怖からパニックになりながらも動けないでいた。

「髪、切つてやるよ」

彼女たちは私の長い髪を切りばさばさにしていった。

「ああ、掃除しておいてね? もっと切られたかったら、別にいいけどね」

そう残して私は泣きながらトイレを掃除した。一人で家に帰り、夕食を作り、制服を洗って乾かし、鏡を見ながら自然に見えるように髪を整えて、いつものように一人で夕飯を食べ、ベッドの中で静かに泣いた。

『なんでそこまでされているのに……学校に来るの?』

代弁インコは尋ねる。そして、代弁インコが私の思いをトレースする。

『吟哲さんに……心配をかけたくないから……』

久しぶりにいじめてやるつか、私、朝野千里は夕紅に話しかけた後そんな感情に囚われた。

去年の夏休みの間から、私は夕紅をいじめる計画を立てていた。

まず欲しかったのは共犯者だ。これは思ったよりも多く集まった。個人的な私怨から夕紅をいじめたいというやつはいなかったが、『面白そうだから』という下衆な思いで寄ってきたクラスメイトが大半を占めた。

私はその動機を否定しない。否定するのは『いじめないと、私もいじめられるのではないか?』という感情から来たものだ。

なんと意気地のない奴なのだろう。けれどもいじめについて書かれた本を見てみると、そう言う理由でなし崩し的にいじめに参加した人間の方が多いそうなのだ。

私がいじめについての本を読んだ理由は一般的なものとは程遠い。いじめをするために私はその知識を求めたのだ。

読めば読むほど反吐が出そうになる暴悪の限りを尽くした所業が載っていた。

中でも金を取ることだ。これは早くにいじめを気づかせてしまう。だから、私は共犯者たちに金を取ることはしないように伝えた。もっとも、私の思惑を離れて影で金を取られているかもしれないが、そこまでは責任は持てない。

私が最初に企画したいじめはシカトだ。それが最後でもある。

私は後のいじめは『企画者』の指示に従って行った。それでも、暴力沙汰には関わっていない。自分の手を汚したくない、なんて策士を気取った事は言わない。単純に疲れるからだ。

「今日はどうするかって決まってる?」

私は教室に向かいながら隣に立っている朱美たちに聞いた。それはいつものように夕紅をいじめる算段についてだった。

すぐ返ってくるかと思っただけで、返答に時間がかかった。振り向いて朱美たちの顔を見ると、怯えたような表情をしていた。

私は、何? どうしたの? と尋ねる。

朱美たちの答えは腑抜けたものだった。

「きよ、今日は休みでいいんじゃないかな? ねえ」「そ、そうそう。時間差攻撃の方がダメージでかいつて」

確かに、微笑みながら頷いて私はこう答えた。

「でも、ダメだわ。最近、手ぬるいじゃない。ここで大きなダメー
ジを与えなきゃ」

私がそう言っていると、二人ともそうだねと納得してくれたようだ。けれども、朱美が質問をしてきた。

「あー、千里ってどうしてそんなに夕紅が嫌いなの？」

「え？」

私はその問いは全くの不意打ちだった。別に、私は夕紅の事を嫌ってなどいない。そもそも嫌いという感情でいじめを企てるのなら、徒党を組むことはないだろう。更にいえばただか個人の嫌いくらいだったらシカトだけをしていればいい。攻撃を加えれば攻撃で返ってくる。因果応報というやつだ。

けれども、彼女たちに不信を与えるだろう。私の答えは。だから、表面的な理由で答えた。

「朱美たちは嫌いじゃないの？」

「え、あー、うん……嫌い、だよ」「私も　　なんか暗いしね。夕紅って」

彼女たちの答えを聞いて私は満足した。

教室に入って私はみんなに挨拶をした。男子にも女子にも分け隔ても差別も貴賤も貧富もなく、だ。平等に。

そして、メールで夕紅へのいじめについてクラスメイト達に聞いた。けれども返信は芳しくない。やはりみんなも飽きてきているのだろう。

その日は陰口、という事で決まった。本には曜日ごとにいじめの種類を分けるパターンもあったけれど、義務じゃないんだし、それに面白くないではないか、それでは。

そして、夕紅がやってきて私たちは陰口を叩いた。聞こえるように。

キモい、（笑）、ウザい、臭い、なんで生きてるんだかなー、死なねーかなー、生まれてきてごめんなさいって言ってそうだよな

等々、私たちは夕紅に対して聞こえるように言ってやった。

私は陰口を言わなかった。代わりにクラスメイト達がちゃんと言っているかをチェックしておいた。

だが、その陰口がピタリと止まった。何があったのかと思いい、顔をあげると夕紅とその肩に白い小鳥、恐らくインコ、がとまっているのだった。

そして、夕紅は口を開こうとしたがやめた。口もって結局喋らないのかと思っただが、声は発せられた。

だが、夕紅の口ではない。腹話術でもしたのか、私は一瞬そう思った。けれども違う。言葉を発したのはインコだった。

『おはよう、みんな！』

それに私を含めクラスメイト達は啞然としてしまった。中にはおはようと返事を返してしまった奴もいた。それほどまでに、この出来事はインパクトが強かった。

皆、いじめも忘れ夕紅に視線を注いでいた。夕紅はそれに物怖じした様子だったが、が、毅然とすることなくおどおどとしながら自分の席に着いた。

私は、少し面白くなかった。そして流れを元に戻すために夕紅の前へと立った。

「おはよう、夕紅……その鳥、何？」

『喋れなくなった私の代わりに、私の言葉をしゃべってくれるインコだよ。名前は……まだないけど』

喋れなくなつたとか、

『喋れなくなつたとか、自慢のつもりなのか？ コイツは』

え？ 私は自分が思った事が流れている事に驚いた。視線と耳を動かし、一瞬で教室がざわめいたのを感じた。

うるたえた私をあざ笑うように、夕紅は インコは続ける。

『自慢じゃないよ、千里ちゃん。事実。けど、そんなふうに思われていると……ちょっと傷つくね』

夕紅の表情を見るが、言葉に表情が追いついていないという感じ

だった。どこかちぐはぐで見ていてとても不自然だったし、不愉快だった。

「学校にそんな鳥持つてきていいの？」

私はイニシアチブを取ろうと必死だった。何かおかしい、私の第六感が告げていた。この会話で主導権を得なければ私はやばい目に逢う、と。

『大丈夫。先生の許可は取ったから』

あの腐れ教師め、何を

『あの腐れ教師目、何を考えている……！ ああ、こんな目に逢うくらいだったらさっさと、こいつがあいつといちゃついているとでも流せばよかった』

……また、か！？

さすがにこれはまずい。教室のクラスメイト達も『おいおい、どういうことだよ』などと私に対する不信感をあらわにしている。朱美たちですら汚らしいものを見るかのような顔をして私を見ていた。そして、追い打ちをかけるようにインコは語る。

『このインコ、私の言葉を代弁するだけじゃなくて……心を見抜いて見透かして思っている事を代弁するの。だから、先刻この子が言ったことはゼーんぶ、千里ちゃんの本心だよ？』

ざわめきは最高潮に達した。私に対する暴言も少なくはない。

私は焦燥や恐怖、そして嫌悪をないませにした心で無心でインコに掴みかかろうとした。

殺してやる……！

私はその思いで満たされていた。誰だってそうだろう、自分より下だと思っていた奴に心を見透かされ、そいつ以下に貶められるとしたら誰だってそうする。

だが、インコは鳥なだけあって夕紅の方から飛び退った。そして、私は夕紅を押し倒してしまった。

痛みがあった。同時に羞恥、混乱、憎悪、いっそ夕紅の首を絞めて殺してしまおうかとも。

けれども、次の瞬間そんな思いは消し飛んだ。いい意味ではない。事態は私にとつての最悪にしか、どうあっても転がらないらしい。頭に温かい感触が落ちてくる。水のようにではあったが、頭皮が感じるそれは粘着質で気持ち悪かった。

まさか、私の脳裏によぎる。

『糞………？』

心なしか、インコの口調は笑っているようだった。

私はパニックに陥りながらも、教室を出た。

なんで、どうして、こんな目に……！

私を押し倒した千里ちゃんが去っていくのを見ながら、状況を掴めないでいた。

とりあえず立ち上がって、再び自分の席に座った。やっぱり逆効果だったよ、吟哲さん。

調子のとつてるとか、不気味とか思ってるんだろっとな、だって心を見透かすんだよ？ みんなだってそんな奴を気にいるはずがない。

私はインコ、まだ名前もつけていないけど、が打ち合わせ通りにやった事を凄いと思った。

先刻の代弁も、実は私の思った事ではなかった。全部この子が喋ったのだ。だから、所々にセリフと表情がちぐはぐな場面もあったと思う。

私は周りの視線におびえながら心臓が高なっているのだけを耳にしていた。

すると、誰かが立ちあがって私の席にやってきた。怖くて、恐ろしくて、頭が、体が　心が竦んでしまった。

顔を伏せながら聴覚を研ぎ澄ませながら、一步一步近づく足音がただただ恐ろしかった。死神なんて幻想が生ぬるいくらいの現実が押し寄せてくる予感がした。

そして、肩を叩かれた。

びくつ、戦慄きながらゆっくりと振り返る。拳や平手、それららしい。メリケンサックや凶器を使つての暴力だとするならやばいでも、顔に傷があつたらやっぱりあの腐つた聖職者でも気付くだろう。けれども、あいつは私に対して複雑な感情を抱いている。それでも解るのは決してプラスではないということだ、ああ、早くこの時間が去ればいい

けれども、私の想像とは全く違う事だった。

「やったじゃん！」

もう一度肩を叩く、えつと誰だっけ？ ああ、河本くんか。彼は私に対していじめに積極的に参加している人ではなかった。けれども、軽く悪口を言う感じ。そして彼はこのクラスの男子や女子からも人気の高い生徒でもあつた。

私は彼からの言葉で過去のいじめの事を思い出した。クラスメイトの女子たちの嫉妬。それによって自慢だった長い髪が切られてしまった事を。

河本くんの顔を見ないで、私はこう思った。そんなことないよ、代弁インコがそれを言葉にしてくれる事を願つた。代弁インコは次の瞬間言葉にした。

「うお、びっくりしたー。なにに？ マジでこの鳥、水元の思つた事を喋つてんの？」

おかしい、私は疑問に思つた。河本くんの口調が、その、明るくて、その……優しかったのだ。

待て待て、うぬぼれてはいけない。私は何度それで痛い目を見て、辛酸をなめたと思つているのだ。きつと、きつと、そうだ。甘い夢を見てはいけない、希望を抱いてはいけない……優しさには理由がある。

代弁インコは私のそんな暗く、被害妄想に満ちたとげのある言葉をみんなに教えることはなかった。

そして、次の瞬間教室のクラスメイト達がせきを切つたように私

を囲んだのだ。

ほら見る、やっぱりこうなった。今度は何をされる？ 言葉の暴力かな、それとも単純に乱暴されるのかな。期待しているわけではない。優しさなんて。

だが、けれども、しかし、 だけど。

「コングラッチレーション！」 「うおーすげーな、水元」 「やったじゃない」「よかったな！」

え？ え？ ……え？

『ど、どうしたの？ みんな？』

私は、みんなの言葉がどういう意味なのか、理解できなかった。

それでも、私の思いに返答することなくみんなは私に優しい言葉をかけ続けた。

『……や、やめて』

私の思いを代弁インコは言葉にする。みんなは口々に讚美の言葉を投げかけている。けれども私の頭は今起きている状況が処理できなくなった。パニックに陥っていた。やめて欲しい。やめて欲しい！

『やめてよー！』

私の思いが強かったからか代弁インコの放った声は、小さな鳥が言葉にしたものと思えないくらい大きな声だった。多分、教室全部に届くくらい。

私の思いはまだ終わらない。

『どうせまたいじめるんでしょ！？ だったら、だったら優しい言葉なんかかけないで！ 優しくしないで！ やさっ……優しく……うつく、うっ……お願い……お願いだから……私の事なんて、構わないで……』

私は立ち上がってうつむいた。ああ、言ってしまった。言ってしまったのだ……

本当は嬉しかった。声をかけられて嬉しかった。優しくしてくれて嬉しかった。嫌われていないんじゃないかと期待して嬉しかった。

ああ、私は嬉しかった。

その思いを　代弁インコは朗々と言葉にした。

教室が静まり返る。私ははばかりることなく泣いてしまった。私の物語に対する涙腺は緩くはなかつたけれども、自分の事に対する涙腺は緩いらしい。解ってる、だからこの涙はなかなか止まってくれない、と。

誰かが、誰かが言葉にした。

『もう、いじめなんかしないよ』

代弁インコが、私の心以外で思いを口にした。夜の湖のように静かだった静寂はどよめきとともに波紋を呼んだ。

けれども、それを境にクラスメイト達は言葉をつづけた。

「ああ、いじめはしない」「悪かったよ、そこまで思いつめてるなんて思わなかつたからさ」「うわ、最悪。思いつめるでしょ、フツ」「でも、同罪だぜ。俺もお前らも」「ごめん、水元」「ごめん、紅つち」

「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん」
クラスメイト達の謝罪は続いた。

それを聞いて、ようやく私に対して行われたいじめが　終わつた事を確信した。

私は、また泣いてしまった。それでも声は、嗚咽すら、出せなかつたけれども、肩を震わせながら私は泣いた。

その様子を見たクラスメイト達が子供をあやすように声をかけてくれた。なんとそれは、私をいじめていた女の子たちだった。

「私らさー、千里が恐かつたのよ」「なんつーの、いつの間にか千里が私らのボスみたいになつてて」「そうそう、あいつ威張らないくせにやる事えげつないよな」「だから、ホント私らもいじめられる側に回るかもしれないよ」「だからさ、泣くなつて」「いや、泣かせとけよ。泣きたかつたんだからさ」「うわ、河本がちよーキザなんですけど」「何、河本。紅つちの事が」

みんなが笑っていた。今までのような暗い、バカにするような笑い方じゃない。

本当に、楽しそうに

そして、ぴしゃりと扉が開く。

クラスメイト全員が彼女に視線を注いだ。

朝野、千里。

髪は濡れていた。赤縁メガネの奥の瞳は敵意の感情をむき出しにしていた。

けれども、今まで以上の恐怖を私は感じなかった。

彼女は 裸の王様だったのだ。それも誰からも敬意も、好意も、持たれず、恐怖で縛っていた暴君。

彼女は力をなくしていた。クラスメイト達は彼女を見放していた。無言で自分の席に座った。

それから、担任が来た。そう言えば今気付いたが、ジャージではなくスーツ姿だった。

「おらー、お前ら席着けー。遅刻扱いすつつおー」

点呼をしながら、私のケータイが振動した。私は、誰から来たか解らない、多分クラスメイトだと思う、一応担任に気づかれぬように気をつけながら私はケータイを覗き見た。メールだった。

件名：朱美だよー

朱美、ああ、千里……ちゃんの取り巻きだった人か。

私は、そんな事を思い出しながら本文を見た。

そして、私は言いしれない嫌な汗を書いた。

本文：復讐したくない??

クソ、と悪態をつきながら私はトイレに入った。

午前中は髪にしみついた悪臭が気になってしょうがなかった。消えた、消えている、と思つていても心の片隅でその匂いが残っている、くさいと思つて授業に身が入らなかった。

私はクラスメイト達が私から離れた事を理解していた。樂觀できるほど私の脳みそはお気楽になれなかつたし、私の言つた事を思い返せばそれが当然だろうという客観的な思考も出来た。

けれども、私はどうにかして水元夕紅をいじめたかつた。

ここまでくれば、すぐには無理だろう。クラスメイト達は使えない。ならば、一年越しにやればいい。根気が必要だし、二年生の時の周囲の視線や態度が気にかかるだろうが、耐えられない事ではない。

だつて 兄さんはそれ以上に酷い目にあつたのだから。

誰か、トイレに入つてきた。複数。クラスメイトだったらイヤだなー、と思つて少し様子を見てから去ろうと思つた。その思考が敗れ去つたものの臆病な思考とは理解できたが、勝利のための布石であると思つ事で、耐えた。

トイレに入り彼女たちは話を始めた。トイレでの話は女子の場合、男子のあけつぴろげな会話よりも粘着質なものが多い。この場合も多分に洩れず誰かの噂話のようだ。

それが 私の事のようにだつた。

「ちよつと聞いた？ 四組の」

「あー、千里……だっけ？ 糞が髪についたつてやつ」

私は 思つたよりも冷静に行動できた。こういう誰とも解らない奴の言葉に聞き耳を立てたところで、私が傷つくばかりで何の益もない。

私はトイレを出た。

とりあえず、行く場所は決まっていなかつたけれど教室にはいづらしいし、図書室とかは夕紅がいそつた。保健室にでも行くこうかと思つた。

保健室は一階にある。その間結構すれ違つた生徒がいたが、何か私

を見て笑うやつが多かった気がする。

保健室は開いてなかった。ちくしょー、ついてないな。

じゃあ、どこへ行こうか。とりあえず、体育館に行くことにした。私がマネージャーをしているバスケット部の先輩もいるだろうし、なんとなく気楽に過ごせるだろう。

それが、楽観だった。

部活の先輩はいるにはいた。けれども、開口一番聞いてきたことは、

「鳥のフンかけられたんだって？ 大丈夫？」

それは、私があこがれていた、兄さんに対して感じるものとは別の感情だ、三年の勇次先輩の言葉だった。

私は、何の事です、ととぼけられれば良かったのだが、なんで知っているのかと聞いてしまった。

それを聞いて勇次先輩はまずったかな、という表情をした。

「いや、俺のケータイから、悪く思うなよ？ 俺まじカンケーないから、チェーンメールが来たんだよ。それで知った。でも、俺は送らないから、安心し」

「すいません、先輩。誰からメール来ました？」

私は無駄、と思っていたけれども尋ねた。こういうチェーンメールはネズミ算式に増えていく。悪意の根源が誰のものであるかを言う事を特定することは全員のメールを身なければ不可能に近い。

勇次先輩はまた、困ったような表情をした。それはさっきのように自分の事を心配して困っているのではなく、誰かに災難がかかると思っで心配しているような顔だった。

「知らない方が、いいと思うよ」

その言葉が逆に確信を与えた。先輩に送ったのは私の知っている人物、更にいえば二年四組の誰かだろう。先輩の交友関係で二年四組の人間は、私の知る限り 一人。

「教えてください、頼みます」

「……じゃあ、約束するんだ。怒ったり、乱暴したりしない事、そ

れが条件。きつと、心配していつてきたんだから」

先輩は間違った事を言っている。

あいつは心配などしていない。むしろ喜んでいいる。私に起こった不幸を。あいつもバスケ部のマネージャーだ。そして、あいつも先輩の事を想っている。

私は、約束します、と言いここにあのインコがいなくてよかったと思ひながら先輩の言葉を聞いた。

「中島朱美」

代弁インコを阿笠からもらった次の日、私は彦作と組んだ。いつも以上にテンションが高く、それと反比例して他の男どもがダウンだった。瑠璃ちゃんはいつも通りだった。

その理由を聞いて、私はこの少年は思ったよりも純粹なんだなと思った。

「吟さーん、俺、俺、瑠璃ちゃんと手をつないじゃったんですよー。

キヤツ、恥ずかしー」

「男が『キヤツ』とか言うんじゃない」

「キヤツト、くらいいいじゃないっすかー」

「猫じゃない。最近の若いもんは、すぐ上げ足を取る」

「そう言う吟さんは年寄り臭いっすよー、もっとフレキシブルに自在闊達にさー」

そうかもしれない、そう思うと今日は会社で上司に怒られた事を思い出した。この少年が言ったことはすべて上司から言われたことだ。

だが、不思議と少年の言葉は頭には来なかった。上司の言葉は責任感から来たものだが、無理難題を言っているものがほとんどだ。私の能力でできる事もあるが、上司は導く感じではなく押し付けがましいものである。

彦作の言葉は無責任である。けれども押し付けがましいことはない。

私は、そうだな、と頷いて今日も夜の街中をうろついた。

「いないっすねー」

「……そうだな」

もちろん、『グループ』の事を言ったわけではない。人がいないのだ。だが、外的な要因があったわけではないだろう。今日F市で何かイベントがあったわけではない。たまたまだろう、そんな日もこの二か月の間何回があった。

「そろそろ潮時っすかねー」

「ん？」

「あいつら、『グループ』を探す事ですよ」

彦作は私が思っていた事を口に出した。そして、彦作は主催者でありながら実質的なリーダーを私に任せいつまでという期限を決めていなかった。

彦作の諦める動機もおおよそ私と同じものだ。私と違ったのは諦めることへの悲観だった。

「惚れた女のためか？」

「あー、まーそうっす」

私は照れもしないで言ったから、彦作も恥ずかしがらなかった。顔を見ていないから解らないが。

「瑠璃ちゃんの事情は聞きました？」

「ああ、昨日一緒になった時」

「俺もその話聞くまでこんなことしようとは思いませんでした」

「そのくせ、彼女の前なのにリーダーを気取らなかつたな。なんでだ？」

キャラじゃないからっすねー、笑って言った。確かに、彦作は主役をやるような顔ではない。むしろ悪役の側にいそうな顔だ。そんな代弁インコがいたら真っ先に告げ口されそうな事を思いながら私は自販機でコーヒー牛乳とミネラルウォーターを買った。昨日いな

くなった罰ゲームだそうだ。

話を元に戻す。

「彼女は駄々をこねるだろうな」

「そうっすね。ダダって言うていいかはあれっすけど
んはまだあきらめれないと思います」

瑠璃ちゃ

私をもっといらればいいのだが、と思ったところでフレキシブルが足りないなと自嘲した。

「カプセルホテルに泊まるから、探す時間を増やそうか？」

彦作はああ、と頷いた顔をした。

「それもつと早く言っただけ良かったすよー、吟さん」

「……悪い。私も、この事件はあまり興味がなかったんだ」

それが本音だ。この事件を深く知る前まで、私自身にサラリーマン狩りにあっても対処できると踏んでいた。ところが調べていけば搦め手を使っているのだ。私のような愚直な男には一番それが辛い。そして、瑠璃ちゃんのお父さんのように被害にあった男性がいて、泣いている家族がいる。

正義漢ぶるつもりはないが、そんな悪事を見過ごすわけにもいかなくなっていった。

「今からでも増やそう。報酬の五万は私にとっては棚から牡丹餅……いや泡銭だ。どうせ消えてしまう金だ。それならば、何か意義ある事に使いたい」

私はそう提案した。

「だが、断る」

彦作が妻とまったく同じ事を云った事に私は驚いた。既視感を感じたが、妻の影は浮かばなかった。

「ダメっすよー、吟さん子供さんいるんだからあんま無理しないでください」

「無理など」

「じゃ、その子供さんのために帰ってやってください。吟さんやもめでしょ？」

難しい言葉をよく知っているな、と思ったが言葉にしたらこじれそうだったから私は頷くだけにとどめた。

「片親が子供に親身にやってやらないのは、子供にとっては不幸ですから」

言われて思い出す、彦作の家族は母子家庭であった事を。だから、私の……娘に感情移入してそんな事を言ったのだらう。

私は頷くしかなかった。彦作が正しくて、私が間違っているのだから。

代弁インコに言われて私も、私なりに夕紅と向き合おうと努力しました。その努力も昨日一回限りで、今日も出来るかと言われたら難しいだらう。物理的なものではなく、私の心情的な問題で。

彦作の言葉に頷こうとしたら携帯電話が鳴った。私のものではない。若者たちが好みそうなアップテンポな曲である。

メールではなく電話だ。かかってきた相手はどうやら瑠璃ちゃんのような。彦作の想い人ではあるがとめて冷静に話していた。

「うん、わかった。今から行く」

電話を切ると、彦作は振り返って私にこう言った。

「獲物が網にかかったみたいですよ？」

『グループ』か、私は問い返した。彦作はコクリと頷いた。

「急ぎましょう、錦司たちが待っています」

私たちは駅の近くの袋小路になっている場所へと急いだ。ここも探した事があったけれども、若者がたむろしてる場所である。聞き込みもしたがここでサラリーマン狩りをしているという情報は得られなかった。

私たちのいた場所からそこは遠い。十分かかった。瑠璃ちゃんは壁越しに袋小路の中で起きている乱闘を見守っていた。錦司や久吾、信俊たちは既に『グループ』と思しき男達と戦っていた。

数は結構いる。四人。けれども、私たちが加勢に来た事で連中は浮足立っていた。当然だらう。狩られて当然の羊の群れに、皮を被った狼どころか虎が混じっていたのだから。

そうになると、逃げに転じる連中のほうが多い。私たちは焦った。もし瑠璃ちゃんを人質に取られる形になると分が悪い。

それは当った。『グループ』のうちの一人モヒカン男が、瑠璃ちゃんを捕まえてナイフを取り出してきた。

「く、来るんじゃないー！ こいつがどうなっても」

その言葉は続かなかった。視界の端で彦作が石を拾い、自然な流れで男の顔に投げつけた。

悲鳴とともに、瑠璃ちゃんの拘束がほどかれた。その隙をつければよかつたのだが、瑠璃ちゃんは荒事に慣れていないのだろう。へたりと腰を落としてしまった。

だが、私たちの動きは迅速だった。錦司が右手に持つ男のナイフを手から落とさせて、久吾が膝かっくんの要領で男の膝を地面につける。信俊は瑠璃ちゃんの手を引いて立たせ安全圏まで連れて行き、彦作が落としたナイフを男の首に突き付けた。

「や や、どうもどうもつす。俺の名前は彦作だ。ただし、彦作と呼ぶことは許さない。お前は俺の事をこのと呼べ。ま、どうでもいいか、そんなことは」

「て、てめえら俺にこんな事してどんな事にやがっ！」

彦作は左手で男の頬を殴った。

「な、殴ったね……親父にもぶたれたことないのに！ くらい、いーえーよー？ なあ」

そう言うつと男連中は笑いだした。『グループ』の男は怒りの表情ではあつたが、困惑と得体のしれない私たちに恐怖を覚えているようだった。

「てめえらか？ 俺らを探してるって言うやつらは？」

「そうです、そうです。大正解。じゃ、ご褒美にもう一発パンチをあげよう」

私は止めに入った。邪魔すんな、という顔を彼らはした。その残酷さに、もつとも『グループ』のしている事も残酷であるが、私は驚くと同時に彼らに止めさせるよう瑠璃ちゃんの方を見るように促

した。

恐がっていた。今まで気丈に振る舞っていた彼女ではあるが、暴力が振るわれる現場を見て恐怖を覚えたのだろう。

それを見て、会話の主導権を私に譲ってくれた。

「私は、水元吟哲だ」

それを聞くと男は安堵の顔をした。恐らく声音から彼らよりも分別の付いた大人であるということに安心したのだろう。だが、私の顔を見て恐怖の声をあげた。確かに、私の人相は頬に包丁傷があるため強面に映る。スーツは着ていたが、社員ではなくやくざ屋として映ったかもしれない。

パニックになって男は理由の解らない事を言い出した。

「ちよ、長野組とは話しているんじゃないか！？ アガリもちゃんと納めてるし、それに、あいつ、ちゃんと許可取ったって

」

「誰の事を話してる？」

そこを聞くと男はハアとため息をついた。安堵のようだ。

「なんだ、素人さんかよ。ビビって損した」

「損はさせない。素人が怖いのは明らかだろう？」

へっ、男は小馬鹿にしたような笑いを浮かべた。

「粹がるなよ？ 俺に手を出したらどうなるか解ってるの？ タル

サカさんが黙っちゃいないぜ？」

私は安心した。なんとこういうこいつが小物ということは、すぐわかる。上の人間の名前を軽々しく出したこともそうだ。

こいつには責任感がない。自分のしたことの重大さも解らず、すぐ自分を庇護してくれているものを頼る。それが、自分の評価を下げている事にすら気付いていない、愚か者だ。

そんな事を思っていると、携帯電話が鳴った。私のではない、彦作たちのものも違っ。

鳴っているのは眼の前で組伏せられている男の携帯電話だった。

「彦作、取ってくれ」

「あ、出るんすね？ オツケーっす」

男はやめる、と喚いたが久吾が口をふさいでくれたおかげで私は神経を電話に集中する事が出来た。

『おいおい、ゼンジ。大丈夫かよ？ タルサカさんの名前出してねーだろーなー？』

若い男の声だった。そして、私はその声をどこかで聞いた事がある気がした。

「お前は、誰だ？」

私は尋ねてから、失敗したと思った。もう少し喋らせてから名乗りを上げればよかった、と。

だが、そんな事よりも私を驚かせる一言を、受話器の向こうの男は告げた。

『水元、吟哲……か？ いや、だな！』

私は心臓が跳ね上がるのを感じた。同時に私の既視感は正しいものだった。私はこの電話の主とあった事がある。

「……誰だ、お前？」

『いやだなー、忘れちゃったんですか？ まあ、そうですね。あなたにとって俺なんてそんな程度の価値しかなかったんだから』

仮面を被ったように言葉は飄々としているが、小さな敵意を感じた。

「お前が『グループ』のボスか？」

『グループ？』、男は反芻して笑いだした。

『あははは、面白い名前つけるね。俺達のことだろ『グループ』って？ うん、そうだ。確かに俺が『グループ』のボスみたいなもんだよ』

「こんなことはやめるんだ」

はつきり言っただけ私たちはプロじゃない。どういう落とし所をつければ丸く収まるのか、という事が見えていない。『グループ』の活

動停止、というのが目標ではあるがそれも対症療法的ではない。

さらに先程の言葉を思い返してみれば、こいつらの背後にはやぐざがついている。彼らが動き出した時私たちは身を守るのか、という不安も浮かんでくる。その可能性が低いという事も解るが、零ではないという事が心をざわつかせた。

だが、次の一言が私を驚愕させた。

『いいですよ？』

「……え？ は？ いや、なんだって？ も、もう一回言ってくれ」
何度も言わせないでくださいよ、と前置きしてからゆっくりと一文字一文字区切って私に聞かせた。

『次の仕事で最後にしますよ』

私はほっとした。けれども、次の仕事という言葉が気にかかった。まだ思い出せない声の主は嬉しそうに次の仕事についてほのめかした。

『娘さんは大切にしましょうね？ 水元吟哲』

「……どういう意味だ」

私は解っていないながら尋ねた。だが、男は応えない。かわりに、ゼンジにケータイ返してやってくださいね？ と告げ、電話を切った。私は男を解放してやるように言った。彦作たちは瑠璃ちゃんを守るような位置に立って、男を牽制した。男は覚えてるよ、とテンプレートでひねりのない捨てゼリフをこぼして去っていった。

私は電話の内容をみんなに伝えた。議題はやはり次の仕事という事が気にかかっていたようだ。だが、それはみんな言いにくいというだけでなんとはなしに悟っていたのだ。

次の『グループ』の被害者が、私の娘 水元夕紅であるという事が。

3章

私は教室に入った。

金曜日である。今日が終われば明日は休みだ。休みが嬉しいという感慨を抱いたのは多分初めてだろう。

席について、机の落書きを見て私は溜息をついた。もうちょっとひねりのきいた言葉をかけないのか？　だが、それを口にしない。強がりのように響くだろう。

雑巾を取り水に浸して絞ってから私は机を拭いた。せめてもの救いは油性ではなく、水性であった事だ。

昨日まで話しかけていた友達、とは思っていないが、は私をシカトしている。それがわかったから、私は誰にも声をかけなかった。

授業が始まってノートを取り出すと全部落書きで使えない状態になっていた。こういう状況は私としても困ったものであった。ただでさえ書く事が多いのに。

私　朝野千里はいじめを受けていた。

けれども、私は耐えることにした。もうこの学校で私が日の目を見ることはないだろう。それは私を絶望させるには十分な事実であった。

代わりに台頭してきたのは朱美だ。私の腰ぎんちゃくみたいになってきたやつであり、私の手足のように働き、よく企画を出して夕紅をいじめていた女。

それが今私の眼をはばかりることなく昨日までいじめていた夕紅と楽しそうに談笑、最も夕紅が喋っているわけではないあの鳥だ、していた。

朱美だけではない。クラスメイトの男子も女子も、夕紅に話しかけている。

私は、それが悔しいとは思わなかった。もちろん負け惜しみでも

ない。けれども、昨日まで私がそこにいたのに立ち位置を奪われたことについては、嫉妬や羨望など一言では片付けられない感情が私の胸の中に渦巻いていた。

けれども、夕紅は変わっていなかった。いじめが終わったというのに、おどおどとしていて、時折聞こえてくる鳥の声も委縮している感情が読み取れる。私はその事に腹が立った。でも、堂々としていても結局むかつくのだろう。

ああ、気付いた。私は　私は夕紅の事が嫌いだったのだ。嫌いになったのだ。

不思議と私を貶めた主犯の朱美はそれほど嫌いとは思えなかった。ちよつと理解できない感覚かもしれないが、一瞬で私が頂点に立っていた状況をひっくり返し、最下層まで落とした手並みは鮮やかと言っばかりで怒りは覚えなかった。まあ、許しはしないだろうが。

一番嫌悪の強い感情を向けているのは夕紅だ。兄さんが解雇しなくなったのも夕紅の所為、兄さんがあれほど好きだったボードゲームも手放し、私の下から去ったのも全部、全部、夕紅の所為だ。

昼休み、夕紅がみんなに引っ張りだこにされているのは半ば呆然として見ていた。夕紅がトイレに立つとそれは平然と行われた。

「ねえ、なんか臭くない?」「あ、ホントだ!。何のにおいだろ!」

「あれ、この匂い最近嗅いだことない?」「あるある」「あ、もしかしてこれって　」

夕紅の机の周りを囲んでいた朱美たちは、ハモらせながらつぶやく。

「~~~~鳥の糞の匂いだ!~~~~」

そう言う奴らは笑い始めた。前言を撤回する。私は朱美も嫌いだ。

そして、私は立ち上がった。かと言って逃げるためではない。そんなことは私のプライドが許さなかった。

朱美たちの前に立った。朱美は笑っていたが、他のメンツはやばい事を理解していた。そうやばい。なぜなら　私が怒っていたか

らだ。

「うわ、くっさー。ちよつと、髪洗ったの」

パンツ、と乾いた音が教室に響く。私の平手が朱美の左ほおを叩いたのだ。

「イッター、ちよつと何すんのよ？」

叩かれても朱美は怒りを向けることはなかった。それは自分の優位が揺るがないとい自信の顕われでもあったのだろう。

確かに、私は一時の感情に任せて自分を攻撃していい口実を与えてしまった。戦略的には大失敗である。

それからは言葉と数と陰湿の攻撃が始まる。悪口雑言罵詈謗、風邪で休んだ時に何故か見ていた政治討論のようだ。私は無力感がこみ上げてきた。

『何してるの？』

その声の方向にクラスメイト達は視線を向けた。

水元夕紅と、鳥がそこに立っていた。

「あー、ちよつと聞いてよ、夕紅。この女、私を殴ったのよ。酷くない？」

『なんでそんなことになったの？』

「知らないよ、きつと癩癩でも起こしたんじゃない？」

『あ、ごめん。朱美ちゃん。私……千里ちゃんに聞いたの』

その言葉に朱美は少しむっとした様子だったけれども、夕紅は気に入った様子は見せなかった。

『どうして、殴ったの？』

「……別に、カンケーないだろ？ 夕紅にはさ」

私は冷静に振る舞った。内心ではなんでこんな奴に心配されなきゃいけないんだ、同情なんてまっぴらだ、と思っていた。思ってたからはつとなつた。やばい、心を読まれる。

けれども、鳥は黙っていた。かわりに、謝罪の言葉を告げた。

『ごめんなさい』

そう言って夕紅は深々と頭を下げた。鳥は足元が不安定になった

からか飛び退った。

「……何を謝ってる？」

『昨日の、この子が貴女にその、ぶっかけたでしょ？ それをこめんなさい、って』

私は、その言葉を聞いて面食らった。だが、すぐに笑みを作った。

「謝らないですよ。それともなに？ 許されたいから謝ってるの？」

許すと思ってるの？」

『え、いや、違、そんなつもりじゃ……』

夕紅の狼狽ぶりは見ていて面白いという感情よりも、いらついた感情をわきあがらせた。

私は夕紅の頬も平手で殴った。

教室にどよめきが起こる。朱美が乗り出してきて、何すんのよ！と声を荒げた。まったく、こいつは夕紅をだしに使おうとしている魂胆が丸見えだ。

私は笑うでもなく声を投げた。

「これで、許してやるよ」

糞については、だ。

私は、朝野千里に対してどんな感情を抱いているのだろう。

こう書くのと恋に恋する乙女みたいに思えてしまうが、私と朝野千里の関係はそんな優しいものではない。複雑なものだ。

周りのみんなから言葉で私をいじめようと言い出したのは、まず千里ちゃんの間違いはないだろう。

でも、だからどうしたっていうのだろう？

私は、千里ちゃんをどうしたいのだろう？

朱美ちゃんは、あまり好きになれない子だけれども、復讐しないかと尋ねてきた。

私はそのメールに嫌いいよ、と書いた。それを過剰に、もっと言

えば自分の望みどおりに解釈したのだろう、朱美ちゃんは。

私は、復讐なんてしたくなかった。

部活を終えて、私は帰宅しようと思ったけれど今日は宿題があった事を思い出してカウンセラーの先生が使ってる部屋を訪れた。もう、ここに来る必要もないかな、と思っっていたけれどなかなか癖と
いうのは抜けない。

魅代先生はいなかった。五時で仕事は終わりと言っていたから、
もう帰ったのだろう。

アレ？

窓から見える校舎の裏に、誰かいるようだった。しかも、ケンカ
をしている様子だ。

いや、違う。あれは

『いじめでしょ？』

代弁インコ、今日の昼休みにクラスメイト達と話して名前を決め
た、『インちゃん』が私に尋ねてきた。

多分、と頷いてから私は状況を見た。乱暴されている子は当然一
人で、いじている側は三人。ジャージを着ているから解りにくい
けれども、女の子のようだ。

そして、いじてる側が何か掴んでいるようだった。それを見て、
私は驚いた。

赤縁のメガネ　まさか!？

『朝野千里ちゃんでしょ』

私は、どうしようと思った。考える前に行動出来なかった。そも
そも理由がない。そして、私は正義感で動けるほど強い人間ではな
いんだ。

それを理由に逃げてもよかった。誰も責める人間はいない。見な
かった事にすればいい。

けれども、私の脚は校舎裏へと向かった。

『ど、どうして行くんですよ？』

解らない、けど私は……私の

『私の心が、痛いつて言ったんだ。私は』

「返して……返してよ！」

言いながら私は目を覆いたくなるほど無様だった。醜態をさらしながら、それでも私は抗った。

そして、返ってくるのは暴力、嘲笑、悪罵。痛みと、憤慨と、弱気が私の中にこみあげてくる。

どうしようもなかった、夕紅の事は許せなかったけれどもすごいと思う。こんなことを一年近くも耐えていたのだ。いや、訂正する耐えられなかったから、あんなにおどおどとして身を縮こまる様になったのだ。

私もあんな風になるのか？ そんな思考が頭の隅をよぎったけれども、今はメガネを取り返さなくてはならない。

あれは、あれは大事なものなんだ。

「裸になって、三回まわってワンと啼いてくれたら返してあげるよ？」

朱美は面白そうに笑う。屈辱だ。こんな奴を凄いと思った自分にも腹が立つ。

「う、うわあああああああ！」

体勢も構えもへったくれもなく、私は朱美に掴みかかろうとした。朱美はそれを見て、ひっ、と息をのんだけれどもすぐ周りの取り巻きが私を転ばした。砂利が口の中に入って気持ち悪かった。

「ああ、びっくりしたー。もうびっくりさせないでって、クソちゃん？」

朱美がそう言うとり巻きどもも笑いだした。

「自分で脱がないんだったら……脱がしてあげるよ」

そう言う私を抑えつけながら制服を無理やり脱がそうとした。

と、大きな声が聞こえた。

『センサー、こっちです！　こっちでいじめが起きています！』

朱美たちはその声が聞こえて、やばっ、と顔を見合わせて逃げようとした。けれども、その声の主は何を考えたか、姿を現してしまっただ。

声の主は

「ゆう、べに？」

と、鳥が肩に乗りながら現れた。私は夕紅にだけはこんな姿を見せたくなかった。メンツの問題だ。私はまさに会わせる顔がなかった。

朱美たちは落ち着いて、声をかけた。

「あ、なんだ、夕紅かー。脅かさないですよ？」

『何をしてるの？』

夕紅の問いに朱美たちはまた顔を合わせて笑った。

「あー、えーつとね、そう！　復讐。優しい夕紅の代わりに復讐やっってたんだよ」

『私はそんな事を頼んでいない、朱美』

呼び捨てにされて朱美は少しむっとした様子だった。夕紅の顔を見ると、いつものおどおどとした顔ではなく、冷たく真一文字に口元を引き結び堂々としていた。

「えー、だつてさ、復讐したいって言ってたじゃん」

私は朱美の言葉を聞きながら、やっぱりそうかと思った。確かに朱美たちは私をいじめようとしているが、それは夕紅の指示があったからだったのだ。

だが、今度も夕紅はきっぱり否と言った。

それを聞いて、朱美はもう面倒臭くなって脅しをかけてきた。

「何？　夕紅も、もう一度いじめられたいの？」

悪い笑みを浮かべる。私を抑えつけていた取り巻きたちも離れ夕紅を取り囲んだ。

だが、朱美は悪魔だった。

思い出したように私の事を見て告げる。

「ああ、クソちゃん？　この子をまた殴ってくれたら　いじめないわよ？」

その言葉は不快であった。その言葉は吐き気を催した。そしてその言葉は私に甘美に響いた。

立ち上がり、私は気が付いたら　夕紅の前に立っていた。

夕紅は私よりも大分小さい。そんな事に改めて気付いた。

茶色の瞳が私の眼をそらさず見つめている。私はその眼が恐かった。ああ、と気づく。

その眼はまっすぐと、逸らすことなく、私を見つめていたのだ。けれども、私は拳を振り上げる。高かったはずの私の誇りは汚泥にまみれて捨てられていた。

しかし、振り下ろすタイミングが解らない。あんなにいじめられて、私からも今殴られかけているのに夕紅は瞳をそらさなかった。

「なんでよ……」

私は夕紅にだけ聞こえるように呟いた。

「なんで、怖がらないの？　なんで、そんなにまっすぐなのよ？　なんで」

次の言葉を発する前に　私は夕紅に抱き寄せられた。

それを見て、朱美たちは面白おかしく笑った。汚く口々に卑猥で下劣な事を言う。

けれども私の耳には鳥が語る、夕紅の心しか聞こえなかった。

『大丈夫。大丈夫だよ、千里ちゃん』

夕紅が私を抱きしめると、私は崩れ落ちた。そして確信する。私はもう、夕紅に対しての敵意を持ってないという事を。

夕紅は私を守るかのように私の背後に立った。そして、朱美は声を投げる。

「なにになに？　夕紅って、ズーレーだったの？　やっぱり、マジでキモイ。それともあれ？　夕紅と千里ってとっくに出来たの？　うわー、じゃあノロケカーガッコーでのあれは」

『黙れ、雌豚』

「……はあ？」

夕紅の言葉はなんと云ったのか解らなかった。いや、ちゃんと聞こえた。鳥が喋っているのに滑舌もよくすらすと耳に入った。だが、誰よりも気が弱くおどおどとした夕紅がその言葉を言ったのがにわかには信じ難かった。

そして、夕紅はまた繰り返した。

『その鳥のフンよりの臭くて汚くて見るに堪えない不細工な口を閉じろって云ったの。耳まで悪いの？ 雌豚』

その言葉に、まさに言葉もないという感じで朱美は顔を真っ赤にして口をパクパクとしていた。

『笑える、確かに朱美の口は臭いよなー』

インコの声は夕紅のものではなかった。取り巻きのうちの一人がその言葉を聞いてびっくりとした。恐らくこいつが思った事なのだろう。

『フーか、もう辞めたいのに、またいじめようとか、ホント朱美って空気読めないよなー』

こちらも、取り巻きの心のようだ。

そして、今度は朱美の心を読んだ。

『うるさい！ あんたらは黙って私の言う事を聞けばいいのよ！ いじめてやるうか！』

こうなると統率力のないこいつらは烏合の衆にしかねない。朱美は取り巻き二人に食ってかかり、取り巻きの方は狼狽するしかない。

そして、夕紅はポケットから何か機械を出して鳥に代弁させた。

『今の会話は録音しました。ばらされなくなかったら、私たちをいじめることはしないで？ もし、今後私たちに危害を加えるような事があつたら私は容赦なくこのテープを学校側に提出する』

「いや、選択肢がまだあるわ」

朱美は往生際が悪かった。もう、負けているのに負けを認められないアホ。どうあがいても詰んでいるのに盤面を見て可能性を探し

続けるへぼ棋士。

「あんたの録音機を奪って壊すって言う選択肢がね！」

『お一人でかな？ 朱美』

そう言われ朱美は振り向いて取り巻きの顔を見た。どちらも、朱美からの視線をそらしていた。一人は率先してその場から去っていき、もう一人は持っていたメガネを私に返し同じようにやはり去っていった。

朱美はそんな彼女たちに対して罵倒をしたが、彼女たちは止まりも振り返りもしなかった。

視界から完全に消えてようやく落ち着いたのか、朱美は膝を落とした。

「ご、ごめんなさい。も、もういじめとかしないから……」

『解った。ばらしはしないよ。でも、よく覚えていてね？』

言葉を切って、告げる。

『私たちに危害を加えたら、容赦なくばらす。解った？』

朱美は何度も頷いて、私たちの前から消えた。

校舎裏には私たちだけが残った。

私は夕紅にどう声をかけたものかと思案した。その途中どさっと夕紅が膝をついた。

「だ、大丈夫か？」

私は心配しながら声をかけた。

『こ、腰ぬけた。こ、怖かったよお』

鳥が夕紅心を語ってくれた。先刻とは打って変わっていつもの臆病な夕紅に戻っていた。

「さっきのは演技だったのか？」

だとしたら、たいした女優だ。みんな騙されたのだから。

夕紅は、あはははと笑うが、それも鳥の言葉だ。私はあらためて夕紅に与えた傷の深さについて考えてしまった。

「……私の、あ、いや、私たちのせいなのか？ その、夕紅が喋れなくなっただのって？」

私、とはいえなかった。私が発端であり、私が望んだ事でもあるのに、私は自身の罪から眼をそらした。

夕紅は、『それだけじゃないよ、色々あるんだ。私にも』とだけ言った。私を責めるような言葉を吐かなかった。

「どうして」

『ん？ なに、千里ちゃん』

私は問いを告げた。たぶん今の私の中で一番興味を引いていることだ。

「どうして、私なんかを助けたの？」

どう考えたところで、夕紅が私を救う理由はない。むしろなぜいじめに加わらなかったのかの方が疑問だった。

夕紅はすぐには回答しなかった。その代りわたしに向けて手を差し出した。

『千里ちゃん、手を貸してくれないかな？ ちょっと立てそうになりからさ』

言われてから私に差し伸べられた手を取り、その柔らかい感触と手の小ささに驚きながら夕紅を起こした。

礼ととりあえず移動しながら話をしようということになり、私たちは横並びになって歩いた。

『いやだったんだ。いじめが』

私は黙って聞いた。促す事もせかず事もしなかったから、夕紅としては話しづらかったかもしれないが。

『するのもしられるのも見るのも聞くのも、私は全部いやだなあ。理想はいじめがない世界だけど、きつとどこに行っただっていじめはある。差別も残る』

けれども私が勇気を持って出来たのは一人じゃなかったからだよ、夕紅はそう言った。

『インちゃんがいて、いじめが嫌になってるクラスメイトがいて、

そして いじめられても私に暴力を振るわなかった千里ちゃんがいて、私はあんな事が言えたんだ」

「……綺麗事だな」

私は言わなきゃいいのに言ってしまう。けれども、私のそんな皮肉にも夕紅は笑顔で、やっぱり？ といって声も出さずに笑った。

校門まで行き夕紅と別れることとなった。さよなら、とう夕紅は言った。

私は、そんな夕紅を呼びとめた。

『何？ 千里ちゃん』

私は言葉に詰まる。けれども、夕紅は私が先刻したように促す事もせかず事も言わなかった。

私は心を落ち着かせてから言う。

「明日、土曜日。空いているか？」

『うん。空いてるけど？ どうしたの？』

私は言おうとして、言葉が詰まった。代わりに……あの鳥が私の思いを言葉にした。

『明日、F市に遊びに行かないか？』

4章

土曜日私の朝は早い。二人分の朝食を作り、新聞を読み、スーツに着替え、道着を持ち駅まで車で行く。電車で揺られながら、F市の南側にある道場に向かう。

「おはようございます」

誰もいなかったが私は礼をしてから更衣室に入った。着替えて柔軟を始め、道場の周りを軽く二十周し、型を一通り終え、あとはひたすら筋トレと走り込みをした。

八時を過ぎると人が集まり、私よりも若い師範代がニコニコしながら挨拶をした。それに返事をしない練習生はいなかった。恐らく、師範代の恐さを身に試みてわかつているからだろう。私ですら怖いのだから。

それから四時間はすぐに過ぎた。その間組手稽古を師範代と彦作そして私よりも口数の少ない安藤という青年とやった。そしてこの道場は子供の方が多い。私や彦作も師範代の手伝いとして子供たちに教える事がもっぱらだった。

それでも四時間も動きっぱなしだったから汗はかいた。スーツと道着はスポーツバッグにしまい、行きつけの銭湯に行こうと思った。

「お疲れ様です、吟さん」

「彦作くんか」

「やだなー、いつもみたいに呼び捨てでいいですよ。ところで、今日も銭湯に行くんですか？」

私は肯定した。彦作の方でも話したい事があったようだったから一緒に行くかと誘ったら、二つ返事で乗ってきた。

シャワーで汗を落とし、髪を洗ってから風呂に入った。休日の土曜日という事で老若を問わず混んでいた。

彦作は単刀直入に切り出した。

「吟さん、もう俺らの付添しなくていいですよ」

予想外だったので、私はもう一度話を聞いてしまった。彦作も私の反応を予想していたようで、面倒くさがることなくもう一度繰り返し返した。

「夜の『グループ』探しは終わりっす」

それはほぼ活動の終わりを示していた。サラリーマン狩りは昼には行われない。

「解散するのか？」

「いや、まだっす」

私は疑問符を浮かべた。そんな私に対してハアとため息をついてから彦作は懇切丁寧に説明した。

「いいっすか？ 『グループ』のボスは吟さんの子供を狙うと言ってきたんです」

「いや、別に狙うとは言って」

言ってからつい話の腰を折ってしまった事に気付いた。悪いと思いつつ彦作の顔を見ると、例によって悪い顔をしていた。

「あのねえ、吟さん。その理屈は現実逃避か、活かすも殺すも自由な料理人に掴まれたまな板のコイが話す見当違いな戯言と同じっす。吟さんだつて上司から含みある言葉とか言われて、なんとはなしに空気を読んで出世していった社会人でしょ？ これくらいは読めないと老後一人になった時詐欺にあつて自殺しちゃいますよ？」

「わ、悪い。というか声がでかい」

隣で気持ちよさそうに風呂に入っていた六十代くらいのおじいさんが、彦作の言葉で泣いてしまった。静かに泣いているから気付きにくいのが幸いだった。

「上がりましょう、デパートのフードコートにでも行って飯を食いながら話しますか」

私は頷いてF市のデパート『イレブン』へ向かった。地方のデパートらしく週末には人でごった返しになっていた。フードコートも混んでいて、ぎりぎり二人分の席が空いていたくらいだ。

私は味噌ラーメンを頼み、彦作は空揚げ定食を選んでいた。セル

フの水を飲みながら話を再開した。

「狙いは娘さんです。ただ、これは今までの『グループ』の動きからまったく一貫性がないことなんっす」

それは確かだろう、娘、夕紅に何をしようというのか解らないではなかった。彼らが犯罪をしているのならば、夕紅に対しても法を犯すことを平気でやるのだろう。

「はつきり言つて、イレギュラーなんっす。俺達もこういう展開になるとはまるで思っていなかったんすから」

「確かに、そうだろう」

原因は何があるだろう、私は解っていた。しかし、私は『グループ』のボスと過去に関わりがある事を彼らには話さなかった。けれども、この賢しい少年は恐らく状況から勘付いているだろう。

「吟さん、『グループ』のボスと……知り合いなんじゃないっすか？」

予想した事と同じタイミングで言葉に出されるという経験はした事がなかったが、喉をつまらせるには十分だった。

「そのリアクションってことはまじだったんすか？」

「ゲホツ、カハ、カハ……ああ、本当だ」

庇ってんっすか？ 彦作は私の回答から疑問に思ふ当然の事を質問してきた。

「違う、私は覚えていないが向こうは覚えているようだ」

彦作の回転は速い。すぐにそれから推測できる事柄を述べた。

「だったら、可能性は一つですね。『グループ』のボスは吟さんと何らかの面識があり、且つ、恨みを抱いている相手という事っす」

だが、私はそれだけでは思い出せない。さらに彦作が考えたことは私も考えた。だが、浮かんでこない。恨みを買っていないというわけではない。何せ四十数年という歳月は膨大だ、恨みの十や、二十買っていないわけがないだろう。それに加え頭も若いころと同じようには使えない。ボケたつもりはないが、錆ついてきているのは確かだ。

「せめて一つ条件が決まれば、だいぶ見えてくるんだがな」

私は柄にもなく弱音を吐いてしまった。けれども、この少年は行動力もあって見抜く知恵もあったようだ。三つも条件があるといった。

「全部あつと驚くほど簡単つす、マジこんなのも思い浮かばなかったのか、つて条件つす」

私はなんだ、と尋ねたが彦作は何か作つたような表情をした。

「モ・ナミ。貴方の灰色の脳細胞を使いなさい。榎原にも解つた事です。きつとあなたにも解るでしょう」

萌奈美？ 誰だ？

私が面食らつていると彦作は「ポア口つすよ、名探偵ポア口。知りません？ アガサ・クリスティーの！」と言つてきた。アガサと聞いて思い出すのは水曜日に出会つた人外が存在だ。人外とは言うてもコミカルで威厳のない奴だつたけれども。そして、あの濃い一日からまだ三日しか経つていないというのだから最近は時間の密度が濃い。

私は律儀に考えているが、堅い頭ではなかなか思い浮かばない。彦作はというとそんな私を尻目に空揚げ定食を平らげお盆と食器をカウンターに返してきて水を飲んでいた。

「解りました？ つて、その様子じゃわかつていないっばいっすね」ヒントを出しましょう、とにこやかに告げた。そして、そのヒントは食事中にはタブーな単語がはばかることなくあつた。

「トイレは大まかに分け何種類あるか？ 簡単に考えて」

幸いだったのはさっきの失敗を反省したのか声のでかさは私と彦作だけにしか聞こえないボリュームだった。

便器、じゃないよな。というか飯時にこんな事を考えたら死ぬるむしろ、吐く。言葉を思い返そう、大まかに分けて、これがヒントだろう。トイレを大まかに分けたら、水洗か、いや様式でもないだろう。もっと簡単に ーん？

ここで、私は本来の目的はなんだつたかと思ひ返した。『グルー

プ』のボスを探すのだ。そいつを特定できる条件、それを意識して考えれば……あ！

「男ってことか？」

イグザクトリイ！ 彦作は手を叩いて応えた。

「ってか一問だけでこんな時間に時間かかるんだつたら、あとは全部言いますね。」

二つ目、これは吟さん自身が言っていました。『若い』です。つても、吟さんの若いってのは俺らの感性からは解りませんから、感覚を共有することはできませんね。

そして、三つめ。これが一番重要つす。そして、当たり前すぎる事……『グループ』のボスは『F市近辺に住んでいる』という事つす

どれも理にかなったことだ、というかそんなことも自分で考えられない事に私は少し恥じらいを覚えた。

「さらに思いついたことなんつすけど、またこれも当たり前的事つす。『グループ』のボスと吟さんはい最近あつたんじゃないつすかね？」

どうしてか、という言葉は使わなかつた。彦作が当たり前といったからすこし考えれば解る事だろうとあたりをつけたからだ。

そして、私は少し冷静になって考えてみた。多分こういうことだろう。

「私の声を携帯電話で話ただけで、思い出したという事からか」「ブーンゴ」

それだけだと弱いかもしれないが、若い、恐らく二十代の男、という条件もプラスされればかなり人物像は狭まってくる。

「となるとやっぱり、一番怪しいのは」

私は彦作の言葉を取って答えた。その若い人間と関わる場所は「会社の人間ってことか」

「七割がたの正解のつてのが正しいかな、その答えだと」

彦作の言わんとしている事がわかつた。会社に、私の場合だと印

刷会社、で関わっている人間というのだろう。その中で、恨みを買
いなおかつ二十代の男性であるとするなら大分話は限られてくる。

「さらに絞れますね。これも簡単な事です。どうして、吟さんは『
グループ』のボスから恨みを買ったのでしょうか？」

「それは」

「さらに、付け加えるなら会社員をしながらそんなやくざ稼業をや
ってるのは何故か？ お金が欲しい、という事もあるでしょう。で
すが、これは危険な事だし実入りも少ないはずです。では、なぜそ
の男はこんな裏稼業をしているのか？」

二つの問いはヒントだった。恐らく、彦作は頭の中で答えを組み
立てているだろう。だが、私はまだ導けなかった。恐らく簡単なこ
とだ。でも、与えられた光明二つで探し当てる真実との距離が近す
ぎて、逆に見えない。

そして、次の彦作の一言で私は真実、と思しきものを探り当てた。
「働く人が一番怖いことは何でしょう？」

「……解雇、か？」

大正解、彦作は悪い顔をして微笑んだ。

「吟さんの会社で最近、恐らく二、三年くらいの期間、解雇した若
い男。それが限りなく黒に近いグレーっすね」

「というか彦作……お前、実は頭いいだろ？」

解ります？ と調子に乗った顔をしたので私は最後のスープを飲
んで、カウンターに腕と箸を返しに行った。

なんととはなしに視線を泳がせた。地方都市であるF市ではやはり
家族連れが多い。私は妻の事を思い出していた。デートの事、そし
て赤ん坊だった夕紅を抱いていた事、抱き方が下手だった事もあつ
たな。

ノスタルジックに浸るにはここは喧騒が過ぎる、私はそんなふう
に思つて彦作の待つている席に戻ろうとした。

だが、私は視界の端に見覚えのある顔が横切ったのに気付いた。
その映像を追つて振り向くと、私の娘、夕紅が立っていた。

水色の明るいチェックのワンピースに白いカーディガンを羽織っていた。どうして、ここにいる？

その疑問は楽しそうに話している、クラスメイトだろうか？ 女の子がいて氷解した。

傍目から見て二人は人目を引いた。夕紅はそれほど目立つ服装ではないのだが、クラスメイトの子が赤を基調とした派手な格好をしていたから、夕紅の服装とちょうど反対色で目立っていた。

私は二人を追った。子供と大人の歩幅である。すぐに私は追いついた。

「夕紅！」

二人とも私の声に振り向いた。夕紅は驚いたような顔をして、クラスメイトの子は怪訝な顔つきで私を見た。

口を開いたのは、当然と言えば当然だが、クラスメイトの子だった。

「何、おっさん。私らになんか用？ ナンパだったら他当たってね。あとマジだったら、年齢を考えて。そこらのおばさんとセルフの茶でも飲んでろ」

私はこの子の無礼でぶしつけな言葉にカチンときた。だが、言葉を重ねれば誤解は解けるだろう。

助け船は意外にも、意外ではないのだが、夕紅が出してくれた。

携帯電話のメール機能で打鍵して、説明したのだった。

クラスメイトの子は、その文面を読んで奇妙な表情をした。

いや、奇妙ではない。その事だけを見れば、ただ驚いただけなのだが、どうしてたかが親だという事でそこまで驚くのが私には考えが及ばなかった。

「ごめんなさい。じゃ、そゆことで」

この子がなんて言うのか解らないから彼女と呼ぶ事にしよう。彼女は夕紅の手首を掴んで、そそくさとどこかへと行こうとした。

「待ちなさい」

私は夕紅の肩を掴んで止めた。それで漸く彼女は私の話を聞くこ

とにしたらしい。

「君は夕紅の友達かい？」

「ああ、まあ、そうっす」

「そうです、だ。今日は二人だけで来たのかい？」

「そーです」

そこで彼女の名前を聞くのを忘れていたと思い、尋ねた。だが、彼女はためらいを覚えていたようだ。

「チサト・アサノです。これでいいですか？ それじゃ、これから遊ぶ系のお仕事があるんで、邪魔しないでください」

と言って今度こそ彼女、チサト・アサノは去っていった。私はその名前を聞いてすっきりしない感覚に陥った。夜中に嫌な夢を見た後、その残滓がリフレインするような気持ち悪い感覚だ。

私はその思考を隅に置きアサノチサトとはどういう字をあてるのかという事を思案した

そして、パズルが完成した。

「……………解った」

「何がっすか？」

後ろから彦作に声をかけられたが、私は驚くことはなかった。難問を解いた時に感じるような感動の所為で反射神経が麻痺したのだろう。

「ボスだ、『グループ』の」

そう間違いない。だが、ボスが解る事が私にとって必ずしもいい事ではない。

なぜなら、その事が私にとってはあまりいい思い出ではなく、事の正義はあいつにあるのだから。

彦作に促されて、私は応えた。

「……………朝野一樹。私が、リストラした男だ」

「おー、見えます、見えますよ。貴方は誰かに守られています！それは幼い時にいなくなつたあなたの大切な人のようです」

軽い遊びの気分で出張の占い師に占つてもらっていた。けど、どうしたって胡散臭さしか感じられなかった。タロットなんかだったらなんとなく占い、って気分を味わえるのだけでも水晶を使った占いは占いではなく、パフォーマンスとしか思えないのだ。

まあ、それを夕紅にやらせてるってのはどうなんだろうな。と思つたけれどもここに来る途中夕紅が、占い好きってことがわかつたからいい暇つぶしにはなるだろう。本人も興味津津だったし。

さすがにインコのインちゃんをデパートに入れるわけに行かなくて今日は連れてきてない。だから、夕紅との意思疎通はケータイがなければできないのだ。

『お母さんなのかなー、守っているのって』

その文面を見て、先刻の水元吟哲を説明するくだりを思い出した。

『吟哲さんは、私の……親だよ』

お母さんはよくて、お父さんは親と呼ぶ。まあ、人の家の事だしあんま深く踏み入るのもあれだ。

『それにしても、なんで今日は誘ってくれたの？』

すっかり打ち解けてしまっている。学校での様子からもうチョイびくびくしているかと思つたけど、案外話してみると普通だ。気負つていた私の方がなんとというか臆病者みたいじゃないか。

私はストレートに言った。

「仲直りのためだよ。ただ、私を信用するな。ホントのところ、お前をだしに使うつもりでいるだけなんだから」

口がすべつたわけではない。これはちゃんとやっておくべきことなんだ。

「朱美は多分あれで終わった。今後、よっぽどの事がない限り、刃向おうなんて思わないだろう。けれども、クラスの連中はまだ私の事を敵視している。そこでクラスに受け入れられたお前を利用して、どうにか溶け込もうつてのが私の目的だ」

私は洗いざらい今日の目的を語った。これを話せばさすがに夕紅も私を見る目が変わるだろうことも理解している。けど、これが私なりの贖罪だった。

だが、夕紅は解っているのか解っていないのか『千里ちゃんは、優しいね』と大き目の外した言葉を見せた。

「……どこがだよ。自分で言うのもあれだが、今の私の言ったことは凶々しいって言うのが正しいだろ、どう聞いても」

夕紅はすぐに打鍵した。

『優しいよ、嫌われると解っていても本音を私に話したんでしょ？

千里ちゃんは私にとって優しいよ』

……恥ずかしい奴め。

私は内心そんな事を思った。

私たちはデパートのベンチに座ってクレープを食べながら駄弁っていた。

「……ありがとう、な」

話の途中に私は切り出した。夕紅は何の事だろう、と思ったのかケータイのキーを打っていたけれども、私はその会話がめんどくさいと思ったので手を掴んで止めた。

「昨日の事だ、まだ言っていなかったわね……ありがとう」

『そんなことないよ……全部、インちゃんが考えたことだし』

それこそそんなことはなかった、思いながら私は素直に言葉を告げた。

「それでも、夕紅がいなきゃ私はつぶれていたよ。全部じゃないなら、九割はお前のおかげだ。ありがとう」

夕紅の顔を見ながら、気付いた事がある。こいつは打ち解けたように見えてまだ私という事に緊張があるようだ。眼が泳いでいる、けれどもそれを責めることはできない。それでも、私の言った事に照れているようにも見えた。

私は話題を変えた。

「このメガネ、伊達なんだ」

『……知ってる。昔、友達と話しているの聞いた事があるから……
あ、でも盗み聞きとかじゃないからね。たまたま聞こえてきてたま
たま覚えていただけで、その』

「いいよ、気にしてない。じゃ、これは知ってるかなあ」

私はストレートに言った。

「これ、私の兄さんからもらったものなんだ。誕生日に」

夕紅は、へえそうなんだ、とそっけなく言った。まあ、他人の所
有物の経緯なんて誰だってそれくらいしか反応しないだろう。

千里には赤が似合う、兄さんはそう言ってくれた。だから私は好
んで赤い服や小物を身につけるようになった。

私は、今でも兄さんの事が好きだ。兄妹として。だから、先刻会
った夕紅の父親　水元吟哲が許せないでいた。

それでも夕紅に敵意を向けるようなことはもうしないだろう。

そして、今日はチャンスでもあった。

「そろそろ帰らない？」

私はそう告げた。夕紅は『いいけど、早くない？』と返した。確
かに、まだ三時を過ぎたばかりだ。遊び足りないというのが心情だ。

私は、言葉を弄した。

「夕紅の家に行ってみたいんだよ」

そう、私は夕紅の　水元家の家に行きたかった。

水元吟哲に話を聞くために。

私は夕紅達と別れてから、一樹が住んでいたアパートに寄って
て大家に話を聞いた。題目は昔部下が住んでいた事を思い出して懐
かしかったから寄ったというものだ。大家は別段怪しむでもなく一
樹の素行について語ってくれた。

「ああ、気さくな感じでいい人だったよ。よく日曜大工を手伝って
くれてね。お茶一杯しか出さないのに、本当に喜んでくれたことも
あったわ」

「今どこに住んでいるか解りますか？」

大家は首を振った。

「さあ、一度実家に戻ったらしいけどねえ。その後の事はとんと聞かないね。ただ、親父さんが厳しい人ってんだからずっと実家にいるってことはないんじゃないかね。なんだい、あんた興信所の人かい？」

私はぼろが出そうになったから、違いますとやんわり否定して礼を言っつてその場から出ていった。

車に戻りメールを打つ、彦作達にだ。内容は収穫なしということだ。朝野一樹の経歴は一緒に仕事をしていたからよく覚えている。高校が彦作たちの高校と一緒にだったのだ。偶然だとしても、それはよい偶然と言えただろう。おかげで彦作たちは学校の職員や部活のOBやOGに情報を集めてもらっている。だが、いくらか痕跡はあるだろうが、一樹が在学していたのは七年も前だ。当れば住んでいる場所が掴めるかもしれないとはいえ、それが小さな確率であることは確かだ。

一通り送り終えてから私は家に帰ることにした。いつもだったら図書館で夜まで本を読んでいるのだが、精神的にもそんな余裕はなかったし夕紅の事も気にかかった。

「ただいま」

家に戻って私は十数年ぶりにそんな当たり前な挨拶をした事に、自分でも驚いていた。

出迎えてくれる声がないと思っていたが、意外にも返してくれる奴がいた。

『お帰りですよ！』

鳥、代弁インコだった。

「お前は元気がいいな、鳥」

『インちゃんはお前じゃないですよ、鳥でもないですよ！ インちゃんはインちゃんですよ！』

その言葉を聞いて子音だけ変えれば吟ちゃんと一緒にだなと瑠璃ち

やんの事を思い出した。

「まあいい。なんで今日は夕紅についていかなかったんだ？ それとも夕紅はいつつもお前をつれていないのか？」

「インちゃんでしょ。いつつも連れてるでしょ。でも、今日は外に出るし人混みの中だから、私は置いていかれたんでしょ！」

そうか、私は呟いて浴室に向かった。道着を洗うためだ。明日も一応稽古があるが行かない事にした。

『夕紅の事が、心配だからな』

私の言葉じゃない。いつの間にか代弁インコは私の肩にとまっていた。鳥、インちゃんとか行っていたが私にとっては鳥だ、は鳥とも思えない人間味を帯びた口調で奇妙に笑っていた。

『やっと、父親らしくなってきたでしょ？』

「……私は、あいつの、夕紅の」

言葉が繋がらない。夕子に対しての不信感からではない。単純に私はいまだ自信が持てないでいたのだ。

どうして、自信が持てよう。私は夕紅の友人の顔すら知らなかったのだ。私はあいつの事を解ってやれていない。

そして、あいつも私の事を父親と認めていない。私の事を『吟哲さん』と他人行儀に呼ぶ事が不信感の表れでもあるだろう。いや、これは私の想像だ。違つかもしれない。けれども、彦作が言った通り私も空気を読んで出世してきた男だ。他人の善意や悪意は多少読める。この想像は悲しいけれども現実なのだろう。

鳥はまた喋った。だが、今度はいつもの甲高い声ではなく低くドスの利いた声だった。

『なんだよ、まだグググジしているのか？』

「お前に……お前に何が解る」

『解るさ』

鳥は間髪いれずに肯定してきた。

『吟哲の事は、私が一番わかっている。心も読めることもある。だが、そんなことしなくても解る。お前は単純だからな』

「鳥に、単純と呼ばわりされるとは思わなかった」

そして、今度は短く笑った。

『ほら、軽口が叩けるだろう？ だから、お前は単純なんですよ』

私は、励まされたのだろうか？ そして、私はこういう喋り方を
する奴を一人だけ知っている。

もしかして、私の頭に疑念がよぎった。

その名前を読んでみようと思ひ、私は言葉に出そうとしたがちよ
うどよく玄関のチャームが鳴った。

誰だ、と思ひ急いで玄関に行くと夕紅と、朝野千里が立っていた。

夕紅が友達を家に入れるのは、私が知らないだけかもしれないが、
これが初めてであった。私にはそれが複雑であったが嬉しかった。
それがたとえ、夕紅に危害を加えようとしている男の妹だとして
もだ。

いや、これは勘に過ぎない。確かに一樹は妹が何人かいると言っ
ていたが、朝野と言う名字はどこにでもいるだろう。単なる偶然、
その可能性の方が一番近いだろう。

だから、私が思ったことは言いがかりだ。鳥が私の思いをトレ―
スして告げ口してくれなかったのは助かった。

『千里ちゃん、私紅茶淹れてくるから二階の私の部屋で待ってて』

「あー、ごめん。私は夕紅の部屋知らないんだけど」

そう言えば、と夕紅はこぼした。私は案内役を買って出た。

『吟哲さん、お願いします』

「……ああ」

私は頷いて、千里を案内した。

「ゆっくりしてゆっくり」

「そうさせてもらいます」

じゃあ、と言って去ろうとしてから私はしまったと思った。これ
はチャンスであったのだ。もし、私の考えが正しかったとして千里
が一樹の妹だったなら、一樹の居所を確かめる絶好の機会だったの

だ。

普段の私だったらまあいいかと流しただろうが、ああそうだと
言っただけとらしく尋ねた。もう少しスマートにできたはずなの
が、私に役者の才能はないらしい。

「もしかして、千里ちゃんは」

「一樹なら、私の兄です」

私はえっ、と言っただけでうろたえた。千里はそんな私を見ながら、違
いましたか？ と言っただけで答えを促した。

「ああ、うん。私が聞きたかったのはそれだ」

「よかった」

はてな、と不可解な事を言い出した。何がよかったのか、と疑問
を発する前に、またも千里は切り出した。

「兄さんをクビにした事をまだ覚えておいてくれて」

その毒のない言葉に私は一瞬何を言われたかが理解できなかった。
だが、数瞬の間で消化し噛み砕く。

だが、私が主導権を取ることは出来なかった。千里が語りだした
からだ、そして、それを聞いて私は一樹のことを聞きだす事を忘れ
た。千里はこう言ったのだ。

夕紅をいじめたのは私だ、と。

「そう、貴方は私を怨んでいい。私のしたことは確実に逆恨みだ、
その事の責めは素直に甘受したいと思います」

「……友達、と言ったのは嘘だったのか？」

いいえ、千里は首を横に振った。

「夕紅は少なくともそう思っている。こんな私を友達だ、とね……
私も、友達でありたいと思っている。けど、私がした事を考えれば、
そこまで厚顔にも無恥にもなれません」

私は事態を飲み込めなかった。確かに、夕紅と千里の間に確執
があった。それは確かだろう。けれども、互いが互いを許し合うこ
とも最近あった。おそらく、これもあの鳥のおかげなのだろう。

「仲よくしてやってくれ」

気づいていたら、私はそんな言葉を千里にかけていた。千里は俯いていた顔をあげ、えっ、という顔をしていた。けれども、その表情は怪訝なものに塗りかわった。千里の言いたいことは解る。

だが、私はこう言った。

「無恥になつてくれ。厚顔にもなつてくれ。君は確かに夕紅をいじめた。その理由が……私に原因があるのだろうか？ 一樹を解雇したということに。だとしたら、私は、私もその事を甘受しなければいけない。責めも聞こう。だから、夕紅と 仲よくしてやってくれ」言葉にしてから思ったが、私の思いばかり強くて整然としていない。やはり、こういうことは苦手だ。

「……一つだけ、いいですか？」
感じ入るでもなく千里は言葉にした。彼女にとっての最大の疑問を。

「どうして、兄はリストラされなければならなかったのですか？」
私は、返事に詰まった。これは私としても、あまり話したい事ではない。正義は一樹の側にあり、悪は私、いや、一樹や私を雇っている会社の側にあつたからだ。

「優秀すぎたからだ」

言ってから、千里はぼかんとした顔になった。そして、困惑の所為か声に出して私を追求した。

「ど、どうして、それが悪いんですか？ だって、成果が上げられないなら解ります。でも、優秀すぎたつて」

「大人の世界は、そう言う事も平気で起こるんだよ」

確かに一樹は優秀だった。新人でありながら会社に多大な利益に貢献し、新しい取引先を増やした。私もよく働く彼が好ましかった。だから、私はその話を聞いた時耳を疑った。

一樹の解雇だ。

後から知った事だがその一件は派閥が絡んだ事でもあつたらしい。一樹と同期で入った社員が部長の息子だった。彼も一樹ほどではないにせよ優秀であつたが、華々しい成果を出していた一樹と比べれ

ばその功績はかすんでしまう。

部長はそれが嫌だったのだろう。一樹の直接の上司である私にリストラするように申しつけ、その理由も私に任せ、悪く言えば投げっぱなし、そして結果として一樹は会社を自主的に辞めることとなった。

だが、私は自分だけがその事の責がある訳ではないと思っていた。「千里ちゃん、一樹が可哀想なのは解る。けれども、彼も悪い部分があった」

「何がです！？ 言い訳なんか」

確かに聞きたくないだろう、だが……

「聞いてもらう。一樹は戦えたんだ。はっきり言って彼のリストラは解雇権の乱用に当たる。非は私の、いや会社の側にある。だけれども、彼は戦わなかった。彼が最後に私に言ったこともうかがえる。彼はプライドと会社に残る事を天秤にかけて プライドを取った。それが彼の選択だった」

一樹の言った言葉を思い出す。それはいつも静かでありながら仕事となると快活に喋っていた彼のものとは思えない安っぽいものだった。『こんな会社、俺の方から辞めさせてもらいます！』

愚かな選択、とは言い切れない。例え裁判沙汰にまでして会社と戦ったところで、軋轢は残る。不和が生じる。今の時代を生きるのに必要不可欠な金も、有限である時間も戦った場合にはすり減っていただろう。ある意味賢明ではあった。

それでも、私は言ってしまったリストラという出来事に今でも自責の念を禁じ得ない。

結局、この少女に懺悔して許されたかったのだ。

「私は、貴方を許しません」

もつともなことだ。幾ら弁を弄したところで千里からすれば詭弁にしか聞こえなかったのだろう。

しかし、この少女はですが、と続けた。

「貴方を恨みません」

「……そうか」

私はそれだけ聞いて、夕紅の部屋を去った。

台所の夕紅にちよつと出かけてくる、と言って私は家を出た。本当は、出かける用事なんてなかったのに、だ。

けれども、鳥は何も言わなかった。

私は、なぜか確信した。けれどもその確信の根拠は勘でしかない。きっと、あの鳥は　そんな事を思いながら私は黄昏時の街に車で出かけた。

私は混乱していた。と言うよりも自分を確かに保てられなかった。吟哲の言った事を鵜呑みするわけではないが、彼の言い分の正しさも解つたし、兄さんにも間違いや非があることも認識させられた。

『お待たせー。ローズヒップティーしかなかったけど、いいかな？』
盆を両手で持ち肩にインちゃんを乗せた夕紅が入ってきた。

「ああ、いいよ」

私はスティックシュガーを切り強く香るローズヒップティーの中に入れ、ティースプーンでかき混ぜた。夕紅はストレートのまま香りを楽しみながら飲んでいた。ただ、お茶受けがまがりせんべえというちぐはぐさに私は苦笑した。

私は帰りたかった。ここに来た目的は果たせだし、用もなかったけれども、それだけだったら夕紅が可哀想だ。何か一つ話をしたら私は帰ろう、そう思っていていつも疑問に思っていた事を私は口にした。

「どうして、夕紅は言葉が喋れなくなるまで傷ついたのに、学校に行くのをやめなかったの？」

言ってから、いじめを始めた当人の話す事ではないなと思ひ恥ずかしさがこみ上げてきた。吟哲には厚顔になれ、とは言われたが、これでは面の皮が厚過ぎるだろう。

「やっぱなし、今は忘れ」

『吟哲さんに』

止めに入った私の言葉を無視して夕紅は語りだした。

『吟哲さんに、心配をかけたくなかったから、私は学校に行ってた』
「結局心配かけたんじゃない？」

そうだね、夕紅ははにかみながら紅茶を飲んだ。綺麗な飲み方を
する。飲むときに音を立てないで飲むだ。

『吟哲さんは気にしてなかっただろうけどね。だって、いつも私が
学校に行く前に家を出て帰るのはいつも十二時を過ぎてから。その
ころには私はもう眠ってる。だから、私のしていたことは 全部
自己満足なんだ』

言ってから笑顔を浮かべた。その笑顔の中に悲愴なもの感じて私
は痛ましかった。

『愛されていると、思いたかったんだ。私は。一緒に食事を取る事
が七年間まつたくなかったの。本当、休日の時は外に行くし、平日
はさっきも言った通り。だから、私は親の悪態をつきながら談笑す
るクラスメイトが うらやましかった』

だって、私はそんな事を言うことすら許されていなかったんだか
ら 夕紅は困ったように眉をひそめながら笑った。

そんな夕紅を私は可哀想に思えた。私は末っ子で他の兄妹と比べ
て愛情を受けて育った。父母だけではない、兄さんや姉さんたちか
らも私は可愛がられた。そんな私は夕紅の苦しみや葛藤は理解でき
ない。できると言えたら、それこそ傲慢であり無知であり無恥であ
るだろう。

それでも、私は言いたかった。

「吟哲、あ、いや……お父さんは、夕紅の事を愛しているよ」

『……そうかな』

「そうだよ。って言うか、夕紅。生意気」

えっ、という表情をしてから私の言葉に困惑したようだった。言
葉を選べばよかった。いじめを受けたもののデリケートな心を落ち

着かせる為にも強い言葉は控えた方がいい、それは解っていたが私は間髪いれずにバカな事を言った。

「私が愛しているといつたら愛してるの。いい？ 夕紅のお父さんは病める時も健やかなる時も夕紅を愛している。片時も忘れていない。それでいいじゃない？」

『それって結婚式の時のセリフだよ……』

「あれ？ 夕紅は子供の頃言ったか？ 将来パパと結婚する、って……うん」

私も、そう言うとお互い笑いあった。

「……じゃ、私はそろそろ帰るよ」
「もう？」

「ああ、そろそろ帰らないと心配するからね。親が」

そう言うて私は夕紅の家を出た。私は自転車に乗り、二十分ほどかけて家に帰った。

「ただいまー」

私はそう言うて、靴を脱いでいると母さんが慌ててやってきた。

私はその顔を見ておかしいな、と思った。いつも落ち着いて、悪く言えばのほほんとしている母さんが焦っている所を見たのは兄さんがリストラされていったん家に戻ってきたとき以来だ。

「どうしたの？」

「ああ、その、千里。ちょっと来なさい、父さんから話があるそうなのよ」

私はなんだろう、と思ったけれども促されて父さんのいる居間へ向かった。

「……こんな時にどこへ行っていた」

どこがこんな時なのか、と言う事が解らなかつたけれども疑問は発しない。父さんは優しいけれども、こういう時は話の腰を折ったりしたら余計に不興を買うだけになる事を私は知っていた。

「友達と遊んでいました」

父さんは言葉遣いに厳しい。この家で父さんに敬語で話さないの

は一番上の姉と兄さんくらいだろう。

そうか、と行って父さんはおもむろにケータイを取りだした。そして、慣れない手つきで操作しながらディスプレイを私に見せた。メールのようだった。私はその文面を眼で追って行って　驚いた。

件名：お宅の娘さん……

本文：いじめられているよ。

その下に私がインちゃんの糞をかけられた画像が貼られていた。しかも、顔は私のものとはつきりとわかる。それから恐らくクラスメイトが取った写メであるのだろうことは予想がついた。

けれども、誰が送ったかはわからない。真っ先に思いついたのは朱美だが、メールアドレスは朱美のものではなかったし、そんな事をする余裕もないだろう。そして、誰のものかもまた解らなかった。ただ、不可解だったのはケータイのものではなくパソコンのアドレスだった事だ。

画像はその後も続いた。私が朱美たちに暴力をふるわれている写真だった。けれども、夕方であり照明もなかった事もあってボケていた。

「これは、本当の事か？」

「え、あ、その　」

「本当の事か？」

有無を言わさぬ口調に委縮しながら私はハイと頷いた。

「どうして、俺達に相談しなかった」

「別に、たいした事じゃなかったし、終わった事ですから」

「女の命に糞をかけられる事がたいしたことじゃないというのか、お前は」

いえ、そんな、私は口ごもりながら父さんは間断なく喋った。その内容は主に私に対する心配であった。私が今までそんなそぶりを見せなかった事も父さんの心配に拍車をかけたのだろう。

そして、父さんは言った。

「明日、学校に行く。学校に行つて教師とお前に糞をかけた生徒と生徒の親も断罪しよう」

私は大丈夫だよ、と言つてやめさせようとしたが、父さんは全然聞く耳を持たないといった感じだった。こうなるといつも温厚な父さんは手のつけられない頑固おやじに変貌する。

私は困つたなと思いつながら自分の部屋に戻つた。部屋着のジャージ、これは友達に見せた事がないし見られたくもない、に着替えてベッドの上でゴロゴロと転がった。これは私が自覚している、困つた時のリアクションだった。

そして、私の部屋へ戻りパソコンを立ち上げる。兄のお下がりだった。古い機種で性能も肩落ちしているだろう。事実、かなり重いとりあえず、先刻見たアドレスが私の知り合いの中にないかを確かめた。パソコンに入っているアドレスはほとんどネット上の知り合いのもので、面識のある人間の者の方が少なかった。

そして、一人だけ酷似したアドレスを持っている人間がいた。しかし、私はそれがにわかには信じ難かった。

それは兄の、朝野一樹のものだったからだ。そして、ケータイが鳴つた。メールではない。着メロだったから、電話だ。そして、私はその人から電話がかかってくるのがいつ以来だろうと、思い返した。

電話の主は兄さん、朝野一樹だった。

「もしもし、兄さん。どういう事？」

『おいおい、千里。久しぶりに話す兄に対して、いきなりそんな言い草はないんじゃないかな？ お兄ちゃん悲しいよ』

兄さんはおどけた調子だ。こんな兄さんは私は知っている。将棋やインカの黄金で何か仕掛けてくるときにいつもこんな口ぶりになる。そして、大抵の場合はそれは悪だくみで、私はその術中にはまる。

「なんで、私の画像を父さんに渡したの！ あ、その心配してくれ

たんだつたら嬉しいんだけど、その大丈夫だった。」

『違うよ、千里。俺はお前の心配はしていないさ。お前はしっかりしている。俺なんか心配する必要はない』

じゃあ、なんでそう問う前に兄さんは応えた。

『復讐だよ。吟哲にはね、これくらいの思いをしてもらわないと気が済まないんだよ。俺はね』

私は、私の心がその言葉が間違いであると感じた。

確かに、吟哲は兄さんをリストラに逢わせた。けれども悪いのは吟哲じゃない、会社である。そして、兄さんのやっていることは、私にやらせたことは。私のしたことはすべて、見当違いな逆恨みなのだ。そんな理由で夕紅を傷つけるのは誰がどう見たって間違いであり、悪なのだ。

けれども、一方で私は兄さんにその事を言えないでいた。好きであるなら、これからも好きであり続けたいなら私は兄さんの間違いを正すべきだった。それを言えないでいたのは、兄さんに嫌われるのではないかと言う幼稚なもののためであった。

『でも、安心してくれ千里。俺はあと一回、父さんの事を含めれば二回。吟哲に復讐すればはじめをつけるさ』

私はほっとすると同時に、兄さんの言う二回目の復讐と言う事が気にかかった。

「何をする気？」

私は、冷静を装いながら尋ねた。焦りながらも、私の心変わりに気取られないように細心注意を払って。

兄さんは、笑いながら、そう、とても楽しげに語った。

『キズものにする。それが、俺の最後の復讐だ』

私は、その言葉を聞いて

その電話がかかった時、私は二人分の料理を作っていた。私は喋

れなかったから、結局留守番電話にしてもらうしかなかった。一瞬、吟哲さんからかと思っただけでもディスプレイは学校からのものだった。

電話の主は、担任だった。

ピー、という発信音の後に担任は話を始めた。

『水元、先生だ。不味い事になった。お前が連れてきたインコの事を問題になった。二年四組の朝野は解るな？ お前のクラスメイトだ。あいつの親が娘はいじめられているとかいいだしてきてな、バカバカしい朝野はいじめられるってタマじゃないのに。けれども、明日お父さんと一緒に学校に来てほしい。先生はお前の弁護はするけど、あてにはするな。本当だったら任せとけって言えればいいんだろうけど、上の言うことは聞かなきゃならん。以上だ。明日の十時、ちゃんと来いよ』

内容は確かに筋が通ったものだ。千里ちゃんとは和解したけれども、親がその事を知ったとするならその反応は当然だろう。

そして、私はうらやましいと思った。吟哲さんは私が千里ちゃんと同じ目に逢ったらこんなふうにな怒ってくれるだろうか？ 意味のない自問だ。愚問、という意味ではなく、答えの出ないという意味で。

『じゃあ、聞けばいいでしょ？』

インちゃんは気を使って声をかけてくれた。不思議とただの鳥であるはずのインちゃんだが、動物のする表情ではなくどことなく飄々とした人間のする顔をしていた。

『できないよ。そんな質問に意味がないから』

私と吟哲さんの冷えた関係を思えば、それは当たり前だった。どう言ったところで今までの事を振り返れば、吟哲さんの解答は真実味は帯びない。吟哲さんが嘘をつくとは思えない。ウソが苦手な節があるから。けれども私のそんな真つ正面から向かった質問に吟哲さんが戸惑ったら、私は 私が傷つくだけに終わってしまいそうで、怖かった。

私はケータイを取り出し、吟哲さんのアドレスを見た。××さんのアドレス。

件名：明日一緒に学校に行きましょう。

本文：学校の担任の先生からの連絡で、インちゃんの事で問題が起きたらしいのです。

ここまで書いて、私は自分に非がある事を書こうか迷った。インちゃんの事で、と書いてあるから問題は私の側にあるということとは解るだろう。

そして、私の心の天秤の片側に置いてある錘は期待だった。

もし、私が悪いのに吟哲さんが私をかばってくれたら　そんな期待だ。

『大丈夫でしょ、あのバカも今なら夕紅ちゃんを守ってくれるでしょ！』

『そ、そうかな、私は胸中で思い、インちゃんはきつぱりと』
『そうでしょ！』と喋ってくれた。

私はその言葉を信じてメールを送信した。

その日も、夕食は一人で食べた。

5章

日曜日も部活があった。午前中に終え、図書館で時間を潰してから校長室に向かった。初めて入る場所であったからどんなものかと思っただが、立派なものだった。それに気圧されて柄にもなく緊張した。

「……朝野千里くんかな？」

はい、と返事をして私は一歩前に出た。夕紅と吟哲はまだ来ていない様子だった。この部屋にいるのは校長と教頭、二年四組の担任、そして私だけだ。校長はさすがにどっしりとしていたが、教頭や担任はどこか落ち着きがない。やはり、モンスターペアレントは怖いのだろう。私が教師だったとしたら、やはり怖い。

促されて席に座った。

「お父さまはいつ来られるのかな？」

今は十四時四十分だった。恐らく後十分ほどしたら、私はそう言っただけで教師たちに覚悟をつけさせた。

父さんや夕紅達が来る前に私と教師たちとで事実確認をした。私が糞をかけられた事といじめにあった事。それについて、ウソは言わなかった。ただし、朱美の名は出さなかった。あんな奴でもバスケ部の部員だ。こんな事で足を引っ張って欲しくなかった。

そして、私は一つ卑怯な真似をした。私が夕紅にした事を一切喋らなかつたのだ。

夕紅には、ひどい事をしたと思っている。言い訳もしない。できない。けれども、私が喋らなかつたのは話をややこしくしたくなかつたからだ。ただでさえ、話が複雑なのだからこれ以上話を広げたら訳がわからなくなるだろう。

そして、教師たちに語りながら思ったのは夕紅や吟哲には話せて、父さんに話せないのは何故かということだった。やはり、恥だと思っただけだからなのだろう。恥と、思えるようになったのだ。

夕紅と吟哲は一緒に入った。時計は十四時四十五分を指していた。吟哲はスーツ姿であったが似合っていない。前に見た時もあったのだが筋肉質過ぎて、スーツがぴっちりとし過ぎている。それがどこか笑いを誘う。夕紅はいつもの制服姿で可愛らしかった。そして、問題のインちゃんも夕紅の肩にとまっていた。

夕紅の表情はおどおどとしてはいたけれども、それでもどこか嬉しそうだった。これから起こる事を考えればその表情はすぐ消えるのだろうか、やはり吟哲と一緒にいる事が嬉しかったのだろう。

対して吟哲は伏し目がちで、でかい図体をしながら下ばかり向いていたので暗い印象をはつきり与えていた。見方によっては教師たちよりも緊張しているように受け取れた。

夕紅達は私の対面に座り、例によって私と同じように事実確認をしていた。その段取りの悪さに呆れを覚えた。

校長と教頭が驚いたのはインちゃんだった。夕紅の口の代わりに事実確認に対して答えていた。担任は既に知っていたのだろうから、校長たちに比べ驚くということとはなかった。けれども、苦いものが顔に走っていた。恐らく、私たちと同じようにインちゃんに痛い目を見せられたのだろう。

そして、五十分。校長室の扉に重く叩くノックが響いた。

「失礼する」

そう言っつて、父さんは校長室に入ってきた。パカパカとスリッパを鳴らしながら私の隣に座った。

「……父さん、正装で来てつて言っつたじゃない」

父さんの格好は土方の人が着る作業着を着てきた。しかも、汚れていた。

けれども、父さんは気にした様子も見せずに、

「俺に取っつちゃこれが正装なんだ。ガキは、そんな細かい事を気にするな」

と、私がせつかく耳打ちしたのにでかい声で聞こえるように喋つた。

私は、父さんが好きだけれども、こういうところは苦手であった。
(夕紅、いいなあって顔をしない！)

対面の夕紅に視線を向けると、羨ましそうな顔をしていた。こんな羨ましいかなあ。

「まず、単刀直入に言う。校長先生、教頭先生、担任の先生、あと嬢ちゃんに、嬢ちゃんのお父さん。娘はいじめを受けています」

「ちょよ、ちょつと父さん」

確かにこういう自分の子供がいじめを受けている事を学校側にいうケースの場合、主導権は親が取らなければならないものの本には書いてあった。けれども、父さんの口ぶりは断定的で、いいのだけれども、それは果断に過ぎると言えた。

「いいからお前は黙ってる」

父さんは私を言葉と視線で制し口上を続けた。

「こいつがいじめられていると知ったのは昨日だ。それでこんなに早く学校に来て娘がいじめられている、と騒ぐのは親バカと言っちゃ、親バカだ。だが、そのどこが悪い？ 娘は楽しいはずの学校生活が一変しちまったんだ！ しかもなんだと！ 鳥の糞だあ？

聞けばそのお嬢ちゃんが飼っているインコを持ってきてこいつにぶっかけたつて言うじゃねえか！ ふざけるなよ？ 女が命より大事にして、誇りに思い、自慢としている宝物に糞を引っ掛けたただあ？ 嬢ちゃんよお、お前さんは一体何さまだ？ そして、嬢ちゃん

のお父さん。あんたはどういう教育してんだあ？ 担任の先生さんはそんな事にも頭が回らねえんだ！ アホか！？ お前らは全員阿呆だ！ そして、だ。俺はケータイの事なんてよく解らねえ。けど、それがどんなに危険かは解る。娘はクソをひっかけられた事を、他人様に面白おかしく広められちまうんだ！ もちろん、これは先生やら嬢ちゃんたちには問わねえ。問えるもんでもないし、もうやっちゃまったことはだれにも止められねえ。じゃあ、俺は誰にそれを問い詰めればいいんだ？ おい？ もう一度聞くぞ？ だれに責任を取ってもらえりゃいいんだ！ ああ！？」

父さんはこめかみに青筋を立てて激昂し、倒れるんじゃないかと思わせた。私はこんな父さんに思われているという事が嬉しかった反面、これは手をつけられないなと冷めた意識は思った。

担任や教頭は慌てた様子で必死に父さんをなだめようとした。

「お、お父さん、落ち着いて」

「落ち着けだあ？ このすつとこどつこい！ てめえが俺を落ち着かせてくれなかったんじゃねえか！」

これでは取りつく島もない。モンスターペアレントが酷いとは聞いていたけれども、これほどとは。

だが、校長はさすがに冷静だった。

「お父さま、お怒りのほどはごもつともです。ですが、私たちの言い分も聞いて下さいませんか？」

やんわりと言った校長に父さんも毒気が抜かれたのか、いいだろうとこぼしふんぞり返って話を聞く態度を見せた。

教頭が担任の名前を呼んで事実を話すようになってきた。

「は、はい。朝野、あ、いや、千里さんは確かに夕紅さんが連れてきたインコの糞をかけられたそうです。これは、ほかのクラスメイト達や千里さんご自身からも聞きました」

父さんは当たり前だ、と言ったが話の腰を折るようなことは言わなかった。少しは冷静になったのだろうか。

担任はつづけた。

「ただ、いじめを受けた事についてはお父さまの来訪が急だったため調査はまだしておりません」

聞いて、それは失言であると感じた。そして、思った通り父さんは怒りの矛先を担任に向けた。

「俺が来るのが早かったってどういうことだあ？ 遅けりやいいのか？ ああ？」

「い、いえ、けしてそんなことは」

ここでも担任と教頭はうろたえていたが、校長が助け船を出した。「私どもも気付けなかったのです。ただ、これには訳があります」

「……どういうことだい？」

そこで校長は私の方に視線を一度向けた。

「千里さん、貴方はいじめられていたと仰っていましたか……それはいつごろからですか？」

私は金曜と応えた。その答えに父さんはえっ、と言う表情した。それもそうだろう。いじめが起きてまだ二日しか経っていないのだから。

「ということですよ。千里さんへのいじめが始まったのはつい最近の事だったのです。私たちも生徒の心の機微、微細な変化にも気を配っています、人間です。失敗もあります」

校長にそう言われ父さんは赤面したようだった。親バカで何が悪いとは言っていたが、これでは過剰反応だった。それが父さんのいいところであり、悪いところでもある。

しかし、だ。ここまで威勢よく啖呵を切った父さんだったからこれで引き下がるという事が出来なかった。今度は怒りの矛先を吟哲に向けた。

「だ、だがよお。いじめは確かに起きたんだ。それが何が原因かは解らねえ。ただ、髪にクソをかけられたつてのは無縁じゃねえだろう。ガキどもは残酷だ。悪い事してないのに、悪いように言われるようなこともある。このメールだつてそうだ！」

吟哲に自分のケータイのディスプレイを向けた。画面は見なかったけれども、恐らく昨日兄さん、父さんは知らないし……私も言えなかった、から渡されたメールを見せているのだろう。

「チェーンメールって言うんだつてな。形を変えた不幸の手紙だ。娘はこんなのを流されたんだ！ おい、嬢ちゃんのお父さんよ！ どうしてくれんだよ、ええ？」

「お父さん、私大丈夫だから」

「お前は黙ってる！」

肩で息をしながら、父さんは怒っていた。父さんがこんなに怒ったのはやっぱり兄さんに絡んでの時以来だ。

「……土下座」

え？ 私は言葉に出して父さんがなんと云ったのかを聞き返した。「お父さんよお、土下座してくれよ。娘にクソをかけてすいませんって、娘の楽しい学校生活を台無しにしてすいませんって、娘に恥をかかせてすいませんって、謝ってくれよ？ なっ？ そうでないで娘も俺もふんぎりつかねえんだよ！」

「ちょ、ちよつと父さん！」

さすがにやり過ぎだ。確かに普通の場合だったらそれも通るだろう。しかし、吟哲は夕紅がいじめを受けていたことは解っている。しかも、その主犯が私である事もだ。それを暴露される可能性だつてある。いや、確実だ。むしろ、なぜ今まで黙っていられたかのほうが謎である。

教師たちは止めに入ることはしなかった。父さんの激昂がすごいという事もあったのだから、自分たちに怒りを向けられ火に油を注ぐような真似をしたくないというのが本音だろう。この似非教師どもめ。

気になったのはインちゃんが一言も喋っていないことだ。いつもと言うには関わって日数は少ないが、ならここいらで茶々を入れて引っかき回すはずなのに一言も喋ろうとしない。

まるで、何かを待っているかのよう。

教師たちも、父さんも、私も、そして 夕紅も視線を吟哲に向けていた。みな固唾をのんで、どういう決断を下すのかと言う事が気にかかった。

そして、吟哲は口を開いた。

言葉は

「千里ちゃんのお父さんは、自分の気を鎮めたいだけにとそう言っているのでしょうか？」

物静かな口調であるが、その実喧嘩腰だった。柔らかな口調では

あつたけれども、言っていることは戦う姿勢を見せている。教師たちは慌てた。夕紅は驚きながらもどこか喜んでるように見えた。

ただ、二人だけ冷静だった人間がいる。校長と 父さんだった。父さんは淡々と、しかし熱を込めた声で答えた。

「そんなはずがないだろう、俺に謝るんじゃない。娘に謝るんだよ。それで、娘が許すつたんだつたら、俺はなーんも言えねえ。やるのか、やらないのか、どっちだい？」

父さんがそう言うと、吟哲は無言で立ち上がった。

この中では一番大きな男だ。それが動くというのはそれだけで威圧感がある。

それが 膝をついた。

よろめいたのではない。自ら膝を屈したのだ。

どよめきが走った。教師たちの困惑、夕紅の驚愕、校長は目を伏せ、父さんは嘲るでもなくその姿をじつと見た。

そして、手をついた。

「……これで、いいでしょうか？」

吟哲は尋ねた。

「男が土下座するつてのは安いつてもんじゃない。それは俺だつて解る。だが、聞く相手が違つたろ？ 聞くのは俺じゃなくて、千里だ」

父さんが横で言っているのを聞きながら、どうして吟哲がここまでするのが解らなかつた。

だって、昨日兄さんが戦わなかつたつて言つたじゃない。それなのに、どうして吟哲は戦わないんだ？ 戦える手段はある。私の夕紅いじめの暴露だ。それをすれば、こんな思いをしなくて済むのに。私が呆然とっていると、吟哲は謝罪の言葉を告げた。

「すいませんでした」

一言、そして、その一言を皮切りにインちゃんがついに喋った。

『どうしてだ！ 何故、吟哲が謝る！』

その声が響いて事情を知らないものたちは驚いた。けれども、イ

ンちゃんの様子はいつもと違うように思えた。いや、これが素なのかもしれない。語尾に『でしょでしょ』とつけるというのは明らかにキヤラクターを作っている。なら、なぜそんな事をしていたのか解らなかったが、個性でもつけたかったのだろう。

インちゃんの言葉には吟哲は答えなかった。

私は視線を吟哲から夕紅に移す。瞳は吟哲を捉えている。吟哲しか見ていない。その眼には不信はなかったけれども、今にも泣き出しそうな悲哀が灯っていた。

「ほれ、千里。嬢ちゃんのお父さんが謝ってる。許すのか、許さないのか、はっきりしなさい。それが礼儀だ」

お父さんに言われて、私ははっとして吟哲を見た。深々と頭を下げている。

私が声をかけようとして、夕紅が立ちあがった。一度だけ、吟哲さんを見て、校長室から去っていった。

「ゆ、許します！ ちょ、ちょっと、夕紅待つてよ！」

『一樹、女が出てきたぞ』

「オーケー、じゃ手筈通り頼む」

ケータイにかかってきた電話を受け取り、俺はこれから起こる事を想像して楽しんだ。

「吟哲、苦しんでくれると良いけどな」

呟く。その言葉に小刀祢が反応した。

「一樹もネチっこいにゃー。直接いたぶればいいのに」

小刀祢は猫耳を、俺の趣味ではない小刀祢の趣味だ、スイッチを使いながらひくひくさせていた。

「いったらどう？ 吟哲は空手の使い手だ。それを痛めつけるのは結構な労力、手駒、そして力がある。力攻めなんて、バカにする事だよ」

「それでも私には貴様の逆恨みの方がバカにする事のように見えるがな」

小刀祢とは何もかもが対照的な美鈴が口をはさんだ。彼女たちは俺の手駒であつたけれども、敬いつて物が無い。ただ、それを強要したことは一度だつてない。敬意は勝ち取つていくものだ。

「どうして、自分で動かない？　これはお前の復讐だろう？」

美鈴の低い声が気持ちよかつた。相変わらずいい声をしている。

「ミーちゃんは真面目だにやー。単に一樹は怖いだけだよー。安全なところにおいて、女の子を痛めつける、あまつさえ純潔も奪う。そんな卑怯者なだけだにやー」

「その卑怯者が　君たちは好きなんだろう？」

「一樹のそういうところは嫌いだけだよー」「貴様のそういうところは鼻につく」

ベッドの上では従順なのにね、と思つたけれども言葉にしない。

刺されそうだからだ。

そして、俺は言う。自己暗示のよつに。歌うよつに。儀式のよつに。

「さてさて始まりますよ？　俺の復讐が。さてさて終わりますよ？

吟哲の希望が。えっと、えーつと……しまった、ここまでカツコつけた演出したのに、セリフここまでしか考えてなかつた！　小刀祢、美鈴、なんかないかな？」

「なんだあれ？」

「シツ、見ちゃダメだにやー。あれは中二病だにやー。移ると一生後悔するにやー。主にマンガを見るとうずき出す症状だにやー」

それはまずいな、と美鈴は言った。美鈴はマンガ好きだからな。

「じゃ、私らは帰るわ」

「じゃーねー、一樹いー」

引き留めるわけにもいかない。なにしろこれから女の子のレイプを見るのだから。それを気の置けない彼女たちであつたとしても、女の子たちだから、見ていて気分のいいものではないだろう。

それでも一人はさびしかったな。一人でやる遊びを俺は知らなかったし、コンピューターを使った遊びと言うのも苦手だ。

仕方ないので、一人で条件しりとりをしながらパーティーまで待つことにした。

条件は二つ。最後に『ん』で終わるようにする。五十音をすべて使う。その際重複はいくつあってもいい。これがなかなか難しい。ルービックキューブほどではないが、なかなか奥が深い。

それを八割型終えたところで、インターフォンが鳴った。時計を見る。四時十分を少し過ぎたあたりだった。

「誰だ？」

小刀祢たちではないだろう、かといってほかの手駒たちは吟哲の娘を誘拐しているころだ。車を何回かに分けて使うように言っていたから、ほぼ全員が動いているはず。

玄関に立ち、魚眼レンズからのぞくと、意外、いや意外と言うほどでもないか、人物が立っていた。

名を 朝野千里。

俺の妹がそこにいた。

時間は遡る。

「待つて、待つてよ、夕紅！」

学校から少し離れたところまで私たちは走った。すぐ息が切れると思った夕紅は、半ば肩で息をしながらそれでもなお走っていた。

交差点の信号が赤になったところで、ようやく止まった。私は急に止まれず夕紅を後ろから抱きとめる形でしがみついた。インちゃんはその拍子に夕紅の方から飛び退った。

「……どうしたの？ なにがあつたの？」

私は心配しながら夕紅に尋ねた。夕紅は震えている。泣いているのか、と思っただけれど笑っているようだった。そして、声は出てい

なかった。

『……やっぱり、やっぱりダメだったよ……吟哲さんは　吟哲さんは私の事なんて考えていない！　私の事が、私の事が　嫌いなんだ！』

期待したのが間違いだったんだ、インちゃんを通して夕紅は語る。私はそれを聞きながら、うちの父さんと似ている所が夕紅にはあるんだと気づいた。

「夕紅」

『何よ、千里ちゃん。バカにしてるんでしょ？　私が、こんなんだから……私が　！！』

パン、と乾いた音がした。いや、私が鳴らした。

夕紅の頬を平手で殴った。

夕紅は何が起きたのか解っていないような顔をした。

「甘ったれた事を云うんじゃないよ」

『どこが、甘えているのよ！　私はいつもちゃんとやってきた、家の生活費の管理だってちゃんとやってきた、掃除も皿洗いも　食事も、みんな！』

「じゃあ、聞くけど。夕紅は吟哲に　自分が嫌いかなんて聞いたのか？　そして、嫌いつて言われたのか？」

それは、夕紅は口ごもる。

「それは妄念だ、夕紅。妄念なんか甘えるんじゃない。甘えるなら吟哲に　お父さんに甘えなさい」

いいながら、説教は性質にあわないんだけどなと自嘲した。

夕紅を抱きすくめた。泣いていた。泣き虫だな、と思ったけれども私もこいつの前で泣かされた事を思い出した。

夕紅が自分から離れたので、私も回していた腕を戻し夕紅に向き直った。

「大丈夫か？」

『……うん、平気だよ』

「じゃ、帰るか。行きは吟哲さんと一緒に来たんだろう？」

『そう、だけど……帰ったんじゃないかな、吟哲さんは』
「妄念」

私は責める口ぶりで呟いた。夕紅にも聞こえて意味もわかったよ
うで慌てた様子で『ご、ごめん』と言ってきた。

「信じるよ、お前のお父さんを、さ」

『……うん』

私たちは学校へと向かった。その間に私のケータイに電話がかか
った。誰だろうと思ったら、父さんだった。

『おう、千里。父さんは先に帰ってるからあんま遅くなるなよ、じ
ゃ、ああ後、夕紅ちゃんと仲良くしてやれよ?』

「え、あ、うん」

じゃあな、とだけ言って父さんは電話を切った。まあ、私は自転
車で来ていたから車に乗る訳にはいかなかったからいいのだけれど
も。

夕紅の視線がムズかゆかったので、私は尋ねてみた。

「やっぱ、夕紅なんかからすると羨ましかったりするの?」

夕紅はコクリ、と首を振った。

『私も　私も吟哲さんとそんなふうになりたいなあ』

「なれるよ」

短く力強く断言した。

けれども、その言葉はかき消された。

一瞬、と言うには時間はゆっくりだった。

黒いワゴン車が私たちの横を通り過ぎようとした。そこから男達
が飛び出してきて、夕紅を掴んだ。

抵抗する夕紅。インちゃんも微力ながらもそれにあらがっていた。
男達のうちの一人のサングラスを落とさせた。

けれど、それまでだ。夕紅はワゴン車に連れ込まれた。男達は夕
紅の身体をまさぐり、ケータイを取り出して地面に捨てた。車は走
り去った。私はその間、なんにも出来ずに状況も呑みこめなかった。

だが、時間がたつと解った。これが昨日、兄さんが言っていた吟

哲への『復讐』なのだ。

『サングラスとケータイを拾うでしょ！ 千里！』

インちゃん言葉ではつとなり、私は指示に従って、何のためだろう、サングラスを拾い、まだいるであろう吟哲の下へと向かった。吟哲は学校の敷地内にある駐車場で車に寄り掛かりながら待っていた。夕紅を。

「夕紅はどうした？」

責めているわけではなかった。しかし、私は、私の兄のしたことに重荷を感じてつぶされそうだった。

『夕紅ちゃんは、さらわれたんでしょ！』

吟哲はその言葉を聞いても動じた様子は見せなかった。気のせいかもしれないが、構えていたようにも見えた。

私はあたふたとしながら警察を呼びますかと提案した。しかし、吟哲は首を縦には振らなかった。

「警察は信用できない訳じゃない。けれども彼らに頼り切ってしまうつては裏をかかれるだろう。相手は、あの一樹なのだから」

聞いて、私はどうして吟哲は兄さんがこの事件の首謀者である事を知っているのだろう、と疑問に思ったが、話の腰を折る訳にもいかない。事態は一刻もあらず。

『それに夕紅の前でカツコつきたいしな』

吟哲の声でインちゃんは代弁した。それを読まれた事を知って吟哲は顔を真っ赤にした。危険な事態だというのに自身の幼稚な考えを知られたからだろう。

動き出そう、と言う時にインちゃんが言葉を発した。

『じゃ、なんで謝ったんでしょ？』

インちゃんの言っていることは先刻の土下座の事だろう。確かにそれは私も腑に落ちなかつたけれども、今はそんな話をしている場合ではないだろう。

吟哲は、インちゃんの問いに答えた。

それは意外な答えだった。

「千里ちゃんを、守るためだった」

私は、えっ、と思った。吟哲が何を考えているのか私には理解できなかつた。インちゃんもそうだったようだ。心を読めばいいものをインちゃんは言葉を発して吟哲に尋ねた。

吟哲は応えた。

「夕紅の、娘の初めて家に連れてきた友達だったんだ。それを私が余計な事を言つて、友達じゃなくなつたらあの子が可哀想だ」

筋は通っているように思える、私が言う前にインちゃんが断罪した。

『それは一足飛びの考えでしょ？ 父親が第一に考えなければいけないことは娘の幸せよ。友達は夕紅自身が選ぶ。貴方じゃない。そんなことも解らないの？』

暗に、私は夕紅の友達ではないと言われているようで心苦しかつた。けれども、インちゃんに言われるのは仕方ないだろう。夕紅のいじめの現場を見てきたのだから。

吟哲は、言う。

「私は確かに、一度間違えた……いや、一度どころじゃない 何度も何度も間違えた」

けれども、吟哲は言おうとした。

『今度こそ、間違えない……！』

決めゼリフはインちゃんに取られてしまった。

『解つたわ』

そして、インちゃんは私の肩にとまつた。それから、私は慌てた。「ご、ごめんなさい。車のナンバーをチェックするのを忘れていました……」

いいながら、なんて失態だと思った。これでは間抜けだ。ケータイも私たちの手元にある。これではGPS機能で夕紅を追う事ができない。

けれども、インちゃんはもちろん吟哲も慌てはしなかつた。

「千里ちゃん、そのサングラスは？」

「え、あ、こ、これ？ 夕紅を誘拐していった連中がつけていたもの、です。はい」

「鳥」

『インちゃんでしょ！ なんでしょ？』

吟哲は私の手からサングラスを取りインちゃんの前でそれを見せた。

「お前が代弁できるのは、人だけか？」

『よく気が付いたでしょ。インちゃんが代弁できるのは生き物とモノだけでしょ。サングラスの声も代弁できるでしょ！』

だからか、私はインちゃんの指示の的確さに驚くとともに本当に鳥なのかと疑ってしまった。

ともかくこれで、確かに夕紅を助けにいける。だけれども、私はその思考の片隅今回の事件の黒幕の兄さんの事を考えていた。

兄さんは諦めるだろうか？ 兄さんの何が一番信じられるかと言えば、そのプライドの高さだ。恐らく今回の件で失敗すれば兄さんは諦めてくれるだろう。しかし、私はその信頼に確信を持ってなくなっていた。

兄さんは逆恨みをしただろう。けれども無関係な娘の夕紅を傷つけるような事をする人ではなかったはずだ。

兄さんは、変わってしまった。昔の私はそれを気づくことなく、盲目的に兄さんに固執し続けた。

でも、兄さんも変わったが、私も変わった。昔のように兄さんが第一ではなくなった。その事が幸福であるのか、不幸であるのかはわからない。

けれども、と私は思う。

(……はじめをつけなければ)

「吟哲」

私は呼び捨てにして彼を呼んだ。吟哲はそれを不快に思った様子は見せなかった。ともかく私たちには時間がない。怒る暇もないくらいに。

「なんだ？」

私が言う前にインちゃんが喋ってくれた。

『私にインちゃんを貸してほしい』

「……そう言うことだ」

吟哲は躊躇した顔を見せた。視線を私ではなく、インちゃんに向けた。それに視線を返してインちゃんは応えた。

『吟哲。阿笠の言葉を思い出すんだ。そして　　今がその時だ』

「……いいだろう」

何に使うか、ということとはインちゃんも吟哲も問わなかった。

私は、インちゃんを肩に乗せて兄さんのマンションへと向かった。

兄さんとの　　一樹との決別するために。

私は怯えていた。状況も呑みこめないでいた。いや、少しずつは解っている。誘拐されたのだ。目的はなんだろう、お金だろうか、それとも恨みだろうか。いずれにしても私には覚えがなかった。

大きなワゴン車で私を含めて五人乗っている。いずれも二十代くらいの男達で、小さな私からすればそれだけで恐怖を覚える大きな体躯であった。私は逃げられないように後部座席の真ん中に座らされていた。

車は何回かに分けて乗り換えた。変わったのは車だけではない、男達のメンツも乗り換えるたびに変わった。

車で移動する間、男達は私を無視するように談笑に興じていた。それでいて、私が逃げようとするともまるで親猫が子猫の首根っこを掴むようにして、車に押し込めた。私はそのぞんざいな扱いに怒りを覚えた。恐怖が引つ込んだわけではなかったけれども、物みたいに扱われて許せるほど私は寛容でも聖人君子でもない。

そして、その男は最後に車を乗り換えた時に乗り込んできた。

「はじめましてー、俺ゼンジ。よろしくー」

耳にピアスをし、頭はモヒカンにしている前部座席に座っている男だった。

私が声を出せないでいると、モヒカン男は殴ってきた。平手ではなく、握り込んだ拳でだ。

痛かった、けれども声が出せなかった。モヒカン男の仲間がやめるよと言って、私を守ってくれたがそれを喜ぶことはしなかった。

モヒカン男が続ける。

「返事をしろよ、ええ？　口があるじゃねーか、舌があるじゃねーか、顎があるじゃねーか？　おまけに耳もある。喋れよ、なんとか言えよ！　ああ！？」

私は痛みと恐怖と怒りで声を出したかった。声を張り上げて吟哲さんの名を呼びたかった。

口を開き、声を出そうと何回しただろうか？　けれども、喉から声は滑りださない。私の思いは誰にも伝えられない。ケータイも：

…インちゃんはここにはいないのだから。

私が喋れないという事が車の中の男達に伝わったようだ。だが、モヒカン男は気付かなかったようで朗々と喋っていた。

「これから俺達はお前を犯す。ああ、別にお前が可愛いとか好きとかは思っていない。物のように犯される。せいぜい、その時にいい声をあげるよ」

そう言う男達は笑いだした。言っていることは解った。私だって女である。そう言うことに関心がある。

そして、それに対しての淡い期待と幻想もあった。それが裏切られる事に対しての憤りや不安はあった。けれども、悲しみはない。

私は　諦めてはいなかった。

けれども、どうしてそう思えるのか解らなかった。

その顔に気づいて、モヒカン男は怒りを覚えた表情で私に食ってかかった。

「んだ？　そのつら？　おいおい、もつと泣きわめいてるって、それとも何？　これから起こる事を喜んでんの？　うわっ、とんだビ

ツチだな。あの親父からよくこんな女が生まれたもんだ」

私はもうこの男達を恐れていなかった。なんと言われようとも、だ。

だって、信じている。

ああ、ようやくと気がつけた。

私が諦めていない根拠は　吟哲さんにあるのだという事を。

「やあ、千里。よく来たね」

俺は久しぶりに会う千里を良く見た。すると、すぐに気がついた。二つの事だ。一つはあからさまにおかしな鳥、インコだろうか？

が千里の肩に乗っている事。そして、もう一つは千里を知らなければ気付けない事だ。だけれども、俺はその事を口にせず家の中を案内した。

「ああ、そう言えば今日は父さんと一緒に学校へ行って来たんだっけ？　どうだった？」

「その件は、解決しました。吟哲が土下座をしてくれて」

俺はそれを聞いて噴き出してしまった。そして、千里に尋ね返した。千里は頷いた。

俺はそれが面白かった。稲見中とのパイプを持っていた事が、これほど面白い事に繋がるとは思わなかった。

気分良く笑っていると、気がついた。千里が愛想笑いすら浮かべていない事に。

その事を不思議に思った。いつもの千里だったら追従するように一緒に笑ってくれたはずなのだ。俺はその事を尋ねると、逆に提案を持ちかけられた。俺にとっては不快な提案であった。

「兄さん、こんなことはもうやめませんか？」

何を言い出すかと思えば、俺はそう言って千里の言う事に取り合わなかった。どちらにせよ、俺はこの復讐はこれっきりで終わらせ

る。有終の美と言っやつだ。

まったく

『まったく、バカな事を言うなよ。千里』

言葉が聞こえて、俺は驚いた。どこからしたものか、いやそれどころではない。俺の心が読まれたのだ。先刻の言葉明らかに俺が思った事だった。

千里は別段それに驚いた様子は見せず、淡々と説明しだした。

「兄さんの心を読んだのは、私の肩にとまっているインちゃん
いや、代弁インコなんです。兄さん」

「代弁、インコ？」

そうです、首をうなずかせて千里は応えた。

「このインコは簡単に言えば、心を読む事が出来てそれを言葉にするインコなんです」

心を読む。その言葉には理解できなかった。美鈴はマンガ好きではあるし、俺もよく読む方ではあるが、マンガのファンタジーな部分が現実起こると夢想できるほど童心も期待も持っていなかった。

だが、俺は一度心を読まれた。そして、試しにもう一度試してみることにした。

俺は、こいつが

『俺はこいつが欲しい……』

聞いて、確かに本物であることは理解できた。どういう仕組みであるのかは理解できなかったけれども、そんなことはどうでもいい。いま重要なのはこの鳥の利用価値が俺にとってすごく有益であるということだ。

千里はそこに来てようやく、微笑んだ。

「じゃあ、兄さん。私と賭けをしませんか？」

「賭け？」

インちゃんを使った賭けです、千里はそう呟いた。そして、ずっと握っていた拳を開き二枚のコインを見せた。そのコインには紙が

貼ってあり、『嘘』と『真』と書かれていた。嘘は左手、右手には真がそれぞれ有った。

「今から私が兄さんに質問をします。その答えが、私の握っていたコインの通りだったら私の勝ち。間違っていたら、兄さんの勝ちとします」

そう言って千里は壁にかけてある鏡の前に立った。

「俺が賭けに勝ったら、その代弁インコがもらえるんだな？」

「ええ。約束します」

にこやかでありながら、千里の表情は曇っていた。俺は千里には勝算がないのかな、と思った。千里は昔から考えの足りないところがある。それを人に言われて初めて気が付きなおすという事がもっぱらだった。俺がゲームしていた頃そんなことはしょっちゅうだったから、よく覚えていた。

俺は、いいだろう、と返事をする前に状況を少しだけ確認した。だが、千里はその返事を待つ前にコインをポケットへと閉まった。そして、それは俺にとってはラッキーだった。それがなければ俺はこの賭けでの確実な勝利には結び付かなかっただろうと思った。

千里がポケットへと閉まったコインは『真』だ。何故それが解ったのか？ 簡単だ。そして、千里は墓穴を掘った。

鏡である。俺は眼がよかった。左右対称の『真』という文字は鏡に映っても反転することはなかった。更によく見れば千里はコインを後ろ手で隠す事もなく、不用心にも右手でポケットにしまったのだ。

そして、内心焦った。この事がばれば、代弁インコが俺の心を読む、賭けはイーブンの状態で再開されてしまう。それは必勝の味をしめた俺にとっては避けたい事態ではあった。

けれども、杞憂だったようだ。俺は内心でほっと思ひ、顔には出さなかった。

「いいだろう、受けて立つ」

ありがとう、と千里は礼を言った。礼を言いたいのはこちらの方

だ、笑みが漏れてしまうのではないかと思ったが、ポーカーフェイスはお手の物だった。

そして、千里は質問を提示した。

「兄さんが、私の事をどう思っているのか？　ということですよ」

意外にも簡単な質問が来たな、と思っただけれども千里はさらに条件を付け加えてきた。

「ただし、妹とか家族であるとかで応えた場合は兄さんの負けです。具体的に私の事をどう考えているのかを答えてください」

それも当然ではあるだろう、と思いつながら今の言葉にどこか引かかるものを覚えた。

考えようとしたが、千里は制限時間を設けた。三分。短いようで意外に長いのが三分である。カップ麺が出来あがるのも、ウルトラマンが地球から地上で戦えるのも同じ三分ではあるが長く感じるのと同じ理屈であった。

俺は違和感を考えるのをやめた。確かに、三分は長い。けれどもあつという間だ。

そして、俺は時間ぎりぎりまで待った。最初の一分ほどで答えはまとめた。残りの二分で千里がコインをすりかえるのではないかと言う事を危惧して見張っていた。急いで答えるのはしたくなかった。これは勝てる戦いなのだ。ならば、余裕を持たなければならぬ。焦って勝つと言うのは見えていて気持ちのいいものではない。インカの黄金をやりながら、俺はそういう価値観を持つようになった。

「……時間です」

「ああ、じゃ言うぜ」

はつきりと言って、俺はこの答えを言うのはためらいがあった。けれども、そう思っているのだ。ここで嘘をついてしまったら俺は負けてしまう。そして、嘘を言った場合でも結局代弁インコが俺の心を読んで千里には俺の本心がばれてしまう。

ああ、八方ふさがりだなあ、そんなことを思ってから俺の思いを千里に告げた。

「俺はお前の事を便利で可愛い、手駒だと思っている」

そう、思っている。そして、代弁インコも俺の心を繰り返した。

『俺はお前の事を便利で可愛い、手駒だと思っている』

千里はその言葉を聞くとうつむいた。ああ、シヨックだったのだな、と俺は思った。こいつがブラコンなのはよく知っている。俺のお願いで、吟哲の娘をいじめてくれたくらいだからな。

そう、今になって吟哲の娘をずたばろにしようと言う気になったのは、二つある。ただし、同時にではない。ラグがある。

一つは、ゼンジのバカのミスで知ることになった俺達『グループ』を追っている連中のなかに、吟哲が混じっていた事だ。あまり実入りのいい仕事ではなかったけれども、邪魔されたのはちょっと不快だった。

二つ目は 千里がいじめられたということだ。稲見中の情報網に頼み、千里の髪に鳥の糞をかけられたという事件を調べてもらったら、やはりこれも吟哲の娘が絡んでいるという事を知った。

妹がいじめられてその報復。と言えば聞こえはまだまだだけれども、その実、俺の心の中で渦巻いていたのは自分のものである妹を汚された事に対しての怒りであった。病んでいるシスコンだな、自嘲した。

どの理由も俺の私的なものだった。『グループ』のメンバーは小刀祢や美鈴を除いて、享乐的で破滅的な思考を持っている人間が多い。だから、『楽しそう』と言う愉楽の感情で動いてくれる。それに今度の中学生を犯すということも、犯罪であるという事が彼らを駆り立ててくれたのだ。

彼らには彼らの目的があって、俺には俺の目的がある。それだけのことだ。

「……一つ、いいかな、兄さん」

「なんだ？」

千里は顔をあげた。厳めしい面だ。その顔を見て、俺はどこか不安に思った。見た事がある。いや妹の顔なのだからそれは見た事があるのだが、千里の表情はゲームをしていた時に見た事がある。

そう、それは逆境を跳ね返し、運を味方につけ、何より確信して見せる 勝者の表情だった。

「本当に、その答えなんだね？」

「しつこいぞ、千里。男に二言はない、なんて言わないがな」

俺は焦慮を隠せなかった。その胸中に渦巻いていたのは不安だ。たかが賭けごと、そう言えばまだ千里は自分が何を俺に要求するかも言っていない、けれども言いしれぬ惧れが俺を虜にした。

千里は、ヒントその一、と言った。

「私は、妹や家族と言ったら負けるといったけれども、言うてはいけないとは言っていない。それはどうしてでしょう？」

千里は、ヒントその二、と言った。

「私は、私の後ろに鏡がある事を知っていました。それは何故でしょう？」

千里は、ヒントその三、と言った。

「本当に、私が見せたコインは二枚だけだったのでしょうか？」

俺はそこまで聞いて、勘づいた。だが、認めることができなかった。

まさか、まさか、まさか !

千里はゆっくりと左手を開いた。

そこにあつたコインは

『真』の文字が書かれていた。

「ば、バカな!？」

俺はそうとしか言えなかった。だが、千里が言ったヒントはすべて理にかなっている。そして、俺が感じた違和感をもっと突き詰めて考えればよかつたと思つた。しかし、それも無理だつたと思つて

しまう。

なぜならば、俺は餌をぶら下げられて走る馬と一緒に走ったからだ。その餌は鏡。鏡の情報が俺をはめた。

人間は五感を信頼しきっている。そして、心は本当の意味で記録を残せないから忘れてしまう。

つまり、俺は負けるしかなかったのだ。俺が可愛く、便利であると思った手駒の妹に俺はまんまとはめられ、妹の計算の通りに事を運んでしまったのだ。

敗北感に打ちひしがれていた。しばらく、まともにものを考える事が出来なかった。

だが、三分ほど無言の時間が経ってから俺は千里に尋ねた。

「これは、本当お前一人で考えた事なのか？」

妹の成長を認められなかったからなのか、納得がいかなかったからなのか、恐らく両方の思いで俺は疑問を言葉にした。

妹は首を横に振り、自分の肩にとまっている代弁インコを指差した。

「全部、インちゃんが考えたことだよ」

「……バカな」

負けを認められないほど、自分の往生際が悪いとは思っていない。そして、俺は確かに賭けたし、二言はないとも言った。言ってしまったからには守らなければ、俺のプライドが許さない。

しかし、俺は腹が立っていた。自分にだ。俺は人に負けたのではなく、それ以下の畜生に負けたのだ。

『インちゃんは畜生じゃないでしょ！』

代弁インコは俺の心を読んだのかでかい声で言ってきた。だが、その言葉も俺の頭には入ってこなかった。

「……俺は何をすればいい？」

千里の顔を見ないで言った。千里もまた俺の顔を見ないで言ってきた。

「今後、吟哲や夕紅に危害を加えないでください」

聞いて、俺は千里の顔を見た。

「どういつつもりだ？ お前は吟哲の娘をいじめていただろ？」

「兄さんは変わりました」

何を言っつて、という言葉を千里は言わせなかった。俺の言葉をとつて、間髪いれずに続けた。

「それを私は責めません。昔の優しい兄さんに戻って欲しいとも思っつていますが、それを強要することはしませんし、出来ません。すべて、自分で決めた事です。兄さんも、私も。だから、私も変わりました。それを兄さんにとやかく言っつて欲しくありません」

ああ、と思い俺は気がついた。それを口にした。

「俺が上げた赤縁の伊達メガネはどうしたんだ？」

千里はそう言っつと懐からメガネケースを取り出し、俺に差し出した。開けると赤縁のメガネが入っつていた。

「ブラザーコンプレックスは、やめます。私はもう兄さんを頼っつたりしません。兄さんもそのつもりでいてください」

「……誕生日プレゼントを今になっつてつき返す礼儀知らずだと思わなかつたけどな」

笑いながら、俺は言っつた。けれど嘲弄するつもりはない。千里が自分で決めたことだ。そう、俺と同じように。

メガネを良く見る。レンズに瑕もなく、鼻あてのところも綺麗だつた。フレームもまっつすぐだつた。

「大事に使っつてくれたようだな」

「ブラコンでしたから」

苦笑して、俺は意地の悪い問いを始めた。

「お前は今後と言っつた、だが、俺の悪意は今、吟哲の娘に襲おっつつしている。それは無視していいのか？」

千里はこっつう答えた。

「いいですよ」

俺は驚いた。そして、笑う。口先だけだったのか、と。けれども、千里はつぶやく。

「信じていますから」

誰を、と問う前に千里は語った。それに唱和する形で代弁インコも告げた。

『「吟哲を」』

その言葉で、俺は自室に置いてある吟哲の娘を犯す手筈になっている廃工場から送られてくる映像を見れるディスプレイを観に行った。

その画面に映っていたのは

どうして、信じているのだろう。

どうして、信じられるのだろう。

どうして、信じたいのだろう。

どうして 信じていられるのだろう。

私が胸中に浮かべた自問は、似ているけれどもすべて違う事を問うていた。

けれども、私はそれが不信からきているものとは思えなかった。

自分にすら嘘をつくのが心の理だったけれども、私はただひたすらに吟哲さんを信じた。それは陰に属した盲目ではなく、眼を開いて確かに信じあえる陽のものであった。

いよいよ、私は廃工場に連れて行かれた。何回かに分けて車を乗り継ぎ、複雑にこの廃工場を目指したけれどもここが稲見市の南にある取り壊しが決まっていた廃工場であることは解った。

電気はまだ生きているようで、もしくは別なところからケーブルをひっぱってきたのだらう、まぶしいばかりの照明が暗い廃工場を照らしていた。

男達は十人ほどいた。けれども、その中に私が信じている吟哲さ

んの影はなかった。

オラッ、と言って私は突き飛ばされた。そして、私を取り囲むように男達が迫ってきた。

夢の中で犯される感覚は味わった。けれども、それは夢だ。痛みも、傷痕も、いずれ消えてしまふ。

そして、これは現実で痛みはずっと尾を引き、傷痕は私にこの出来事を思い出させるだろう。

照明の逆光で男達の表情は見えない。けれども、不気味に光る歯が私に恐怖を駆り立てた。

許しを請いたかった。泣いてしまいたかった。叫んでしまいたかった。

けれども、許しは請わない。私には非なんてなかったのだから。けれども、泣かなかった。私はこんな男達に屈する事なんてしたくなかったのだから。

そして 叫ばなかった。私は喋れなくなって初めに出す言葉がそんな目を覆いたくなるような弱音を、男たちを喜ばせるような悲鳴を、助けてという泣き言を、私は叫びたいなんては思わなかったのだから。

にじり寄ってくる男達をキツ、と睨みつける。

「いいね、いいね」「気の強い女ってどうしてこううまそうなのかね?」「ほんと、それが壊れるのが面白いからじゃね?」「あ、ヤべ、辛抱たまんねえ」「おい、どうするいきなり挿れちまう?」「じゃ、俺口で」「それよりさ」「まず、剥こうべ」「あ、靴下は残しとけよ?」「よっさん、マジヘンタイだな」

男達は笑いあつて、猥談を続けながら私の服を脱がせようした。

だが、それは出来なくなつた。軽い音がしてから、一人の男がよろめいたのだ。

「イッてえ」

ッー!

私の視線は下に向けられる。男の頭にぶつかったのは小石のようだった。

「あ？ なにこれ？ あつかー」

男はぶつかつたところに手を触れた。男の手は赤く染まっていた。それが血であると気づいてから、男達はパニックになった。冷静な奴は小石が飛んできた出口の方を見た。

ちょうど、夕焼けがバツクになっていた。

一人の男が立っていた。体格はよさそうだが、顔は見えない。けれども、私は知っている。

のどから声を出して呼びたかつたけれども、口をその人の名の形に歪めたけれども、まだ私は声が出せないでいた。

歯噛みする思いだった。インちゃんがそばにいたときはそんなことも考えなかつたけれど、欲が出たんだろう。

そう、欲だ。

私が、一番愛している人の名前を呼びたいという欲。

彼の名を　水元吟哲。

私の　お父さんだった。

異邦人に驚いているようだ。だが、私が攻撃を加えた事で敵である事を彼ら『グループ』は認識していた。数は十人。一対十では分が悪い。と考えるのは素人だ。確かに一対十ならば一の方が不利だけれども、それは統制されたリーダーがいて障害物の少ない平地ならばだ。

口汚く罵ってくる奴が六人、それに耳を貸さず、眼は動きだした二人に向けた。残り二人は、勝手に動き出した仲間を止めようと声をかけている様子だった。その中にゼンジ、と一樹に呼ばれた男が立っていた。

向かってきた男達は手近に有った鉄パイプをとり私に襲いかかった。シンプルなものだ。そして、二方向から襲ってくる。成程、少しは道理が解っているらしいな……チンピラ風情が。

私はポケットにしまっていた小石を掴み、左から襲ってきた男の額を狙い投げる。左の男はよろめいて、鉄パイプをとり落とした。額から派手に血が流れ出る。

右の男は私の隙、だと思っている、を突いて鉄パイプを振り下ろした。スピードが乗っているから消して遅くはない。だが、単調だ。私は半身をそらし、鉄パイプをかわした。ただではなく、回転して裏拳を男の向かってきた左頬にかました。対して力を入れたわけではない。だが、男自身のスピードや私が当たった頬の位置がジャストミートしたのだろう。男は吹っ飛んで気を失ったようだ。

私は左の男の意識を失わせてから、彼ら『グループ』に尋ねた。「君たちは、私の娘にまだ手を出していないのかな？」

男達の間にとよめきが走った。ゼンジという少年は、私のしたことを見てまず怒りよりも惧れが走ったようだ。

自分の強さに自信なんてものはなかったが、ゼンジの態度は正しいように思えた。

私は、私の思う強さを手に入れたことはないが　彼らより強いという強さは持っているのだから。

彼らのうちの小柄な男が語りだしてくれた。

「あ、え、その……む、娘さんは無事です！」

仲間への背信、それを彼は考えていなかった。彼らの軽薄さはある意味予想通りで見ていて苛立ちよりも胸がすくような思いを駆り立てる。

だから、私は言っただけだ。

「そうか、ありがとう。私はこれから君たちをぶちのめそうと思っている」

『グループ』に焦りが走る。口々に私への不平を言い始める。そんなものは聞かなかった。私は彼らの敵で、彼らは私の敵なのだから。そんなことも理解できていない、彼らの幼さに私はこれから気をつけようと、と思った。夕紅をこんな恰好の悪い大人にしないためにも、と。

君たちには二つの罪と二つの悪がある、指を立てて私は告げる。「君たちは罪もない会社員から卑劣な行為で彼らの給金を奪った。そして、君たちは何も悪くない娘に恐怖を与えた。これらが、君たちの二つの罪だ。そして、君たちの悪は 無恥である事。恥を知りたまえ、大人なのだから」

最後に残った人差し指を折って、言う。強い言葉で。

「そして、最後の悪は 弱いことだ」

どうやら、外道ではあっても生意気にもプライドはあるらしい。

無為に無策に 無謀に立ち向かってきた。

獲物は色々。鉄パイプ、木材、ナイフ、ボール、鉄鎚、変わりどころではスタンガンと言ったものである。

だが、それも下策。スタンガンは隠してこそ威力が上がるものだ。最初から抜き身で持ち出すものではない。それでも脅威であることは間違いないだろうが、私にはラッキーなことにスタンガンを持った敵は一番先頭に来てくれた。矢張り統率と言うものは大切なスキルだ、と場違いに思った。

突きだすスタンガンを持った手首を蹴りで跳ね上げる。スイッチを入れたままのスタンガンは主の意思に背いて、彼らの仲間に襲いかかった。それのおかげで私の敵は減ってくれた。ありがたいことだ。

その礼に私は仲間の事を心配して不覚にも声をかけた男を殴り飛ばす。と言つても顎をヒットさせただけだ。見た目は地味かもしれないが簡単に崩れ落ちた。

しかし、私にもダメージがあった。これこそ地味であるが、拳だ。徒手格闘において拳でやり合うというのは実際は間違った手法である。使うならば掌底。そちらの方が手を傷めないで済む。

やはり久しぶり、二十年くらいだろうか、の喧嘩はなれないものだ。

感電して倒れた男も含めて残りは六人。そのうちそれでも戦意盛んなのは四人と言ったところだ。

次に来た男は鉄パイプを突きだしてきた。それは私も予想外だった。武器を持った相手と戦う事で最もガードがしにくいのは突きである。その心得がこの男にあるとは思えないが、第一武器に関しての素人の私ですらわかるほど構えがなっていないかった、それでもその攻撃は私にとって防ぎきれぬものではなかったのだ。

けれども、完全に防ぎきることは確かにできなかったが、半身にそらし右手手で払う事で受け流す事は出来た。スーツが汚れてしまうことになったのは幸中の不幸であったが。

そして、そのまま肘を鳩尾にぶつける。男の呼気の仕方が耳に届いたが、悲惨なものだ。やった本人が言うのもあれだが、大変そうだな。

次に来る相手にまではまだ距離がある。私は彼らの武器を手に取った。とりあえず、一番危険で、一番使いにくい、スタンガンを手にすることにした。

だが、武器を持つことは徒手で戦う事よりも難しい。まあ、メリケンサックやベアクローと言った手にはめて使う武器ならその要領は似通ったものである。それでも、扱い方は変わらざるを得ないのだが。

そして、屍山血河よろしく、殺してはいない冗談だ、地に伏した仲間達を見て敵は私を包囲する形をとった。立ち向かってきている敵は残り四人。ちょうど前後左右に位置する形で私を睨みつけている。その形相はどれをとっても鬼のような面構えではあったが、その実戦々恐々としているのが手に取るように解った。

だから、誰も私を睨むだけで先んじて攻め入ってこようとはしない。だが、私の方も中々に踏み込めないでいた。踏み込んだら最後に残りの方角すべての敵が私の背後を突く。

ただし、私が立っていれば だ。

私は身をかがめ右手側に立った男を足払いで転ばした。男はそのスピードについていけなかった様子だ。簡単に転んでくれた。

だが、武器を手放さない。私はその事だけは褒めて、獣のように

走り右手に持ったスタンガンで男を気絶させた。

そして、私の予想通り男達は私の隙、これは確かに隙だった、を突き武器をそれぞれ振り下ろした。ここから私の賭けで膝の屈伸を使い私が倒した男を飛び越えて転がるようにその猛攻から逃れた。私が身をかがめていたおかげで、相手は武器を振り下ろすしかできない。そして私に攻撃が届くまで少々、そして致命的な、時間がかかった。そのおかげで私は逃れる事が出来たのだ。

素早く振り返り攻撃に備えた。だが、状況は一変する。

向こうの方でモヒカン頭をしたゼンジと言う少年が何かを喋っている様子だ。反響して聞こえてきたが、なんと言っているのかは聞きとりにくかった。だが、仲間たちは聞こえたようで余裕のある笑みを浮かべ、だらしなく得物を構えてきた。

その余裕がなんなのか私は理解した。こいつらは、この敵どもは一番私にしてはいけない事をしてしまったのだ。

ゼンジという少年は私の娘　夕紅にナイフを突き付けていた。夕紅は可哀想に恐怖で顔をゆがめていた。何よりも夕紅が恐いと言うことも叫ぶことも出来なかったのは一番私の心を苦しめた。

「形勢逆転だな？　おっさん」

私はその言葉に怯まなかった。ここで怯んだなら私どころか、夕紅にまで害が及ぶ。それを阻止しなければならなかった。

「どこがだ、ゼンジ。その派手な頭でよく考えるんだ。今自分たちが助かっていられるのは誰のおかげであるか。誰に危害を加えれば自分たちが危ないかを、な」

私の言葉はちよつと強すぎるくらいはあった。けれども、敬意に値しない敵どもは私の言葉で確認し合った。それは私を軽視したものではない。私に対して感じる怒りよりも恐怖が勝っている事を如実に私へ教えてくれた。

私はそれを見ながら、恫喝する。私は自分の頬に傷がある事を産まれて初めて喜んだ。私の顔は地獄の鬼も裸足で逃げ出すほど凶悪であったのだから。

「娘に手を出すな、さもなければ、お前たちが生まれしてきた事を心の底から後悔させてやる。一秒たりとも私への恐怖を忘れないようにしてやる」

敵どもは震えた。戦慄した。怯えた。逃げ出す者さえいた。

ここからは根競べである。私が勝つことは目に見えていたが、ここからは焦っては負けである。私にとつての負けが　夕紅への危害ということになったのが私は胸中で驚いていた。代弁インコがいたら『現金でしょ!』とか言っつきそうであったが、私はさしてそれを悪い気分で聞く事が出来なかった。

一人、また一人と消えていく中でとうとう私とゼンジだけとなった。

「クソ、近、近づくんじゃねえ!」

私を片手で抱えナイフを首に突き付けた男が　吟哲さんを恐れながら一歩、また一歩と後退していった。私は恐怖でナイフに目がついていた。けれども、時折吟哲さんを見る事だけはやめなかった。「聞いてんのか!　おっさん!　来んなって言うてんだろぅが!」
「お前こそ聞け。夕紅を離してくれたら、私はお前に害を及ぼさない。それは確約しよう。ただし、夕紅の髪の毛一までも本切ったのなら私はお前を許さない」

吟哲さんの声は優しくかった。優しい、と感じるのはちょっとおかしいかもしれないが、私に対してもそうだし、私を掴んでいる男に対しても優しくかった。今の吟哲さんは見た事がないくらい慈愛に満ちていた。

いや、違う。

私はこんな吟哲さんを知っている。

覚えてはいない。どこで見たのかも鮮明な記憶で思い出す事も出来ない。

けれども、私は知っている。

男との交渉、よく言えばそうだ悪く言えばなんだろう脅迫だろうか、をしながらも視線は男には向けていなかった。

私だけを見ていた。私も、首に突き付けられたナイフへの恐怖を忘れて吟哲さんの瞳を見つめた。こうして、顔を見る事が出来た機会はいつ以来だろう。私は場違いにもそんな事を思い出していた。

だが、それも長くは続かない。男の様子がおかしくなってきたのだ。

吟哲さんの譲歩は傍から聞けば、破格のものだ。男も逃げる条件が整いつつあったのに、その条件を無視してきた。

「ち、畜生！ ぶっ殺してやる！」

そう言って、男はナイフを振り上げた。

私は、目をつぶった。

次の瞬間、顔に温かい感触が飛んできた。

それがなんなのか、鼻孔からは鉄の匂いが飛んできた。

けれども、私のものではない。それならば痛いはずだ。しかし、夢のように痛みはなかった。

恐る恐る、眼を開く。

目の前にあったのはナイフの先端。そして

血に塗れた吟哲さんの右手だった……

男は自分の犯したことによろやく気付き悲鳴をあげて立ち去っていった。

吟哲さんは、ナイフを右手から取った。こういう時はナイフは取らない方がいいんだっけ、悪いんだっけと私は間違っではないが場に合わない事を考えていた。それを正し、私は言葉を出そうとする。大丈夫？ と。

しかし、出ない。私は自分の声が出せない事をこれほどまでに恨んだことはなかった。

何故、私はこんななのだろう。何故、私は弱いのだろう。何故？
疑問は尽きなかった。けれども、その思いは吟哲さんの行動で吹き飛んだ。

両腕私の体を抱きしめた。

私は、吟哲さんの腕がこんなに太い事を知らなかった。

私は、吟哲さんがこんなふうに涙を流す事を知らなかった。

そして

「大丈夫か、夕紅。恐かっただろう？ ごめんな、こんな目にあわせて。悪い、こんな悪い父さんで」

私は、吟哲さんがこんなにも私を思ってくれている事を知らなかった。

「……さん」

私は泣いていた。何故泣くか、今度の理由はちゃんと解った。けれども、一言で表すにはあまりにも複雑で、簡単に言ってしまう事が勿体なく思えた。

そして、私はようやくその言葉を自然に言えた事を嬉しく思った。

「……お父さん！」

「これで、終わったの、かな？」

瑠璃は廃工場の中で抱き合いながら涙を流す親子を見ながら彦作に尋ねた。

「ああ、終わった終わった。でも、吟さんもカッコつけ過ぎだろう？ 『娘にカッコいいところを見せたいから、私一人にやらせてくれ』とかさ？」

「たしかにな」「がはははは、熱いからいいじゃねーか？」「錦司は暑苦しいけどね」「……おい、久吾ボソツと聞いたのが聞こえたぞ？」「あ？ 聞こえるように言ったから、当たり前だろう？ それとも耳まで遠くなったのか？」「がはははは……殺す！」「や

つてみる！ この木偶の棒が！」

錦司と久吾は相変わらずだな、と思いながら瑠璃は前時代的に縄で縛ってある『グループ』を見た。けれども、不思議と悪感情は浮かんでこない。許す気はまるでなかったけれども、それでも、だ。

瑠璃の視線に気が付いたのだろう。彦作が寄り添ってきた。

「気が済んだ、瑠璃ちゃん？」

「あ、う、うん。でも、私たちのしたことって無駄だったのかな？」

瑠璃はそう思う。結果としては吟哲の娘、夕紅を救う事が出来たけれども、私たちのしたことはしなくてもよかったことだ。それは悪を許すつもりはないが、吟哲の一助になったとも思えない。

彦作は言い放った。断言する形で。

「確かに、無駄かもね」

「え？」

それに続く言葉で瑠璃は頷いた。確かに、と思ったからだ。

彦作はにこやかに

「楽しかったから、いいんじゃないか？」

相変わらず、喧嘩をしている錦司と久吾を見ながら救急車と警察を呼んでいた。

「あはははは」

俺は、笑っていた。笑うしかない。

計画はすべてペア、だ。まさか実際ペア、なんて間の抜けた言葉を使うことになるうとは思ひもしなかった。

「千里」

「何、兄さん」

千里は、こんな俺をまだ兄さんと呼んでくれた。気がつく、千里の肩にとまっていたはずの代弁インコは何処かへ消えていた。

「俺は、お前との賭けに負けた。それだけじゃない。吟哲にも、負

けた」

しかし、不思議と憎悪は消えていた。俺はきつと糺されたかったのだらう。間違っている俺を。

傍迷惑な話だったな、自嘲をこめて思った。

「契約は守る。そして、俺はどことなり消える」

俺の言葉を千里は淡々と聞いていた。どこへ行くのか、というところとも千里は聞かなかった。もっとも、俺の方も言うつもりはなかった。

「いい、女になったな。千里」

「惚れないでくださいね」

笑わせる、俺はそう呟いてもう一度笑った。

後日譚

私は、今度こそ夕紅に嫌われるだろ、そんな確信を抱きながら彼女に電話をかけていた。

開口一番、謝った。最近は謝ってばかりだな、と思った。

けれども、言わない訳にはいかなかった。インちゃんが言った通り、友達を選ぶのは夕紅なのだから。

私が話したことは、私が夕紅をいじめた理由、そして　今回夕紅がさらわれた黒幕が誰なのか、その二つをできるだけ丁寧に感情を込めずに行った。

感情をこめなかったのは、言い訳したくなかったからだ。それほど見苦しいものはないだろう。

私の予想に反して　久しぶりに聞いた夕紅の口調は冷静だった。

『そう、解ったよ』
優しげですらあった。その優しさが私には疑問であり、痛くもあつた。

「怒らないの？　兄さんがした事、いや、私のしたことは逆恨みなのよ。夕紅は何も悪くはない。だから　」

『千里ちゃん。本気で、私が怒っていないと思ってるの？』

その言葉に委縮してしまう。確かに、その言葉は恥を伴う発言だった。その事に気がつくのと、私は二重に赤面した。

『でもね、千里ちゃん。私は怒っているけど　千里ちゃんを許してはいるんだよ？』

夕紅の言葉はかわいかった。怒っているんだぞ、という女の子特有のアピールをしている。

『だから、もう謝らないで。私たちは、友達なんだから』

「うめ……あ、いや、その　」

私はどもりながら、照れたようにこぼした。

「ありがとう」

『うん』

それともう一つ夕紅に話す事があった。

「あ、私、吟哲からインちゃん借りただけど、どこか飛んでいったんだよ。借りといてなくすとか本当済まないんだけどね　そっちに帰ってきていないかな？」

『帰っていないけど』

夕紅はどこか楽しげにつぶやいた。

『きつと、お父さんの所にいるよ』

私は一応入院という形になった。手は縫われたし血もとまった。けれども、万全を期すため一日は入院しなさいと医師から言われた病院に置いてある公衆電話を使い、会社の方に今日明日と休む旨を伝えた。

消灯は九時と、私の生活リズムならまだ起きている時間帯ではあった。それでも、一人部屋をあてがわれたことは何となく都合がよいと思つた。きつと夜に来る。そんな奇妙な確信を私は抱いていたからだ。

そして、誰かやってきた。カツンカツンと音が響く。ハイヒールなのだろう、ならば女だろう、私はそう当りをつける。

私は来訪者が意外な相手だと思つた。

艶のある黒髪が月光に照りかえり美しさを際立たせ、S県ではめつたに降らなくなった雪を思わせる白い肌が印象的な　直木阿笠だつた。

「こんばんは」

「なんだか、久しぶりという気がするわね」

阿笠は口端を釣り上げた。

「私の言つた通りになつたでしょ？　まあ、実際は私のおかげじゃなくて、私の上の指示のおかげなんだけどね」

阿笠はこう言ったのだ。『代弁インコが離れる時、夕紅は喋れるようになる』と。その機会は二回あった。夕紅と千里がF市のデパートに来ていた時、けれどあの時は私は意識しなかった。『グループ』のボスが誰かという事が気にかかつていて、忘れていたのだ。そして、もう一つは 夕紅が誘拐されて、千里の手に代弁インコが渡ったことだ。

代弁インコは、いや、彼女は喋ってくれた。そのおかげで私は確信した。この機会が、夕紅の声を取り戻すチャンスなのだ、と。

「まったく、お前は一体何なんだ？」

「罪人よ、貴方達のおかげで、私の罪は少し軽くなっただけだね」

ありがとう、と笑みを浮かべた。豪奢であるはずの阿笠が楚々として笑ったの。ただでさえ美人で美人百人の中から選んだ美人だったその表情はとても魅力的に映った。

私は年甲斐もなく恥ずかしくなって、視線を下に向けた。そして、阿笠が手に持っていたのは鳥かごであった。

「連れてきているわ。この子が貴方と 最後に話をしたいって言ってきたね」

鳥かごに入っていたのは、代弁インコだった。

そして、空気を読んだのか阿笠は廊下に立って二人きりにしてくれた。

『久しぶりでしょ』

それに対して、私は久しぶりと返した。私と貴女が話せる機会が再び訪れと思っていなかった。

そして、私は彼女の名を呼んだ。

「本当に、久しぶりだ、夕子」

そう七年前に交通事故で死んだ夕子であるのだ、私はそう確信していた。

代弁インコ、いや、夕子もそれに応じ、表面的な語尾をやめた。

『いつから気づいていた？ まあ、知ってるわ。だから、言わなくてもいい。そして、貴方の苦悩も私は知っていた』

「……夕紅の事か」

そうね、夕子は頷いた。

「どうして、私に言ってくれなかったんだ？ 最初から言ってくれたなら」

『最初から言っていたら信じられた？ 無理でしょうね。だって、その時あなたは私の事を私だと思えなかったはず。代弁インコの言葉を信じられるほど、阿笠の前振りには胡散臭かった。違つかしら？』
聞こえてるわよ、廊下から阿笠の声が響いた。

『それに 急がば回れって言うついでしょ？ 私や、阿笠の狙いはそこ』

「ああ」

私は納得した。確かに、これは一つの言葉だけで得られるものではない。

『聞きたいことは何かあるか？』

「一つ、だけある」

何、とは聞き返さない。私たちの夫婦として過ごした時間は短かったが、恋人だった時間は長かった。呼吸を読むことも、思考を勘づくのも互いに来た。

夕子は応えた。私の望んでいたものを。

『夕紅は、私と吟哲 あなたの娘だ』

そうか、こぼし夕子が続けた、

『吟哲が不安に思ったのは私の日記を見たからだろうか？ あれはな、お前が夕紅への扱いがぞんざいになったからだ……思えば私もその時に聞いてやればこんな事にはならなかったかもしれないかな』

「仕方ないさ」

夕子は子供を産んだ時に言ったのだ、これからは夕紅を第一に考

える、と。

「私は、弱かった。それだけの事だ」

『でも、強くなれた。それでいいじゃないか』

そう言つて夕子はインコの身体で私の右手を見た。

『右手は大丈夫か？』

医者の話では、後遺症は残るだろうと言つていた。私がそう言つと、夕子は悲しげな顔をしたが、私は力強く言つた。

「名誉の負傷だ。夕紅を　娘を守れたんだからな」
力瘤を作り私はニツカと笑つた。

『それだけ言えれば、私も思いのこすことはない』

「……いくのか？」

ああ、夕子は言つた。

『いつまでも、死んだ奴が残つていてはよくないだろう？　生きていないんだから』

私は呼びとめる言葉が浮かばなかつた。

だが、夕子は告げた。

『吟哲！　お前はゆっくり来い。私みたいに夕紅に寂しい思いをさせるな』

言われ、私は言つべき言葉をわきあがつた。

「さよならは言わないぞ、夕子」

『解つてる。じゃ、またな！　吟哲』

それだけ言つて、私は瞬きをした。

その間に、阿笠も鳥かごも　夕子も、影も形もなく消えていた。
私の中に悲しみはなかつた。

ゆっくり歩こう。ゆっくり、夕紅を愛そう。

私は目を閉じ、明日を楽しみに待った。

私は朝起きて、時計を見た。寝坊したわけじゃなかつたけど、も

う六時を過ぎていた。

どうしよう、父さんはもう行ってしまっただろうか。私は昨日帰ってきた父さんに、一緒に朝ごはんを食べようと言えなかった事を悔やんだ。

急いで、一階の台所へと向かった。

食卓には湯気が立っている御飯と味噌汁、香の物、白身魚の味噌焼きが二つずつ並べてあった。

私はそれを見て、がっかりした。父さんはもう行ってしまったんだ。

尿意を催して私は急いでトイレに向かった。かなり慌てていて、トイレのドアを開ける前に下のパジャマを脱ぎ棄てていたぐらいだ。私はその行為をしてしまった事に恥ずかしさを覚えた。ワンクッションある。

トイレから新聞を持った　お父さんが入っていたからだ。

「おはよう」

お父さんは私を見てそう言った。

「早く入りなさい。それと、だ。いくら急いでいてもパジャマを脱ぐのは便器の上に座ったらにしないさい」

その説教に私は赤面する。お父さんは私の横を通り抜け台所に向かった。

そして、トイレをすませながら私は慌てた頭を落ち着かせた。そして、お父さんと一緒に朝ごはんを食べられる事を嬉しく思った。

食卓に行くと、お父さんは待っていた。

私は、脱ぎ捨てたパジャマを履きお父さんの対面に座った。

「いただきます」

「い、いただきます」

手を合わせて礼儀正しく挨拶をしてから私たちは箸に手をつけた。私は、少し食べてからテレビが気になった。いつもテレビを見ているのだが、お父さんはそれを気にする人だろうか。

そんな事を気にしていると、お父さんはテレビを点けた。

「ん？ テレビ、余計だったか？」

「い、いえ、そんなことはありません」

そうか、と言って食事を再開。けれども、なんとなく気不味い。会話がない、というよりどんな事を話せばいいか私は解らなかつたのだ。

けれども、お父さんは私よりも長く生きているだけあつてそんな事を気にせず、話を始めた。

「このニュースには占いがあつたな」

「あ、う、うん！ そうだよ、あ、いや、そ、そうです」

「もっと楽しみになさい。親子なんだから」

私は、その言葉が嬉しかった。

私は話した。いっつもこのニュースの占いを見ている、と。そう言つと、お父さんは私の順位も見ていてくれ、電話で知らせてくれないか？ と言つた。

「で、でも、電話代がかかりますよ？」

「問題ない。可愛い娘の声が聞けるんだ。それに私はメールの打ち方を良く解らない。代弁インコに、ああ、インちゃんだったな、教わつたが私は出来の悪い生徒だったようだ」

お父さんは先に食事を終えて玄関に行った。私はそれを見送つて、忘れ物がないかと世話を焼いた。

「なあ、夕紅」

なに？ 私は問い返した。

「今、幸せか？」

私は、その質問に笑顔で答えた。

「うん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5512t/>

代弁インコはわめかない。

2011年7月7日03時44分発行